

第二部：100人の韓国ニューカマーたちの声

제 2 부 :

100 명의 뉴커머들의 이야기

<インタビュー 1>

キム・スヒョン (20代・女性) 「日韓共同作業を夢見る、作家志望生」

2009年11月、光州出身、学生(2006年度のミスコリアの美¹に選ばれる)、日本歴1年半
インタビュアー：呉世蓮

◇ 現在の仕事 ◇

今は、学生です。ドラマの作家を志望する、学生です。ミスコリアは、職業ではなく、元ミスコリアとして社会で活躍するドラマ作家になりたいです。そして将来、批評家の方にも。そのために、日本で、日本の歴史と社会について勉強をしたいです。

◇ 日本語の勉強は？ ◇

日本に来る前に、本を読んだりしましたが、韓国の日本語の塾でひらがなから習いました。現在は2008年4月から、日本語学校に1年半くらい通っています。

◇ 日本語の習得 ◇

日本語は英語と違って韓国語と文法も似てて、似てる単語も多くて、最初は覚えやすかったけど、勉強をすればするほど難しく、中国と同じく漢文を使いながら、日本は何か情緒的な意味が入っているような気がします。

韓国で文藝創作、言語を専攻してきました。言葉を使って創作する仕事をしたいです。意思疎通がうまくいかない日本に初めて来たときに、道を教えてくれる時には、直接連れていってくれたり、身振り、手振りなどで道を案内してくれたことから、言葉についてももう一度考えられるチャンスだったと思います。日本は近い国ですけど、言葉を発しないと日本人なのか、韓国人なのか区別付かないじゃないですか。言語を使えない状態で人々と意思疎通をした経験があったからこそ、日本人のことが好きになったというか(笑)人と人として。

◇ いざ日本に来てどうだったのか ◇

韓国と似てるところもありますが、韓国よりは外国人が生活するところが多く、日本は日本という一つの国ではなく、一つの世界?と表現しても

言い過ぎではないと思います。島国である日本は、多様な国の文化があるという、多文化といえますか、アジアでありながら、西洋的な雰囲気とアジア的な雰囲気が、日本ならではの個性だと思います。知れば知るほど、宝物の倉庫のように、面白いことがいっぱいです。

あと、マックの店員さんが、50、60代のおばさんが、少女のように明るく挨拶をしながら、「いらっしゃいませ」というのを見て、とても驚きました。50、60代の方がファーストフード店で働くのをみて、日本から生命力と尊敬心を感じました。韓国では絶対見られない光景ですから。

◇ 日本に来て大変だったことは？ ◇

雰囲気がとても自由にみえて、若干は感情を表現するには、とても自由でした。しかし、厳しい社会的な雰囲気?個人主義?そのため、大人しく何かの行動をとるべき責任感を感じました。この点で、自ら成長できたと思います。

◇ どのようなところが厳しかったのか？ ◇

韓国ではバイトをしたことがなく、私の年齢と近い日本の若者の会話や関心分野など知りたくてバイトをしました。私より若い学生たち、高校生たちが親に頼らず、生活費は簡単に自分で解決しながら、学業を進めていました。その歳に、私は学校だけ通い、親からお金をもらい、私の生活のすべてを親に頼って解決したため、私より年下でも、先輩のような姿、学ぶところのある先輩だと思ったこともあります。自ら独立心を育てようと。このようなところでは、反省もしたり、経済的な観念も、現実的になったともいえます。

◇ 韓国人が多いといわれる新宿にはよく行くのか？ ◇

池袋に住んでいまして、新宿、新大久保はとても親近感があります。多様性を持っていながら、人を安らかにしてくれる雰囲気があって、よく待ち合わせの場所として人が集まるのだと思います。

新大久保の韓国人のマートには、月一回くらいは行きます。韓国人ですけど、実は新大久保にはあんまり行かないようにしているのです。その理由は、日本語を習いに来たため、なるべく韓国の文化とは接しないようにしているからです。やっぱり日本のキムチと韓国のキムチは違っていて、キムチを買うためには新大久保に行くしかないとい

¹ 韓国では「真・善・美」と順位を付ける。

思います。そして、他の日本人の友達や中国人の友達に韓国料理を作ってもらったり、何か韓国について知ってもらいたいという韓国人の欲求といいますかね、韓国を知ってもらうためには、やっぱり料理ですよ？（笑）

大学生、日本滞在歴 4 ヶ月
インタビュアー：河合優子

◇ これから日本にずっといるのか？ ◇

一応、韓国に帰り、ドラマ作家の仕事を書き、ドラマ作家に関する仕事をして、30 歳初めに、私の名前でドラマを書けるようになったら、自分の作品を、日本に輸出するか、それとも日本と韓国で共同制作をしたいと思います。そのため、日本語を通訳してくれる人がいなくてもいいように、ひとりで直接交流したくて日本語の勉強をしているわけです。

◇ 日本社会に対する要望 ◇

個人的な話で、笑ってしまいますけど（笑）
公共施設などを大きく作ってもらいたいです。生活施設？マンションのキッチン、バスなどは若干低いといいますか...

あと、日本は多文化であり、世界の文化が組み合わせられて素敵だと思いますが、ちょっと批判的な言葉でいうと、模倣の国という人もいます。その弊害が危険ではないかと思うこともあります。日本の伝統的な部分？昔のものをもう少し生かして、昔の雰囲気をかせる施設と環境に少し力を入れるとさらに素敵な社会になるのではないのでしょうか。

◇ 最後に ◇

学生として日本をこのように体験して、日本の現地の人のように、同じく生活をし、同じく働いてお金を稼いで生活をしました。これからは仕事として来日をし、まさに文化を体験したわけなので、日本に対する誤解がうまれないような文化交流ができるようにしたいです。なぜなら、日本が好きになったわけではなく、日本人たち、バイトをしながら日本人が好きになったので、人と人との関係を築きあげながら交流をしたいのです。

<インタビュー 2>

U さん (20 代・女性)「中国から韓国、そして日本」

2009 年 12 月 17 日、中国吉林省延辺出身

◇ 日本に来日するまで ◇

U さんは、1985 年、中国吉林省延辺朝鮮族自治州で生まれました。両親が 9 歳のときに韓国に働きに行ったため、祖父母に育てられた。中国生まれですが、民族学校に通い、コリア語で教育を受けたため、コリア語には不自由することなく、さらに中国語（北京語）も話すことができます。高校卒業後、両親のいる韓国に移り住み、韓国南部の大学に入学して、日本語を専攻した。大学で日本語を学ぶことにした理由としては、「日本が好きですから。日本文化とか日本料理とか、日本が好きですから、日本語を選びました」。日本語の優しい響きが好きだったという。韓国では、中国生まれということで、無視されたり、差別的なことを使われたりしたこともあったそうだ。現在、国籍は韓国である。大学卒業後、2009 年 8 月に来日した。

◇ 日本に来日してから ◇

新大久保（大久保地区）に住み、その日本語学校に通って日本語を勉強している。年間の授業料は 70 万円で、これは両親が負担してくれた。新大久保に来たのは、延辺のころの友人の紹介だった。この友人は、中国から来日し、すでに 5、6 年新大久保に住んでいるため、いろいろと日本での生活の面倒を見てもらっているという。新大久保は韓国の人が多く、韓国とあまり変わらないという印象だったそうだ。まだ来日したばかりで、日本語があまりできなくても、バイトしたり生活できるという点で、新大久保は U さんにとって非常によい場所だ。自分で韓国料理の店でバイトを見つけて、午前中は日本語学校で 3 時間半日本語の勉強をし、午後は友達と会ったり、生活費のためにバイトをしている。

来日して間もないため、まだ日本人の友人はいない。まだ新大久保以外の場所にもほとんど行ったことがないという。日本語は日本語学校とバイトで使うくらいだ。日本語学校には中国人の留学生も多いので、韓国に移住して忘れてしまっていた中国語を思い出しつつあるという。家族と離れ、一人暮らしをしている日本での生活については、「全部一人だけだから寂しいし、家族にもちょっと会いたいし。一人だけだから、何でも一人で全部します。それがちょっと大変」だという。

◇ 将来について ◇

とりあえず日本語学校で2年勉強し、その後のことはまだ考えていないという。将来はできれば日本で就職してみたいそうだが、韓国にある日本の会社に就職する、もしくは、日本語、中国語を生かして、韓国の会社で通訳として働いてみたいという希望もある。さらに、韓国料理の食材や化粧品などを日本で売るといったような、インターネットショッピングの会社を立ち上げてみたいともいう。結婚はすぐには考えていない。自分の仕事を見つけ、余裕ができたところで考えたいという。相手は、韓国の男性にだけにこだわらず、アジアの人であれば、中国、台湾、日本など国籍を問わずどこの人でもいいという。ただし、「アメリカ人はちょっと…」なのだそう。Uさんに近い容貌の人に親近感を感じるようだ。

今後、日本以外の外国へ行ってみたいか、という質問に対し、どこかに行くのは「自分の運、運命ですから、希望はありません」、「私の仕事、勉強をするだけ」と語る。生まれ育った中国から韓国へ行ったのも、韓国から留学で日本に来たのも運であり、チャンスがあったからだった、とUさんは考えている。今後もチャンスがあればどこか別の場所へいくかもしれないが、今のところ特に希望はないという。とにかく今は、住んでいる日本の生活に慣れ、人と会って勉強したいのだそう。

<インタビュー 3>

Yさん(30代・男性)「新宿は今の自分にちょうどいい」

2010年01月12日、太田出身
自営業、日本歴通算11年目
インタビュアー：渡辺幸倫

Yさんとは彼が来日する前からの14年来の友人。これまで、いろいろと遊んだり助け合ったりしてきた。最近はお互いに忙しくなって、会うことも少なくなってきていたので、この機会に話せたのはとてもありがたかった。

◇ 今の仕事 ◇

Yさんは以前、エンジニアとして会社に勤めていたこともあったが、自分でビジネスをやることに興味を持ってから一念発起。現在は4つの仕事

をこなす忙しい生活をしている。

「1つは、韓国からの依頼を受けて日本で一部の仕事をして、またそれを送り返すという仕事。もうひとつは、ある健康食品の流通関係のネットワークビジネスの仕事。で、3つ目が、いわゆる自分の知り合いで仕事を探してる人の相談に乗ってます。あとは、最近頑張ってる仕事がありまして、韓国に投資しようとしている会社の仕事を手伝ってます。」

◇ 日本での人とのつながり ◇

そんなYさんが大事にしているのは人脈。この人脈が広がるのと同時に現在の4つの仕事へと繋がっていったという。なかでも、もっとも大事にしているのは教会関係。Yさんは基督教の信者で、はじめに日本に来たときからずっと熱心に教会に通っている。奥さんともそこで出会ったし、教会では同世代の人、先輩世代の人、後輩世代の人と幅広いつきあいがある。

「今の人間関係では、教会の人間関係が一番。12年前に日本にきたときからずっと続いているから、教会の信頼関係が一番深いですね。家族ぐるみの付き合いは教会が多いですね。ほとんど教会です。」

他にも仕事上の人間関係も広がっている。仕事関係では日本人とのつきあいが多く、日本と韓国の間を取り持つ、日本人同士のビジネスの間に立つなど様々な形がある。今後はいわゆる在日韓国人の知り合いも作っていききたいという。まだまだ人脈は広がっていきそう。

ただ、人との出会いはいつも楽しいものとは限らない。イライラすることもある。

「ひとつは日本人。被害意識を持ってる日本人。もちろん在日もそうなんですけども、いつも韓国と日本を比べるんですね。別にそうしなくていいんですよ。なのに、わざわざ韓国の悪い点を見つけ出して、『日本はこうなのに、韓国はこうでしょ?』っていう感じでいう人はいますよね。わざと傷つけるんですよ。」

言っている人に悪意があるとも思わないけども、「だからどうしたいの?」といつも思うという。このような思いは、Yさん自身が、ちゃんと目的・目標を意識して日々を送ることを大事にしているところからくるようで、Yさんと同じように韓国から来た人を感じる時がある。

「最初来たときには、光ってたんだけど、マン

ネリになっちゃって。他の人がなんかやろうとしたらネガティブ発言をするんですね。『おまえさあ、そもそもだめだろ?』って感じで、言うんですよ。口出すんですよ。別に口出さなくてもいいのに。わざわざ自分の失敗の背景があるから、他の人にそれをやらせてあげないんですね。『やらせてもいいのに。成功するかもしれないのに』っていう感じで、自分は駄目なのに、他の人も駄目にさせる人。そんなことを見てたら自分も口出したくなりますね(笑)』

こんな態度をとってしまうことの多い私は、自分のことをいわれているようで実に耳が痛かった。

◇ 人生を変えたフィリピン留学と日本旅行 ◇

Yさんの現在のよな姿勢はどこから来ているのか。これまでの人生の中で影響を受けた出来事について聞いてみた。まず語ってくれた事件は、フィリピンへの英語留学。聖書について英語で勉強するサークルに入っていたYさんは英語の勉強にも興味を持っていた。きっかけは90年代初め、大学一年生の夏休みが終わった頃だった。

「先輩の何人かが、アメリカ、フィリピン、タイに行ってきたよ、など言っていたんです。『えー、行けるんだ!』と思って。そこで自分も『どんな風にすればいけるんですか?』と聞いたら、『まず軍隊に行かないといけない』って。じゃあっと思って、先に軍隊に志願したんですね。韓国は軍隊制度があつて、それが終わらないと海外に行くのが厳しいんです。だから、先に申請して、1年生終わったところで軍隊に行ってきました。」

その後、先輩をつかまえては話を聞き、ガイドブックを読みあさって情報収集をした。情報の他に必要だったのがお金。お金を貯めるために大学を休学したいと相談したところ両親が出してくれたという。このフィリピン留学でYさんの世界観に大きな変化が起こった。

「向こうの人も外人だから変な目で見られますよね。(乗り合いの)ジープに乗れば、自分だけ外人だから。みんな見られますよね。自分から見ればみんな泥棒みたいで。『え、後進国の人でしょ』という感じで。はじめはね。」

当時持っていたという自分の偏見を隠さず話す。それが2ヶ月後には。

「フィリピン人でもいろんな人がいるということ。外国人に対してもアメリカ人はこう、とかフィリピン人はこうとかそういうイメージがなくな

って。あんまり変わらないんだ。そういう風に思えたんですね。これでかなり自分の人生観が変わりました。365日24時間、全てが変わってく時間でした。フィリピンというところは。韓国の姿勢からフィリピンという韓国ではないところに移って、新しい目線で韓国を見るようになりました。」

当時の興奮が伝わる。大学4年生になった時には、交換留学で韓国に来ていた日本からの留学生を訪ねて初来日。情報はその留学生からもらったけども、やはりお金は問題。もう親には頼れない。

「ひらめいたのは、3年生の時に基督教のサークルの役員をしていると活動していたんですが、そのサークルの役員用の職員室。そこに行つて、理由を説明して、『お金がないんです』っていったら、『50万ウォンの奨学金きたからあげるー』って。『ありがとうございます!』となつてね。」

話は簡単そうだが、この経験の影響は大きかった。Yさんは直ぐに現在と結びつけてまとめてくれた。

「計画書がちゃんとあれば。やり方がわかったんですよ。フィリピンに行く前から何回かやってくうちに自分のものにした訳だから。今も同じで、今すぐフィンランドとか北極圏に行つても生きて行ける自信を持っているんです。今も投資会社の仕事では、『かなりお金があるんだけど、逆に投資先がないから困っている』状態なんです。『こんなお金、どうすればおろせるの?』と考えても、プロジェクトがないと動かさないんです。それで、『いい計画書がないといけないんだ。プロジェクトがあれば、いくらでもお金がもらえるんだ』って。同じことを分かったんです。レベルは小さいけどやり方は同じ。フィリピンにいった経験、日本の旅行の経験からですね。」

ちなみにYさんと私はこの日本旅行の際に出会った。釜山からの船に乗り合わせたのだ。その時にはYさんは日本語を全く話せなかったの、英語やつたない韓国語、日本語で語り明かした。日本上陸後も広島までの間だったが旅程をともにした。もちろん、まさか10数年後に今日のような日が来るとは思いもしなかった。

◇ 将来について ◇

「自分は、これからはずっと日本に住むつもりはありません。逆に他の国でずっといることも考えていないです。私は日本人ではなく韓国人です

が、その前に地球人です。10年前なら私は『日本か韓国かどっちかに決めなきゃいけない』と思ってたけど、今はどちらにしろ同じです。どちらの国にいても自分の生き方があるから、家族が安全でいい暮らしができていい教育環境でいい経験をつめるところだったらどこでもいいかなと思います。特に日本でも韓国でもお金がある程度あったら関係ないです。」

あくまで自分の生き方ができるところに住みたい。こんな思いが伝わってくる。今後日本にこだわらないと言うが、現時点で新宿がYさんのいう「いい経験をつめるところ」ということなのだろう。

Yさんとは初めて会った頃に、「いつか子どもができたなら、交換してホームステイさせよう」と約束をしていた。彼には既に3人の子どもがいるが、私はまだなので、最近はいつも頑張るように言われてしまう…。録音したインタビューの時間は70分ほどだったが、インタビュー前後にも最近の話をいろいろして実に愉快的な夜だった。

<인터뷰 3>

Y씨(30대·남성) 「신쥬쿠는 지금의 나에게 딱 좋다」

2010년 01월 12일, 대전 출신
자영업, 일본거주 11년째
인터뷰 담당 : 와타나베 유키노리

Y씨와는 그가 일본을 방문하기 전부터 14년 동안 친구. 지금까지 같이 놀거나 여러가지로 서로 돕고 지내 왔다. 최근에는 서로 바빠지고, 만날 기회도 적었는데, 이 기회에 이야기할 수 있어 매우 고마웠다.

◇ 지금의 일 ◇

Y씨는 이전에 엔지니어로서 회사에 근무했던 적도 있었지만, 비즈니스에 흥미를 가지고 나서 그것에 전념. 현재는 4개의 일을 해내는 바쁜 생활을 하고 있다.

「첫째는, 한국으로부터의 의뢰를 받아 일본에서 일부의 일을 하고, 또 그것을 되돌려 보내는 일. 또 하나는, 건강식품의 유통 관계의 네트워크 비즈니스의 일. 그리고, 세번째, 이른바 자신이 알고 있는 주변사람 중 일자리를 찾고 있는 사람의 상담에 응하고 있습니다. 그리고,

최근에 노력하고 있는 일이 있는데, 한국에 투자하려고 하고 있는 회사의 일을 돕고 있습니다.」

◇ 일본에서의 인간관계 ◇

그런 Y씨가 소중히 하고 있는 것은 인맥. 이 인맥이 퍼지는 것과 동시에 현재의 4개의 일로 연결되어 갔다고 한다. 그 중에서도, 가장 소중히 하고 있는 것은 교회 관계. Y씨는 기독교 신자로, 처음에 일본에 왔을 때로부터 계속해서 열심히 교회에 다니고 있다. 부인과도 거기서 만났고, 교회에서는 같은 세대의 사람, 선배, 후배 할 것 없이 폭넓은 교제가 있다.

「지금의 인간 관계에서는, 교회의 인간 관계가 제일. 12년전에 일본에 왔을 때로부터 계속되고 있기 때문에, 교회의 신뢰 관계가 제일 깊네요. 가족 모두의 교제는 교회가 많네요. 거의 교회입니다.」

그 밖에도 업무상의 인간 관계도 넓어지고 있다. 일 관계에서는 일본인과의 교제가 많다고 하고, 일본과 한국인 사이를 주선하는 일, 일본인끼리의 비즈니스 등 여러 가지 형태가 있다. 향후는 이른바 재일교포 한국인의 인맥도 넓혀가고 싶다고 한다. 아직도 인맥은 넓어져 갈 것 같다.

단지, 사람과의 만남은 언제나 즐거운 것이라고는 할 수 없다. 초조해하기도 한다. 「먼저는 일본인. 피해 의식을 가지고 있는 일본인. 물론 재일교포도 그렇지만, 언제나 한국과 일본을

대학을 휴학하고 싶다고 상담했는데, 부모님이 돈을 주셨다고 한다. 이 필리핀 유학으로 Y 비교합니다. 별로 그렇게 하지 않아도 괜찮는데. 그런데, 일부러 한국의 나쁜 점을 찾아내고, 「일본은 이러한데, 한국은 이러하겠지?」라고 하는 느낌으로 말하는 사람도 있더군요. 일부러 상처를 줍니다.」

말하는 사람에게 악의가 있다고는 생각하지 않지만, 「그래서 어떻게 하고 싶어?」라고 언제나 생각한다고 한다. 이러한 생각은, Y씨 자신이, 제대로 목적/목표를 의식하고 하루하루를 보내는 것을 소중히 하고 있는 것에서 나오는 것이고, Y씨와 같은 한국에서 온 사람에게 느낄 때가 있다.

「처음에 일본에 왔을 때에는 빛나고 있었는데, 매너리즘이 되어 버려서, 다른 사람이 무엇을 하려고 하면 부정적인 발언을 합니다. 「넌,

원래 안되잖아?」라는 식으로 말하고 맙니다. 별로 말하지 않아도 되는데, 일부러 자신의 실패의 배경이 있으니까, 다른 사람에게 하도록 내버려 두지 않게 되네요. 「시켜도 괜찮은데, 성공할지도 모르는데」라고 하는 느낌으로, 자신은 안되기 때문에 다른 사람도 못하게 하는 사람. 그런 일을 보고 있으면 나도 한마디 하고 싶어지는군요.」

이런 태도를 취해 버리는 것이 많은 나는, 내 얘기를 하는 것 같아서 사실 귀가 따가웠다.

◇인생을 바꾼 필리핀 유학과 일본에의 여행 ◇

Y씨의 현재와 같은 자세는 어디에서 온 것인가. 지금까지의 인생에서 영향을 받은 사건에 대해 물어 보았다. 먼저 말해 준 사건은, 필리핀에의 영어 유학. 성경에 관해 영어로 공부하는 씨클에 들어가 있던 Y씨는 영어 공부에도 흥미를 가지고 있었다. 계기는 90년대 초, 대학 1학년의 여름방학이 끝나갈 무렵이었다.

「선배 여럿이, 미국, 필리핀, 타이에 다녀왔어, 라고 말했습니다. 「오-, 가기도 하는구나!」라고 생각해, 그래서 나도 「어떻게 하면 갈 수 있습니까?」라고 물으면, 「우선 군대 안 가면 안 된다」라는 것.... 그래? 라는 생각에, 먼저 군대에 지원했습니다. 한국은 군대 제도가 있고, 그것이 끝나지 않으면 해외에 가는 것이 어렵습니다. 그래서, 먼저 신청하고, 1 학년 끝내고 군대에 다녀 왔습니다.」

그 후, 선배들을 붙잡고는 이야기를 물어, 가이드 북을 닥치는 대로 읽고 정보 수집을 했다. 정보 외에 필요했던 것이 돈. 돈을 모으기 위해 서씨의 세계관에 큰 변화가 일어났다.

「저쪽 사람들도 외국인이니까 이상한 눈으로 봅니다. (합승)지프를 타면, 나만 외국인이니까, 모두 쳐다 봅니다. 내가 보면 모두 도둑같아. 「그래, 후진국 사람들 이니까」라는 생각으로... 처음에는요.」

당시 가지고 있었다고 하는 자신의 편견을 숨기지 않고 이야기해 주었다. 그것이 2개월 후에는, 「필리핀인에서도 여러 사람이 있다는 것. 외국인에 대해서도, 미국인은 이렇고, 필리핀인은 이렇고 라는 이미지가 없어졌다. 별로 다르지 않다. 그런 식으로 생각이 들었다. 이것으로 꽤 나의 인생관이 바뀌었습니다. 365일 24시간, 전부가 바뀌어져 가는 시간이었습니다. 필리핀이라고 하는 곳은. 한국이라는 자세로부터 필리핀

이라고 하는 한국이 아닌 곳으로 옮겨지고, 새로운 시선으로 다시금 한국을 보게 되었습니다.」

당시의 흥분이 전해진다. 대학 4 학년이 되었을 때에는, 교환학생으로 한국에 와있었던 일본 유학생을 방문해 첫 일본 방문. 정보는 그 유학생으로부터 받았지만, 역시 돈은 문제. 더 이상 부모에게는 의지할 수 없다.

「번쩍 떠 오른 것이, 3 학년때에 기독교 씨클의 임원을 하고 있어 이리저리 많은 활동을 하고 있었다. 그 씨클의 임원용 직원실, 거기에 가서 이유를 설명하고, 「돈이 없습니다」라고 얘기하고 갔더니, 「50만원의 장학금 들어와 있으니까 줄게—」 「감사합니다!」 라고...」

이야기는 간단한 것 같지만, 이 경험의 영향은 컸다. Y씨는 곧바로 현재와 묶어 정리해 주었다.

「계획서가 제대로 있으면 방식을 알 수 있습니다. 필리핀에 가기 전부터 몇 번인가 경험이 있어서 인지 그사이에 그 경험들은 내 것이 되었습니다. 지금도, 금방 핀란드라든지 북극권에 가도 살아 갈 수 있는 자신이 있습니다. 지금도 투자 회사의 일에서는, 「 꽤 돈이 있는데, 반대로 투자처가 없기 때문에 곤란해 하고 있는」 상태입니다. 「이런 돈, 어떻게 하면 모을 수 있는 거야?」라고 생각해도, 프로젝트가 없으면 움직일 수 없습니다. 그래서, 「좋은 계획서가 없으면 안 된다. 프로젝트가 있으면, 얼마든지 돈을 받을 수 있다」라고 한다. 같은 것을 알았습니다. 레벨은 작지만 방식은 같다. 필리핀에 간 경험, 일본의 여행의 경험으로부터요.」

덧붙여서 Y씨와 나는 이 일본 여행 때에 만났다. 부산으로부터의 배에 함께 탔던 것이다. 그 때 Y씨는 일본어를 전혀 할 수 없었기 때문에, 영어나 변변치 않은 한국어, 일본어로 밤새 이야기했다. 일본에 도착한 후에도 히로시마까지의 여정을 함께 했다. 물론, 설마 10 여 년 후 오늘날 같은 날이 온다고는 생각도 하지 못했었다.

◇ 장래에 대해 ◇

「저는, 지금부터는 계속해서 일본에 살 생각이 없습니다. 반대로, 다른 나라에서 계속해서 있을 생각도 없습니다. 저는 일본인이 아니고 한국인이지만, 그 전에 지구인입니다. 10년전이라면 나는 「일본이나 한국 어느 쪽인가로 결정하지 않으면 안 된다」라고 생각했겠지만, 지

금은 어느 쪽으로 헤라 같습니다. 어느 쪽의 나라에 있어도 나만의 삶의 방법이 있으니까, 가족이 안전하고 좋은 생활이 가능하고, 좋은 교육 환경에서 좋은 경험을 할 수 있는 곳이라면 어디라도 좋다고 생각 합니다. 특히 일본에서도 한국에서도 돈이 어느 정도 있으면 관계없겠습니다。」

어디까지나 자신의 삶의 방식대로 살아갈 수 있는 곳에서 살고 싶다. 이런 생각이 전해져 온다. 이후에도 일본을 고집하지 않는다고 하지만, 현지직장에서 신쥬쿠가 Y씨가 말하는 「좋은 경험을 채우는 곳」이라고 하는 것일 것이다.

Y씨와는 처음으로 만났을 무렵에, 「언젠가 아이가 생기면, 교환으로 홈 스테이를 시키자」라고 약속을 했다. 그에게는 이미 3명의 아이가 있지만, 나는 아직이므로, 최근에는 언제나 노력하라고 소리를 듣는다. 녹음한 인터뷰의 시간은 70분 정도였지만, 인터뷰 전후에도 최근의 이야기를 여러 가지 할 수 있어 실로 유쾌한 밤이었다.

<인터뷰어 4>

PHさん(30代・女性)「幼稚園は小学校の予備教育？」

2010年2月25日、ソウル出身
日本語学校生、日本歴1年
インタビューア：武田里子

◇ 略歴と家族 ◇

PHさんは1976年生まれの34歳。4人きょうだいの末っ子で、自宅はソウルの景福宮の近くにあり、子どもの頃はきょうだいや友だちと公園などでよく遊んだ。学校が休みの時には、釜山にいる叔母(母親のきょうだい)のところに泊りに行き、いとこたちとおいしいものを食べたり、一緒に遊んだ楽しい思い出がたくさんある。両親は72歳。今のところ健康で、2人で旅行に出かけたりしているが、PHさんが一日も早く帰国するのを心待ちにしている。

一番上の兄は旧ソ連に留学したことがある。その影響があったのかもしれないが、ずっと海外で暮らしてみたいと思っていた。大学を卒業後、小学校の教員として働いたあと、幼稚園に転職した。自分の適性としては、幼稚園の教員に向いていると思うし、幼児教育の重要性を感じている。子どもたちに遊びを通じた友だちとの関係づくりや情

操教育をしたいと思っていた。しかし、実際に仕事を始めてみると、保護者からは遊びよりも小学校に入ってから勉強に役立つ教科学習に力を入れてほしいというプレッシャーが強く、PHさんが思い描いていたような幼児教育を実践することは難しかった。また、問題行動が目立つ子どもは、親に原因があることが多いと感じるようになった。理想と現実のギャップ、幼児教育を通じて見えてきた親子関係の問題などを考える中で、カウンセラーへの興味がわいてきた。カウンセラーになるためには、心理学を勉強しなければならない。

心理学を学ぶだけなら韓国の大学に入ればいい。でも、PHさんには、留学してみたいという年来の夢もある。そんなPHさんにとって日本に留学して心理学を学ぶことは自然な成り行きだった。しかし、その夢の実現の前に立ちふさがった最初の関門は家族の説得だった。家族に了解をもらうまでに2カ月ほどかかった。家族には安定した仕事についているのに、なぜ、留学する必要があるのかが理解できないようだった。それでも最後は、「今できることをしっかりやったらいい」と送り出してくれた。

◇ 韓国の幼児教育の問題点 ◇

韓国の受験競争の激しさはマスコミにもよく取り上げられるが、そのため幼稚園は小学校入学前の予備教育機関としての位置づけが強く、保護者もそれを望んでいる。そのため幼稚園では、子どもたちを集めるために、ハングルの読み書きや算数だけではなく、英語教育も取り入れなければならない。そのため外国人教員を雇っているところもある。

幼稚園の教員の給与は、日本円に換算すると、公立が24万円、私立だと20万円前後。給与は小学校の教員の方が高い。PHさんが勤めていた幼稚園は、5歳児クラスが20人、6歳児クラスが25人、7歳児クラスが30人だった。5歳児は2人の教員で担当するが、6歳児と7歳児は担任が1人になる。

最近では園児の8割は一人っ子である。韓国では教育費にお金がかかるため一人っ子が多い。しかし、一人っ子の子どもたちを見ていると、きょうだいで遊んだ経験がないため、我慢をしたり、おもちゃを他の子に譲ったりすることができなかつたり、どうしても自己中心的になりがちで協調性に欠ける傾向がある。PHさん自身は、一人っ子は良く

ないと感じている。

子どもたちは9時に登園し、午後2時に退園する。教員はそのあと翌日の教材準備や親との連絡などがあるので、帰宅できるのは早くも6時。遅い時は8時を過ぎることもある。10年間の教員生活は、とにかく忙しかった。子どもたちの問題により深くかかわるためには、カウンセリングスキルが必要だと感じていたが、立ち止まって考えたり、勉強する余裕はなかった。

◇ 日本での暮らし ◇

2009年4月、中野にある日本語学校に入学するために来日した。初めての来日は1997年に大阪にいる友だちを訪ねた時で、その後、観光で2回ほど来日したことがあるので、日本は「外国」という感じはしない。日本は近いし、特に大久保には韓国料理の店や食材店も多いので、生活に困ることはない。ただ、物価が高いので、経済的にゆとりがないと生活するのはなかなか大変である。当面の目標はとにかく来年大学に入学すること。昨年日本語能力検定試験の2級に合格したので、今年は大学入試に必要な1級にどうしても合格したい。

来日してしばらくの間は、韓国人で日本の大学を卒業して働いている友だちのアパートに居候させてもらい、その後、アパートに移った。アパートは大久保駅から歩いて5分なので学校へ行くにもアルバイトに行くにも都合がよい。家賃は5万4000円。夕食は簡単なものを自分で作って食べる。大久保にはたくさん韓国料理のお店があるが、韓国に比べるととても高いので外食することはめったにない。

一番の悩みというか苦労しているのはアルバイトと勉強を両立させることだ。日本語学校の授業は午後1時20分から5時までで、アルバイトを2つ掛け持ちしている。一つは高田馬場にある弁当屋さんで、早朝から昼まで週4日働いている。時給は950円。このアルバイトのよいところは、朝ごはんはと昼ごはんが食べられることである。もう一つは、週2回、韓国人夫妻の幼稚園児と小学生に韓国語を教えている。アルバイトは、韓国人留学生向けのウェブサイトですぐに見つけることができた。生活費はアルバイトで何とかやりくりしているが、授業料(年間60万円)は貯金を取り崩している。リーマン・ショックでウォンが下がった時には、このまま留学を続けるかどうか迷っ

た。

東京で困った時に相談できる韓国人の友だちが2人いるが、日本人の友だちはいない。日本人の友だちが見つけれられないのは、まだ、自分の気持ちを日本語で上手く伝えられないことと、時間的に余裕がないためである。気分転換したいときは韓国人の友だちと会っておしゃべりをする。趣味は、散歩をしながら写真を撮ること。

◇ 将来の夢 ◇

大学を卒業したら韓国に帰って、政府系の教育関係の研究所で働きたいと思っている。でも、競争が厳しいので上手くいくかどうか分からない。他の選択肢として心理学の研究が進んでいるドイツに留学することも考えているが、年齢的に難しいかもしれない。日本での生活は大変なことが多いが、夢があるから頑張れる。

<インタビュー 5>

Cさん(30代・女性)「今が人生のピーク」

2010年3月1日、ソウル出身

専業主婦、日本在住9年

インタビュアー：ソン・ウォンソク

◇ 結婚を契機に来日 ◇

家族は都内の私立大学の助手である夫と6歳の娘、3人家族。韓国には自営業を営む両親と会社勤めしている兄、弟がいる。2002年5月に留学生だった夫(当時大学院修士課程)と結婚を契機に来日した。1999年に大学を(数学科)卒業し、会社勤めや、放課後教師(日本の学童に類似する)をやった。来日した当時は1年だけ生活つもりだったが、もう9年目を迎える。韓国の家族も1年とと思っていたが、こんなに長くなり、「早く帰ってきて」と言われる。自分にとって日本は初めての海外生活だ。両親は海外旅行はたくさんしたが、生活したことはない。お父さんが厳しくて大学の時に門限が9時で、旅行どころか合宿もいけなかった。だから、日本に来て自由な生活を謳歌しているのととても良い。

1年間遊ぶつもりだったので、日本語も全然勉強しないでひらがなも分からない状態で日本に来た。日本については首都が東京である程度の学校で習ったこと以外は何も知らなかった。教科書に出てくる怖い国というイメージもあって、差別も

あるのではとはじめは怖かった。来日してからは大学の寮で生活していたが、その寮を出て民間のアパートに移るときに不動産屋で「大家が外国人は…」と断れたこと以外は、あまり差別のようなことを経験した覚えはない。時期が2002年ワールドカップもあり、その後「冬のソナタ」で韓流ブームもあって、雰囲気良かった。

初来日は観光ビザで来た。1年間は3ヶ月ずつ往復して、日本にいる間日本語学校を2ヶ月通った。その後は今住んでいる都下の市の地域センターの日本語教室で週4時間勉強した。日本語学校より会話練習の機会が多く勉強になった。そこで日本人の友達もできた。当時韓国に対する関心が高かったので、韓国について聞いてくる人も多く、そのうち韓国料理や韓国語を教える機会もあった。当時できた友達は40～60代の女性が多かった。とても仲良く楽しく過ごした。地域の日本語教室で日本語能力試験を受験する雰囲気もあって、妊娠してから胎教として勉強でもしようと思つて勉強をして、来日1年半で1級に合格した。

一つ印象に残ることは、日本に来た当時、夫が住んでいたアパートで1週間ほど過ごしたが、古い木造で手巻き点火式のお湯沸かし機はショックだった。先進国といわれる日本でこんな生活をしているなんて想像もできなかった。それから新築された大学の国際寮の家族室に移ったが、韓国と比較すると普通なのに、最初の木造アパートに比べると宮殿のようだった。国際寮に入ってからにはそこに住んでいる奥さん達と友達になった。家にいるよりは外に出て人とつきあうのを好む性格なので、たくさん友達ができた。

◇ 周りに助けられる子育て ◇

娘は韓国で出産し2ヶ月後日本に戻った。娘が3歳になって幼稚園に通い始める前までは家で子供二人だけで過ごしたのでとてもつらかった。体の調子が悪くても子供をみてもらえる人がいなくて大変だった。その時が日本の生活の中で一番つらかった。その時、知り合いの紹介で地元の育児クラブに入った。週に一度集まって市の施設の部屋を借りて保育士に子供を預けて母親達は料理やおもちゃ作り、時には育児について先生を呼んで話しを聞くなど、とても有意義で楽しい時間を過ごした。はじめは6人から後に12人まで増えたが、幼稚園に入ると自然に脱会する。市の公民館でリトミックや体操など親子のための多様なプロ

グラムがあるのも育児クラブのお母さん方から情報を得ていろいろ参加した。実はそのようなプログラムを知らない人が多い。育児クラブに入ったので、情報を得ることができた。

一人子育ては長短がある。自分の教育観で好きなように育てられるのは良い点だが、やはり何かあるときに子供を預けられないのが困る。24時間子供と一緒にいないといけないのでストレスもたままる。発散できないとそれが子どもに向けられることもあるので困る。だが、日本は子育て環境が良い。韓国で子育てをやったことがないので比較はできないが、ここは補助金もあるし、子供をつけて出かけても子供関連の施設も整備されているし、これは良い点だ。出産してからは市から相談員が来ていろいろ教えてくれた。何かあったときに利用できる施設の情報を教えてくれたし、安心させてくれた。周りで産後鬱になる人もいると聞く。自分はずらかった記憶もあるがもう忘れた。今から考えると子供が赤ちゃんだった時良かったなと思っている。

幼稚園選びは育児クラブの友達などから情報を得て選んだ。子供が幼稚園に入ってから学習塾の掃除パートの仕事を始めた。午前中1日2時間程度週6日やっている。終わると買い物したり友達とランチしたりする。幼稚園は2時に終わる。バスもあるが、迎えに行く。行くと他のお母さん達と会って情報交換もできる。市から補助がでるので幼稚園費の3分の2はそれでまかなえ、あまり負担は感じない。週2回お弁当を持たせるが、はじめは他のお母さん方がとてもかわいく作って、それが負担だった。でも年中になると冷凍食品も使う。他のお母さんもみんな同じ。

子供が生まれて1年間は大変だったが、去年から夫が大学で博士課程に在籍しながら契約職の助手になり韓国語講師もやっている。パートの仕事もあるので、経済的に問題は無い。「今が人生のピークのような」。

今年子供が小学校に行ったら世話が減るので、何かやりたいことをやってみようかと思っている。具体的なことはないが、勉強をしてみようか、以前やったことのある韓国料理を教えて稼ぐか、いろいろ考えている。

◇ 子どもの教育が悩み ◇

夫は韓国に帰りたがる。ところが、子供が今年小学校に入学するので悩んでいる。生まれてから

日本の幼稚園に通い、友達も日本人ばかりなので、途中で韓国に帰ったら、うまく適応できるかどうか。子供に韓国人であることをどう教えるかも悩み。韓国では韓国に対して息をするように教育を受けるが、娘は日本の子供が息をするように受け入れる日本を、同じように受け入れてきた子なので、どうすれば良いか悩んでいる。歴史の問題もあるだろうし...。いざ韓国に帰ろうとすると、韓国の教育の現実に耐えられるかが一番大きい。韓国に帰った友達をみるとうまく適応できない子もいる。韓国は教科学習の面で早い。日本ではみんなが知らない事を前提にはじめから教えるが、韓国だと5まではやってきただろうと、6から教える。韓国に帰った友達から、子どもが「日本から馬鹿が来た」と言われたことがあると聞いた。言葉もうまくできないので、特に小学校は仲間に入れてくれないようだ。

娘は韓国語があまりできない。生活会話程度はできるが、韓国語で話しかけると日本語が帰ってくる。1年前に韓国人の友達に来て韓国語がうまくなったが、学校で使う学習用語は全然できない。数も数えられない。もし韓国に帰るならば、娘の事が一番心配。小学校の時期は教育もされてない段階で、動物的で露骨ないじめがあるので、傷つきやすい。できればこの時期を避けたいが、中高になると教育のレベルが違うのでまた無理かもしれない。どうすれば良いか悩みだ。

最近、娘が韓国を意識し始めた。韓国と日本がサッカーをやって日本が勝ったら、幼稚園でみんなと一緒に喜んだようだが、「お父さん、お母さんは日本に住んでいるのに、なんで韓国を応援するの?」と聞かれた。自分は日本に住んでいるし、友達もみんな日本人で、韓国語もできないのに、なぜ自分を韓国人と言うのか、と聞かれた事がある。その程度だったが、今はお父さん、お母さんが韓国人で、何かの違いを感じているようだ。韓国人の友達が幼稚園に来て、二人で韓国語を喋ったり、日本語が全然できない韓国人の友達に韓国語で言ってあげたりしながら、少しずつ違いを感じ始めたようだ。いまは周りの子が娘に対して「おまえ、韓国人だろう」と言っても、言う子も聞く娘もそれに対する認識がないのでそれが良い悪いといったところまではいかないと思うが、小学校に行ったら違うのではないかと心配している。娘にとって日本はとても良い国で母国のような感覚なので、特に歴史問題などに対してどう説明して

あげれば良いのか悩む。夫が歴史を勉強する人なので、うまくやってくれるだろうと期待している。日本の教育は子供には良いと思うが、やはり歴史問題が一番引かかる。

だが、自分は日本に来て両方を比較できるようになって良かったと思う。微妙な関係の両国を理解できるようになった。同じように、娘にとってもそれは良いだろう。抑圧されてきた在日とは違って、別の考えを持つのではないか。

家で韓国語を教えようとしているが難しい。韓国から送ってもらった本や資料でやってみたがうまくいかない。自分と娘は日本語を受け入れる感覚が違う。自分は外国語として覚えて使うが、娘は自然と分かる。自分には聞き取れない事も娘は聞き取れる。自分が日本語を習うことと同じように、娘は韓国語を学ばないといけない。とても難しい。

小学校選びに韓国学校も考えたが、生活圏が違うし、学習の熱も違うらしいのでやめた。経済的要因、韓国学校のお母さん達の教育熱、いろいろあるが、日本に住みながらわざわざ韓国学校に行かせるのもそうだし、一番はやはり生活圏を新宿に移すことがいやだった。自分も娘も今住んでいるところになれているし、友達も多く、まるで故郷だ。

大久保には日本人のお母さん達と食事しに行く。自分のためにいくのは希。何か用事があって都心に行くついでに食事しに立ち寄る。家では韓国料理しかしない。自分ができるのがそれだけだから。材料は通信販売で買ったり、韓国から送ってもらったりしている。昨年までは旧正月の時に友達が集まって食事したり、遊びに行ったりしたが、今年ではできなかった。日本では普段通りの生活をしているので難しい。

<インタビュー 6>

PYさん(20代・女性)「10月に戻ります」

2010年3月3日、蔚山出身
日本語学校生、日本歴1年
インタビュアー：武田里子

◇ 略歴と家族 ◇

PYさんは、1988年生まれの21歳。韓国の大学を休学して2009年4月に来日し、中野にある日本語学校の1年プログラムに入学して日本語の勉強をしていた。「していた」というのは、このイ

インタビューの数日後に帰国することが決まっていたからである。4月に休学中の韓国の大学に復学し、卒業論文を書き上げて、10月に再来日する。そして、来春、日本の大学に入学する計画を立てている。昨年、日本語能力検定試験の2級に合格したが、日本の大学に入るには1級が必要だと言われている。韓国に帰っても日本語の勉強を続けるつもりだ。PYさんは韓国の大学では文学を専攻しているが、実は、文学にはあまり興味がない。文学部に入ることになったのは、大学入試の結果によるものだった。だから、日本の大学では、本当に勉強したかった経営学部に入るつもりだ。

出身は釜山に近い蔚山で、共働きのサラリーマン家庭で育った。大学生の兄と二人きょうだいである。子どもの頃は、両親が仕事から帰ってくるまでは祖母が面倒を見てくれた。PYさんが小学校に入るころから韓国では受験競争が激しくなり、PYさんも小学5年から塾に通い始め、その他にピアノや美術の教室にも通った。中学時代は、塾から帰宅するのは夜9時頃で、試験前には夜中の2時頃まで塾で勉強した。それは、PYさんが特別だったわけではなく、他の子どもたちも多くが小学校から塾に通っていた。ただ、子どもたちはなぜ勉強しなければならないのかよくわからず、みんなが行くので塾に行っていたような気がする。だから塾では勉強ばかりしていたわけではなく、塾は他の子どもたちと「遊ぶ場」でもあった。

PYさんは、高校2年の時、1年間、選択科目で日本語の勉強をした。理由は、日本の芸能人に憧れたからだ。特にジャニーズが好きで、雑誌に掲載されたジャニーズの記事が読みたくて日本語を勉強した。日本の芸能人が好きな友人が他に3人ほどいて、その友人たちと雑誌を回し読みしたり、インターネットで調べたり、NHKの番組を見たりしていた。3年生の時は、受験勉強のために一旦、日本語の勉強は中断したが、大学に入ってから来日するまで1年半ほど日本語の塾に通った。だから、来日した時には日本語での日常的なコミュニケーションには困らなかった。ただ、「韓国で習ったことが、日本に来てみたら意味が違うことがあったり、使い方が違うことがあって戸惑った」という。

2009年に留学で来日する前に、観光で4回ほど来日したことがある。日本に留学中の友だちを訪ねたり、東京、千葉、福岡、熊本などを旅行した。釜山と福岡の間はフェリーが運航されている

ので、釜山の近くに住んでいる韓国人には九州は身近な場所である。PYさんには在日の親戚はいない。家族に日本語のできる人もいない。

◇ 日本での暮らし ◇

日本で暮らしてみても、一番困ったことは日本の天候だという。日本の夏の蒸し暑さには閉口した。それと物価の高さ。生活費を補うためにしゃぶしゃぶ屋さんでアルバイトもした。一日のうち、アルバイトに5時間、学校の授業が4時間。それに移動などを加えると自習時間を確保するのは大変だった。日ごろのストレスは、週末に友だちとおしゃべりをして発散した。相手は同じ日本語学校の韓国人生徒がほとんどだが、仲の良い台湾人もいる。日本人の友だちと話せば日本語の勉強になると思うが、間違っていないだろうかとか気にしながら話すことになるので、疲れているとそのエネルギーがわいてこない。時々、インターネットのサイトで案内が流れる留学生と日本人がおしゃべりをする会に参加することもある。こうしたイベントは、留学生と日本人の数がだいたい同じで会話練習になることもあるが、日本人参加者が少なく、韓国人同士のおしゃべりで終わってしまうこともある。

日本で暮らして驚いたことは、「吉野家」みたいに食堂で一人でご飯を食べる人が多いことだ。韓国では、一人で食事をしたり、映画を見たりすることはあまりない。最初はさびしい感じがしたが、しばらくしたら、一人でいる時間がほしい時とか、疲れた時に簡単に食べて帰れるので便利だと思うようになった。かつ丼やお好み焼きなどを自分で作ることもある。日本の食べ物と言えば納豆がある。4~5年前から韓国でも、健康ブームの影響でデパートなどで納豆が売られていることは知っていたが、食べたことはなかった。日本に来て初めて食べてみたが、意外に美味しかった。もう一つ驚いたことと言えば、女性が喫茶店や子どもと一緒にいる時にタバコを吸っている姿を見かけたことだ。「韓国ではタバコを吸う女性に偏見があるので、女性は男性の前や親の前では吸わない。」

◇ 仕事・恋愛・結婚 ◇

PYさんは大学3年生。人間としても、女性としてもこれからどう生きていくかについて悩むことが多い。今後の人生プランについては、「したいものはいっぱいありますけど、できるものがあま

りなくて、いつも迷っています。結婚は、前はしたかったけど、今は 30 代以上になってからしたいし、就職前にもっといろいろな国に留学したい」。韓国では英語熱が高まっている。確かに大学生の間で英語圏への留学を考えている人も多く、なかには、留学する前に、ウォーミングアップを兼ねてフィリピンで英語の勉強をする人もいます。直接、英語圏に行くよりも、物価の安いフィリピンであれば英語を 1 対 1 で教えてもらえるからだ。PY さんの兄も 4 カ月ほどフィリピンに英語留学した。お兄さんも大学卒業後に留学を考えているという。ただ、そうした英語ブームについては、韓国国内でも本当に必要性があるのか、単なる浪費ではないかといった批判もあるという。

結婚や恋愛は、女子学生の間でよく話題になるテーマである。PY さんの母親は、子育てと仕事を両立させてきたので、PY さんにも自立した人生を歩むことを期待している。PY さん自身も結婚後は両親のように共働きをすることになるだろうと考えている。韓国も日本と同じように未婚化の広がりや離婚率の上昇、出生率の低下など家族の問題がクローズアップされている。PY さんはそうした現状に対して、「私がしたいものを考えたら結婚は遅くなります。でも、社会全体を考えたら、良くない傾向だ」と感じている。「もっと勉強したいし、自分が欲しいものを大事にしたい。本当に信じられる人でないと結婚したくない。離婚は嫌ですから。死ぬまで幸せにしてくれる人じゃないと私は結婚しない」という。女性としてどう生きるか、自分の可能性を追い求めることと、家族規範や性別役割規範とどのように折り合っていくのか。また、PY さんによれば、韓国では、「自尊心の高い」男性がデート費用を払うのが一般的なので、経済的に余裕がない男性はなかなか異性と付き合えないという。一方、女性の方は、美容には惜しまずお金を使う傾向がある。「韓国の男性は、まずは女性を容ぼうで判断することが多いからだ」という。PY さんの生き方や恋愛や結婚への迷いは、社会的経済的制約を受けながらもよりよく生きたいと願う点で、国籍を問わず同世代の女性たちが共通して直面している課題のようだ。

<インタビュー 7>

PH さん (20 代・女性)「将来の夢はパン屋さん」

2010 年 3 月 4 日、ピョンテク出身
日本語学校生、日本在住 1 年目
インタビュアー：武田里子

◇ 来日までの略歴 ◇

PH さんは、1980 年生まれの 29 歳。出身はソウルから車で 50 分ほどのところにある京畿道のピョンテクである。両親を早くに亡くした PH さんは、大学を卒業するまで兄と二人で暮らしていた。大学卒業後は、韓国の総合家電・情報通信メーカーとしてはトップクラスの大手企業に就職した。勤務地が実家から離れていたため社員寮に入ることになり、初めて一人で暮らすことになった。会社は、有名企業だったが、担当していたのは一般事務の仕事だったので、「毎日毎日同じ仕事でつまらなかった」という。本当は営業など外で働く仕事がしたかったが、チャンスに恵まれなかった。27 歳で退職した時は、「あまり先のことを考えていたわけじゃなかった」。結婚という選択もあったが付き合っていた彼から、日本に留学しようと誘われ、2009 年 4 月に来日した。

PH さんは、「私は日本には来たいですが、留学は全然考えたことがありませんでした。観光は良いですが、暮らすのは大変だと聞いていましたから。でも、ヨーロッパとか、アメリカも留学するのはどこも大変でしょう。それなら同じアジアにある日本が良いのかなあ」と思ったと留学することになった経緯を語った。日本が良いと思った理由は、日本語で上手く説明できないと言いつつも、「韓国より経済が上だし、女性のためのいろいろな文化もたくさんあるし、他の国より働いたり、勉強したりすることができる」と感じたからだという。また、ソウルには日本留学する人たちのための「留学院」がたくさんあり、来日前に入学する学校や学生寮も決めることができる仕組みがあるので、日本に留学することは、それほど難しいことではない。日韓の人の往来が増えていることも日本留学に対する心理的な壁を低くしている。

それでも、実際に留学するまでには、いろいろと下調べをし、来日する 1 年ほど前には彼と下見にも来た。PH さんはその時が初めての来日だった。彼の方は、大学時代に 1~2 回来日したことがあり、PH さんを留学に誘った手前いろいろと責任を感じているようである。

◇ 日本での暮らし ◇

今のところ、生活上の問題は二人で協力して解決している。下見で来日した時の滞在は3日間と短かったので、新宿や原宿などJR山手線沿線を少し見て回った程度である。その時は、「東京は新しく韓国より良い所だ」という印象をもったが、実際に生活してみると大変なことが多い。大変というのは、アルバイトをしながら勉強をする生活のことである。アルバイトもなかなか見つけられなかった。「お店も若い人たちが欲しいので」と、年齢がハンディになったという。来日して3カ月ほどは貯金を取り崩して生活した。その時は、彼の方も仕事が見つからなかったので、資金が続くかどうか不安で韓国へ帰ることも考えたという。今、アルバイトをしているお弁当屋さんの求人募集はネットで見つけた。朝4時半から11時半まで働き、そこで昼食をとり、午後からは日本語学校で授業を受ける。PHさんも彼も授業の出席率は100%である。大久保のアパートの家賃は6畳一間で6万8千円と高いが、学校までは徒歩7分と近く、アルバイト先にも徒歩で通えるので我慢している。

PHさんの通う日本語学校は98%が韓国人である。PHさんのクラスも15名中14名が韓国人でロシア人が1名という構成である。唯一のロシア人は、PHさんによると「韓国人が好きじゃないみたいで、あまりしゃべらない」という。14人の韓国人の中でアルバイトをしているのはPHさんを含めてわずか3~4人で、他の人たちは家から送金してもらっていることを知り、「お金持ちがたくさんいることに驚いた」という。学校には不満がある。来日前の説明では、年に2回は日本文化を体験するプログラムがあると聞いていたが、そうしたプログラムはなく、「がっかりした」。

PHさんは、自分だけでなく日本語学校の生徒たちはなかなか日本人との接点がないという。学校の中で出会う日本人は先生だけ。交流イベントなどで出会った日本人とは、その時だけで終わってしまい、その後も続く関係を作るのは難しい。クラスメイトの中には、専門学校や大学に進学できれば、今度は日本人の方が大勢になるから自然に友だちができるという人もいる。PHさんは知り合いから、「日本人を紹介してあげるけど、日本人と友だちになるにはお金がかかる」と言われたことがある。確かに「一緒に食事をしたり、飲んだり、話したりするとお金がかかる」ことは分かるが、PHさんはそういう形で友だちを作ること

には気が進まない。

◇ 将来の夢 ◇

PHさんの日本語学校は、2年プログラムなので、あと1年はとにかく日本語の勉強に専念して、大学に進学するつもりだ。大学では経営か経済の勉強をしたいと思っている。インターネットでいろいろな大学の学費や奨学金制度、就職状況などを調べているが、まだ、どこの大学を受験したらよいか決められずにいる。まずは6月の試験までは勉強に専念し、その後は、旅行もしてみたい。まだ、来日してから東京以外に出かけたことがないのだ。PHさんにとって、今一番気がかりなのは、4月からは授業が午前中に変わるので、お弁当屋さんのアルバイトができなくなることだ。また新たにアルバイトを探さなければならないが、上手く見つけられるかどうか不安を感じている。

PHさんの将来の夢はパン屋さんを開業することである。なぜ、パン屋さんかという、初めて来日した時にコンビニで買ったパンの美味しさにびっくりしたからだ。韓国の専門店のパンより柔らかくて美味しかったという。日本では、専門学校を卒業してもパン屋で働くためのビザはとれないと聞いているので、たぶん韓国で開業することになる。大学で経営の勉強をして、専門学校でパン作りの勉強もするとすると、PHさんの夢が実現するまでにはまだ7~8年かかりそうだ。「大変ですね」という私に、「大丈夫です」とほほ笑んだ。

<インタビュー 8>

金某さん(40代・男性)「貿易業での成功を夢見て」

2010年3月4日、固城(コソン)出身
貿易会社勤務、滞日歴通算約22年
インタビュアー：堀内康史

◇ 来日の経緯 ◇

来日のきっかけは、韓国で大学生だった当時は、学生運動も盛んで混乱がつづいており、社会の閉塞感などから、とにかく外に出たいという気持ちで日本に来た。日本には、おじ家族がおり、他の外国にはつてがなかったので日本以外の国を行き先として考えることはなかった。

◇ これまでの日本での生活 ◇

1987年に日本に来てからは、2年ほど日本語学校などに通い、90年に首都圏にある公立大学に入学した。その後、同じく首都圏にある国立大学の大学院に進んだが、修了はしないまま、ジャーナリストの仕事の本格的に始めた。フリーのジャーナリストとして、日韓以外のアジアの国にも出向き取材をし、自分の取材した映像がテレビで放映されるなど、やりがいのある仕事ではあった。しかし、収入は安定せず、なおかつこの間日本人女性と結婚し子どものできた金某さんは、2年間でこの仕事はやめ、転職することになった。

◇ 現在の仕事について ◇

その後、家計を安定させるため新聞配達の仕事をしたり、翻訳会社に勤めたりと、試行錯誤をしながら、2002年に自身で起業し、服飾関係の貿易を生業とするようになった。しかし、この仕事も事業の好調不調の差が大きく、安定して家庭に収入を入れることができない状況が続いていた時期に、家族とすれ違いがおこり離婚することになった。

その後も、自身のこの貿易会社は厳しい経営状況が続いていたので、2008年に休業することにした。現在は、韓国系の企業に雇われて、今までの仕事で得た経験をもとに、3人で、年間億単位という規模の大きい貿易の仕事をしている。ちなみにこの大久保に事務所を構えたのは、この会社の東京支社長が日本語ができないため、韓国語だけでやっていけるという点も、大きな要因であったという。

◇ 日本は住みやすいか？ ◇

金某さんにとって、日本は住みやすいか住みにくいかと聞かれたら、住みやすい、という。東京だからというのものもあるかもしれないが、個人のプライバシーに深くかかわろうとしない良さを感じているという。仕事上は外国人ということで当初は信頼してもらえない部分もあるが、飲み屋でもどこでも、自分の名前を言って、「えっ、何だお前外国人か!？」と言って逃げるような人間は今までそんなにいなかった、ということもあり、日本の社会のある種の寛容さも感じているようである。

◇ 将来の見通し ◇

今後の見通しとしては、韓国より日本に人脈や生活の基盤があるので、おそらくこのままずっと

日本で生活していくことになりそうだという。その際、生活の安定や仕事上の便宜を考えると、ビザや国籍についてもいろいろ悩むことがあるという。「国家っていうことは結構悩ましいテーマでもあったけれども、別に俺が背負わなくても背負う人はたくさんいるらしいし、背負って行きたいとも思ってないんで。だから別に日本の国籍をとるから楽だとかそういうことはないんだけど、まあ少なくとも永住は取るだろうし、あるいは場合によってはもう日本国籍の取得も考えてはいる」という。

そしていつか貿易の仕事を辞めるとしたら、食べ物屋さんをやりたいという夢がある。あるいは、日本の田舎で「半農半X(エックス)」という感じで暮らしていけたらいいなとも思い描いている。

<インタビュー 9>

Bさん(30代・女性)「日本の生活に満足」

2010年3月12日、釜山出身

大学院生、日本暦8年目

インタビュアー：ソン・ウォンソク

◇ 日本は留学先の一つとして選択した ◇

Bさんは1978年生まれの31歳の女性。現在都内私立大学大学院で法学修士課程2年。今年(2010年)博士課程への進学が決まった学生だ。日本に他の家族や親戚はなく、都下で一人暮らしをしている。家族は自営業を営むご両親と大学院生の弟が釜山に住んでいる。2002年、韓国の4年制大学で経営学科を卒業したBさんは、韓国で6ヶ月ほど日本語を勉強して、10月に東京にある日本語学校に入学することで日本での生活を始めた。来日してから新宿にある日本語学校に1年半通った後、都内の国立大学に進学した。

留学を考えたのは、「大学卒業する時はやりきれなかったことに対する後悔みたいのがあった」からだ。卒業する前に留学に行ければと思い、3ヶ月ほど留学してもいいかと家族に言ったら、はじめは反対された。お母さんは3ヶ月なら留学ではなく旅行なので、留学するならばちゃんとやれと言われた。それで、まず卒業前に1ヶ月ほど日本を旅行した。当時は留学先として日本のほかに中国やアメリカも考えていたが、中国は両親の「危ない」というイメージから反対され、アメリカは

「心理的に遠すぎる」と言われ、日本に決めた。どこに行きたいというよりも、「漠然と留学に行きたいという気持ちが大きかったので、日本で妥協した」。

◇ 外国人であることが法学部選択の契機に ◇

進学に関しては、はじめは大学院に入ることも考えたが、願書を出すタイミングを逃したこともあり、学部に入学することにした。学部は法学部を選択したが、それは自分が日本で外国人として生活した経験が契機となった。外国人になってから「すごい、暮らしと法律と関わっている」と気づいた。外国人登録をはじめ、外国人だからやることがたくさんあった。

◇ アルバイトは文化の学び場 ◇

アルバイトをしながら、日本人とのコミュニケーションを学んだ。たとえば両手の人差し指を交差させて「お勘定をお願いします」を表すジェスチャーは日本に来ないと分からない。外国語はその国に行かなくても勉強はできるが、行かないと分からないことがあるのはバイトをしてみて感じた。

韓国で仕事をしたことがないので正確に比較できないが、職場の雰囲気も違うのではと感じる。たとえば、韓国では仕事にもプライベート電話にも出るが、日本ではやってはいけないという暗黙のルールがあるようだ。「韓国でもやりすぎるとひどくないかともいわれるかもしれませんが、それに対して悪いとは思わないが、日本では厳しいみたい」。

韓国と似ているところもある。昼ごはんを食べに一緒に行くとき学生だからといっていつもおごってくれる。それが負担で行かないこともある。それは韓国と同じ。韓国では、日本では割り勘をするというイメージや認識があるが、日本に来てみたら、そうでもなかった。韓国と同じく人によって違う。韓国ですべての人がそうでないように日本でも人によって違う。

プライベートなことを人に言うかどうかに関しても日本も韓国と同じように思える。自分は韓国にいた時もあまり人にプライベートなことを聞いたりしなかったもので、日本に来てもっとそういう雰囲気・文化じゃないので聞かなくなった。だから時に「日本の文化に馴染んでいる」といわれる。だが、まわりの韓国人の中には上手く聞く人もい

て、相手の日本人もよく答えてくれる。日本の人はとても「受動的」だと思う。中にはそれを期待する人もいるみたい。「聞いてほしい、聞いてくれ」みたいな。相手が困っているのにこっちが無理に聞くのは失礼ですが、普通は喜ぶ。

◇ 「内の人」と「外の人」をはっきり分ける日本人 ◇

日本の大学生と韓国の大学生を比較すると、韓国では先輩と後輩の区別は学年で決まるが、日本の大学生は「内の人」と「外の人」がはっきりしている。日本は自分が属するサークルやクラブで決まる。同じ学部であっても自分のサークルやクラブの組織の知り合いじゃないと他人になる。そういう違いがある。自分もサークルをやって、「日本は組織文化だなとすごく感じた」。

ゼミも同じ。ゼミ生はよく団結する。OB とか OG とかの関係もきちんとしている。だからサークルやゼミに入らないと「所属感がないし、友だちもない」ので、組織に入るのが「本当に大事」。組織に入らなかつたら一人ぼっちになる。「存在感がゼロ」かも。

学生は組織の構成員として所属感から「安心」する。また「忠誠心も必要」。学部の場合はサークルが中心になるが、何でもそれに合わせて調整する。そういう意味で忠誠である。サークル活動を中心に動いている人たちはそれを中心にバイトなどのスケジュールを立てる。忠誠心を持っている人はお互いに団結力も強い。お互いに面倒を見、安定している。だからそこに所属しようとする。

だが、Bさんは大学のサークルを1年でやめた。2年生になると、サークル活動を運営する執行部になる。これは、クラブ活動中心の生活をしないといけないことを意味する。でも、勉強もアルバイトもしないといけなかった。3つに同じくらいの重みをおきたかったが、やっていける自信がなかった。サークルをやめてサークルの人との関係も途切れた。同じサークルだった人1人、2人とは連絡をとっているが、サークルをやめてからはゼミと授業で知り合った人と友だちになった。

◇ 大久保は日本人の友だちに韓国を紹介する異文化交流の場 ◇

現在の生活は学校とアルバイトがほとんど。大久保は来るとしても月1回くらいであり来ない。韓国の食材はネットで買っているし、韓国の友だ

ちと一緒に来たりもしない。日本で生活した初期には定期が新大久保を通ったので、よく降りたが、違うところに住むようになってからはあまり来なくなった。韓国人だから来るというより、日本人と食事をする時に「韓国人なので連れて行ってくれ」と言われることがある。しかし大久保に来ると、自分もほとんど分からないのに案内役になる。「なんていうかな、日本の友達に韓国を紹介する異文化の交流する場みたいなところ」になっている。

その中でも大久保の変化を感じる。以前は、商店は多かったが韓国の田舎のような雰囲気もあった。当時は「外国人のための町」という雰囲気だったが、韓流以降、飲食店や写真集を売っている店も増え、最近では「日本人相手に何かを売ろう」とする雰囲気変わった。以前 7、8 年前までは韓国料理屋もあまりなかったのが大久保に来ないといけなかった。そして小さい店でジャジャン麺を食べたりしたが、最近では韓国料理屋も増えたとし規模も大きくなったし、入ったら芸能人の写真などが張られている。

◇ 日本の生活には満足している ◇

Bさんは将来、仕事があるところに住むつもりだ。そこは日本、韓国、そして他の外国でもいい。自分は日本に来て、これがどういう結果を生むかは分からないが、韓国にいたらできなかった経験をたくさんしたので「よかった」と思っている。韓国の友だちを見ると無事に卒業していい仕事見つけて、今はみんな結婚して、「ドラマみたいな人生」を送っている。

いま日本の生活に慣れて「不便もなく満足」している。不便だったことは、日本に来た当初、韓国のようなオンドルがなく、エアコンを暖房で使っていたので空気が乾燥して、最初の冬は風邪の思い出しかない。それと、花粉症で日本生活が「長いな」と思ったりする。食べ物は、はじめはしょっぱいと思ったが、今は大丈夫。食事は和食が多い。韓国からインスタントラーメンを送ってもらっている。

日本語に関しては、韓国語と日本語が似ていて初めの頃は「手軽に接する」ことができたが、それがむしろ「穴」になってしまうのではと思っている。似ているだろうと思って使った場合に、日本では逆の意味でとらえる場合があったり、あるいは状況によって使い方が違ったりすることもある。

そういう面で大変。これは違うなと思ってもはっきりとは分からなくて、日本人にきいてみたりするのがだんだん増えていくようだ。だから、言語の勉強は本当に「限りがない」というか、「きりがない」と感じている。

韓国には年一回くらい 1、2 週間帰る。帰ると親に「早く帰ってきて」と言われる。今年で 8 年目だから、もう十分ではないかとの間言われた。

日本社会に対して「変化を恐れなくてほしい」と思っている。韓国の場合は、まず変えてみて、またその状況に応じて「変えていけばいいじゃない」という雰囲気ならば、日本はいろんな可能性を取り上げてここに進もうかあっちに進もうか、いつも悩んでいるようだ。韓国のやり方が 100% 良いということではないし、それなりに危険性は高いが、社会の変化が多様である。だが、日本はそれぞれ主張ばかりやっていて、「チャンスを逃してしまう」場合がある。その時代に合わせて変えていく必要があるのに、主張だけやっていて、後になって、「アー、こういう風にやればよかった」と後悔することが時々目に見える。特に最近では社会の制度のほうを勉強して、研究会や検討会は毎日やっているのに、結果が出ない。そういうのを見たらちょっと「変化を恐れずに大胆に行動に移ってもいいんじゃないか」と思う。「日本の社会を見ると活気がないようで」と日本に対する要望を述べた。

<インタビュー 10 >

L・M씨 (20代・여성) 「5년간의 일본유학생 활을 되돌아 보고」

2010년 3월 18일, 서울 출신, 학생
체재5년째, 인터뷰 담당: 오세연

◇ 일본을 방문한 것은, 언제? ◇

2005년, 고등학교를 졸업하고, 곧바로 일본을 방문했습니다.

◇ 막상, 일본에 와보니 어때요? ◇

나는, 일본에 살면서 언제나 즐거웠다고 생각합니다. 돌아가는 것이 외로울 정도입니다. 주위의 사람의 눈을 너무 신경 쓰지 않아도 되는 일, 이것은 살기 편하다고 생각합니다.

◇ 친구 ◇

한국에서 일본으로의 유학을 목표로 하고 있는 학생들이 다니는 학원이 있습니다. 고3때, 이 학원에서 알게 된 친구와 함께 입시 준비를 하면서, 일본에 있는 일본어 학교도 함께 다녀서, 각자 일본의 대학에 입학했기 때문에, 일본에 살고 있는 한국인 친구가 많습니다.

시간만 맞으면 만나려 하고 있고, 한 달에 두세 번 정도는 만나고 있습니다. 처음으로, 일본을 방문했을 무렵은 친구와 함께 살았습니다. 일본어 학교에 다니고 있던 1년간은 친구와 일본어 학교의 기숙사에서 함께 살았습니다.

◇ 기숙사에서의 생활 ◇

방이 세 개 있는 기숙사였습니다. 하나의 방에 친구와 둘이서 살았습니다. 6명이 단독주택에 살았습니다. 그러나, 같은 목표를 가지고 함께 공부 하고 있었기 때문에, 서로 보이지 않는 경쟁심이 있었다고 생각합니다. 조금은 심리전과 같은? 대학에 입학하기 전까지는 이런 일들이 자주 있었습니다.

서로 힘들었던 경험 등을 공유하고 있었기 때문에, 가족보다 제일 이해해 주는 사람은 이 친구입니다. 나에게 있어서 빠뜨릴 수 없는, 제일 중요한 존재라고도 말할 수 있습니다.

◇ 일본인 친구 ◇

일본인 친구는 많다고는 말할 수 없습니다만, 세미나에 참가하기 시작해서 늘어 난 것 같습니다. 여성 교육과 일본 교육사 전공의 세미나참가 학생의 연령대가 제법 높았습니다. 30대의 친구도, 20대 후반의 친구도 있어 연령대가 다양하고, 즐겁습니다.

세미나참가 학생은 모두 일본인으로, 중국 유학생이 두 명 있습니다. 같은 외국인의 유학생끼리, 공감하는 것도 많아, 자주 만나고 밥을 먹으러 가거나 놀러 가기도 하고 사이가 좋습니다. 친구와의 관계로 언어의 벽을 느낀 것은, 남자친구가 말을 줄여서 사용하거나 속어 등을 사용해 이해 못했던 적도 있어 웃으면서 대처했습니다. 그렇지 않으면, 다른 여자 친구에게 묻기도 합니다.

◇ 한국인 친구, 일본인 친구, 중국인의 친구의 각각의 차이는 있습니까? ◇

한국인 친구의 경우는, 고교 3년부터의 친구였기 때문에, 소꿉 친구로, 꼭 함께 생활을 해

왔기 때문에 편하지만, 일본인 친구는 대학에 입학하고 나서, 어른이 되고 나서 만났기 때문에, 벌써 가치관 등이 형성된 상태로, 사이가 좋아지는 것은 간단한 일이 아니었습니다. 언어도 다르고, 처음은 어떻게 가까이 가야 할 지 어려웠지만, 저 같은 경우에는, 친구가 먼저 말을 걸어 주었기 때문에, 가까운 사이가 될 수 있었다고 생각합니다.

성격이라고 하기보다, 말의 뉘앙스의 문제지만, 내 생각과 달리, 전혀 다른 의미로 받아들이는 경우도 있었습니다. 이것이 제일 어려웠다고 생각합니다. 한국에 돌아가도 꼭 연락을 하며, 서로 왕래하면서, 교류해 나가고 싶습니다.

◇ 대학생활에서 느낀 것 ◇

친구와의 관계로, 얻을 수 있던 것도 많고, 배우고 있는 것도 많다고 생각합니다. 솔직히, 공부 이상으로 새로운 사람들을 만나, 이 사람들은, 앞으로의 일생의 함께할 사람들이므로, 소중한 것을 얻었다고 생각합니다.

◇ 자주 가는 장소는? ◇

신주쿠입니다. 약속이 있으면, 언제나 신주쿠에서 합니다. 신주쿠는 출구에 따라서 분위기가 달라, 만나는 사람에 따라서, 출구만 바꾸어 만나기도 합니다. 신주쿠의 매력은, 다양한 분위기, 그리고 편리한 교통이라고 생각합니다.

◇ 친구와 코리안 타운인 신오오쿠보에 간 적은? ◇

내가 한국의 요리를 아주 좋아해서, 언제나 친구를 데리고 갑니다. 처음으로 간 일본인 친구는, 맵다고 하면서도, 모두 맛있다고 해 줍니다. 한국의 문화에 대해 자주 여러 가지 묻기도 합니다. 세미나에는 한국인이 저밖에 없지만, 교수님이 한국을 아주 좋아하시고, 수업중에도 한국에 대한 이야기가 자주 나옵니다. 그래서, 친구들도 자연스럽게 모두 한국 문화에 흥미를 가져, 좋아하게 된 것 같습니다.

◇ 아르바이트의 경험은? ◇

일본어 학교에 다녔을 무렵은, 도토리(커피전문점)에서 조금 했습니다. 대학에 들어가고 나서는, 미용성형 외과의 접수로 아르바이트를 했습니다. 가끔, 통역 아르바이트도 했습니다. 진사회나 박람회 등에서, 3일, 5일, 어느 회사의

상품을 소개하거나 수출이나 수입 등, 계약을 할 때의 통역을 했습니다.

◇ 아르바이트에서 힘들었던 것은? ◇

내가 수술한 것은 아닌데, 갑자기 전화로 욕을 말하는 손님도 있고, 자기 코를 원래대로 돌려놓으라고 말하는 사람도 있고, 미용성형 외과였기 때문에, 이런 일들은 자주 있었습니다. 미용성형 외과여서, 절대 사과해선 안 됩니다. 사과해 버리면, 병원 측이 인정하게 되기 때문에, 대처하는 것이 힘 들었습니다.

◇ 아르바이트의 경험을 통해 ◇

통역의 일을 하면서, 알게 된 한국인이나 일본인도 많아, 지금도 연락을 하면서 좋은 사이로 지내고 있습니다.

◇ 장래, 구체적인 목표, 하고 싶은 일? ◇

솔직히, 현모양처가 되는 것이 꿈입니다. 결혼하기 전까지는, 일하고 싶습니다. 그 때문에, 같은 일을 반복하는 것 보다는, 출장이나 무역, 관광업과 같은 일을 하고 싶습니다. 내가 일본에 살고, 대학도 일본에서 대학도 다니고 있으니, 일본과 관련된 일을 하고 싶습니다.

◇ 일본에 와서 제일 힘들었던 것은? ◇

개인적으로, 이 공부가 나에게 있어서 정말로 맞는지, 그리고 환율도 높아 경제적으로 힘들었습니다. 그러나, 저는 운이 좋아, 생활비는 장학금으로 괜찮았습니다만, 수업료는, 부모님이 언제나 보내 주셔서, 부모님께는 언제나 죄송스럽게 생각하고 있습니다.

◇ 일본에서 좋았던 것은? ◇

자유로운 분위기가, 나에게 있어서 해방감 이라고 할까요? 여기에 살면서, 혼자서 강해진 것도 있고, 내 인생에 있어서, 지금까지 선택해 온 것 중에서, 일본에 온 것을 결정한 것이, 제일 좋았다고 생각합니다.

◇ 일본의 사회에 바라는 것? ◇

유학생으로서의 5년간, 느낀 것입니다. 나는 사립 대학이라, 수업료도 비싸고 돈이 듭니다. 솔직히 나는, 운이 좋아 장학금을 받았지만, 장학금의 기회가 많지는 않습니다. 특히 우리 학교의 경우, 외국인을 대부분 받아 들이려고 하

지만, 이것에 대해서 대책이 아직은 너무 부족하다고 생각합니다. 아는 사람은 도중에 돌아가 버리기도 하고, 힘들게 생각해서 결정한 유학이었는데, 이러한 경우를 보고 마음이 아팠습니다.

<인터뷰 10>

L・Mさん (20代・女性) 「5年間の日本の留学生生活を振り返って」

2010年3月18日、ソウル出身
大学生、日本在住5年目
インタビュアー：呉世蓮

◇ 来日したのは、いつ? ◇

2005年、高校を卒業して、すぐに来日しました。

◇ いざ、日本に来てどう? ◇

私は、日本に住みながらいつも楽しかったと思います。帰るのがさみしいほどです。周りの人の目をあまり気にしなくていいこと、これは暮らしやすいと思います。

◇ お友達 ◇

韓国で日本への留学を目指している学生たちが通う塾があります。高3の時、この塾で知り合った友達と一緒に入試準備をしながら、日本にある日本語学校も一緒に通いまして、それぞれ日本の大学に入学したため、日本に住んでいる韓国人の友達が多いです。

時間さえ合えば、会おうとしているので、月2、3回くらいは会っていました。初めて、来日した頃は、友達と一緒に暮らしました。日本語学校に通っていた1年間は友達と日本語学校の寮に、一緒に住みました。

◇ 寮での生活 ◇

部屋の三つある寮でした。一つの部屋に友達と二人で暮らしました。6人が一戸建てに住みました。しかし、一緒に勉強を、同じ目標を目指して、勉強をしたので、互いに見えない競争心があったと思います。ちょっと心理戦のような? 大学に入学する前まではこのようなことがありました。

お互いに、大変だった経験などを共有しているので、家族より、一番理解してくれる人はこの友達です。私にとって欠かせない、一番大切な存在

とも言えます。

◇ 日本人の友達 ◇

日本人の友達が多いとは言えませんが、ゼミに入ってから増えた気がします。女性教育と日本教育史の専攻の、ゼミ生の年齢がけっこう高いです。30代の友達も、20代後半の友達もいて年齢が多様で、楽しいです。

ゼミ生はみんな日本人で、中国の留学生が二人います。同じ外国人の留学生同士で、共感するところも多く、よく会ってご飯に行ったり、遊びに行ったり、仲良しです。友達との関係で、言語の壁を感じたことは、男の友達が略された言葉を使ったり、俗語など、理解できなかったこともあります。笑いながら対処しました。(笑) それとも、女の子の友達に聞いたりしました。

◇ 韓国人の友達、日本人の友達、中国人の友達のそれぞれの違いはありますか？ ◇

韓国人の友達の場合は、高校三年からの友達だったため、幼なじみで、ずっと一緒に生活してきたわけなので、楽ですけど、日本人の友達は大学に入学してから、大人になってから出会ったため、すでに価値観などが形成された状態で、仲良くなるのって簡単な事ではありませんでした。言語も違って、最初はどうやって近付けるのか、難しかったですが、私の場合、友達が先に声を掛けてくれたので、仲良くなれたと思います。

性格というより、言葉のニュアンスの問題ですが、私の考えと違って、違う意味で受け取られたこともありました。これが一番難しかったと思います。韓国に帰ってもずっと連絡をとり、お互いに行き来しながら、交流していきたいです。

◇ 大学生活で感じたこと ◇

友達との関係で、得られたことも多く、学んでいることも多いと思います。正直なところ勉強以上に、新しい人々に出会い、この人々は、これからの一生の人達なので、大切なものを得たと思います。

◇ よく行く場所は？ ◇

新宿です。約束があると、いつも新宿で待ち合わせします。新宿は出口によって雰囲気が違うので、会う人によって、出口だけ変えて会ったりします。新宿の魅力は、多様な雰囲気、そして便利

な交通だと思います。

◇ 友達とコリアンタウンである新大久保に行ったことは？ ◇

私が韓国の料理が大好きなので、いつも友達を連れて行きます。初めて行った日本人の友達は、辛いと言いながら、みんな美味しいと言ってくれます。韓国の文化についてよくいろいろ聞かれました。ゼミには韓国人が私しかいないですが、大学の先生が韓国が大好きで、授業中にも韓国についての話がよく出るので。それで、友達も自然的に、みんな韓国の文化に興味を持ち、好きになったみたいです。

◇ アルバイトの経験は？ ◇

日本語学校に通ったころは、ドトールでちょっとしました。大学に入ってから、美容整形外科の受付でバイトをしました。たまに、通訳のバイトもしました。展示会や博覧会などで、三日、五日と。ある会社の商品を紹介したり、輸出や輸入など、契約をする時の通訳をしました。

◇ アルバイトで大変だったことは？ ◇

私が手術したわけではないのに、いきなり電話で悪口をいうお客さんもいたり、自分の鼻を元に戻せという人もいたり、美容整形外科だったので、このようなことが多かったです。美容整形外科なので、絶対、謝ってはいけません。謝ってしまうと、病院側が認めることになるため、対処するのが大変でした。

◇ アルバイトの経験を通して ◇

通訳の仕事をしながらか、知り合った韓国人も日本人も多く、今も連絡をしながら仲良いです。

◇ 将来、具体的な目標、なりたい事？ ◇

正直に、良妻賢母になるのが夢です。結婚する前までは、働きたいです。そのため、同じことが繰り返される仕事より、出張や貿易、観光業のような仕事をしたいです。私が日本に住み、大学も日本で通っていたので、日本と関連した仕事です。

◇ 日本に来て一番大変だったことは？ ◇

個人的に、この勉強が私にとって本当に合うのか、そして円高によって経済的な大変さです。し

かし、私は運よく、生活費は奨学金で大丈夫でしたが、授業料は、親がいつも送ってくれまして、さらに円高によって親にいつも申し訳なく思いました。

◇ 日本で良かったことは？ ◇

自由な雰囲気、私にとって解放感といいますか、ここに住みながら、一人で強くなったところもあり、私の人生にとって、これまで選んできたことのなかで、日本に来たことを決めたことが、一番よかったと思います。

◇ 日本の社会に望むこと？ ◇

留学生としての5年間、感じたことです。私は私立大学で、授業料も高く、お金がかかります。正直に私は、運よく奨学金を貰いましたが、奨学金の機会が多くないです。特に私の学校の場合、外国人を多く受け入れようとしますが、これに対して対策がまだ、足りないと思います。知り合いは途中帰ってしまったり、大変な思いをしながら決めた留学だったのに、このようなケースをみて、心が痛かったです。

<インタビュー 11>

OYさん(20代・男性)「男同士の約束」

2010年3月30日、蔚山(ウルサン)出身
韓国系企業勤務、日本在住6年
インタビュアー：武田里子

◇ 略歴と家族 ◇

OYさんは韓国南部の工業都市・蔚山の出身。父親は地方紙の新聞社の幹部、母親は会社経営という比較的恵まれた家庭の長男として1981年に生まれた。姉と弟の3人きょうだいである。弟も3年ほど日本で暮らしたことがある。2009年8月、現在働いている会社でアルバイトをしていた1つ歳下の韓国人女性と結婚した。

教育熱心な父からは、「将来の選択肢をできるだけ多くするために勉強が必要なんだ」と言われて育った。そのおかげで自分は、今、こうして日本で働いてられるのかもしれない。でも、「半端じゃない」韓国の受験競争のあり方は、そろそろ見直す必要があると感じている。

OYさんには、小学生の頃からの夢があった。それはホテルの支配人になることだった。理由は

「カッコよく見えた」から。高校は外国語専門学校に進み、英語を専攻した。大学はホテル学科のある大学に進学するつもりだった。ところが、なぜかOYさんが受験した1999年はホテル学科の人気が高く、合格するには成績がギリギリだったので断念した。専攻を変えたが、幸い奨学金がもらえる大学に進学することができ、在学中に兵役を終わらせた。

1997年の通貨危機は、韓国では政府がIMFに援助要請をするほど深刻なダメージを受けた。OYさん一家の生活も一変した。母親は経営していた店を閉めることになり、理事を務めていた化粧品会社の借金が残ったため、単身で日本に働きに行くことになった。OYさんが高校生の際のことだ。その後、母親は、韓国での経験を生かしてエステ関係の会社を起業し、今も東京を拠点に生活している。

◇ 栄光と挫折 ◇

2004年4月、OYさんは日本語学校に入学するため来日した。来日を勧めたのは、日本で働いていた母親だった。ある日、兵役についていたOYさんの元に母親から一通の手紙が届いた。そこには、「歴史的なわだかまりを脇におくことができれば、韓国人が日本人に学ぶことはたくさんある。だからあなたも機会があれば日本に来て学んだらよい」と書いてあった。

日本語は来日後に「あいうえお」から学んだが、面白いように日本語の力がついた。日本語の先生方にはまだ無理だと言われたが、翌年、ホテルの専門学校に入学し、2年後にはそこそこ有名なホテルに就職した。ホテルの支配人になるという夢に近づけた気がした。ホテルのパンフレットには、「初めての外国人スタッフ」と紹介され写真が載った。OYさんはこの6年間に1度だけ、就職できたことを父に報告するために韓国に帰った。「うちの父はお酒が好きなんで、お酒を飲んだら親戚とか友だちにそのパンフレットを見せながら自慢するわけですよ」。その時の父の満面の笑みが忘れられない。

ところが、OYさんはそのホテルを3カ月ほど退職してしまう。学校では良くできたはずの日本語なのに、仕事の現場では他のスタッフから渡される走り書きのメモが読めない。最初は丁寧に教えてくれた先輩も、そのうちに「読めないなら勉強しろよ」と厳しくなった。スタッフの中には

「韓国人は嫌いだ」という人もいた。初めて味わう挫折感。「もう少し我慢すればよかった」、と思うこともある。一緒に入社した友人は、外国人で初めてのインチャージ（一定の時間帯の責任者）になるという話を聞いた。もし自分が粘っていたらその立場にいたかもしれない。「もちろん、友だちにはおめでたいことなんだけど、自分のことを考えるともったいなかったかなあ」、と思うこともある。

◇ 起業と挫折、男同士の約束 ◇

ホテルは辞めてしまったが、日本の生活にも慣れたところだったので、韓国には帰りたくなかった。何ができるだろうと考えた末に、2007年秋、茨城で焼肉店を起業した。開店資金と当座の運転資金は、母親から借りた。茨城にしたのは資金的に東京での開店は難しかったからだ。最初の3カ月は赤字で、運転資金が減る一方だったので毎日不安だった。年末になると客足が伸びてきた。韓流スターが好きな「オバサン」たちが手伝ってくれたり、毎日食べに来てくれたり、車で1時間ほどのところにある韓国人クラブで働く女性たちにもひいきにしてもらった。ところが、ようやく店が軌道に乗り始めた2008年9月、リーマン・ショックの煽りを受けて経営が行き詰ってしまった。

「資本金を全部使うつもりでもう少し粘ったら、何とかなったかもしれない」。でも余力を残して閉店することを決断した。そのおかげで他の人に迷惑をかけず、母親に借りたお金も返済することができた。店の常連客にも閉店の挨拶をした。茨城ではいい思い出が多い。人に恵まれた。店を閉めた後、2カ月間、身を寄せていたのは常連客のところだった。その人は、奥さんが韓国人ということもあり、一緒に飲んだり、サウナに行ったり、ゴルフに誘ってもらったり、ほんとによくしてもらった。お客さんがトウモロコシやジャガイモを玄関先に届けてくれることもあった。OYさんも店で使うために栽培していたエゴマの葉をお客さんに分けてやったりした。

「リーマン・ショックがなかったら、おそらく茨城の店を続けていたと思う。でもそうしたら、女房には出会うことがなかったんだから、1つを失って、1つを得たってことかな」と前向きに考えることにしている。

2008年の年末に新宿に舞い戻った。卒業した日本語学校に挨拶に行き、そこで今働いている会社

の社長を紹介された。面接の時に社長から「ここで死ぬ気になって働いてほしい」と言われ、心が動いた。「自分が落ち込んでいた時に手を握ってくれた人なので、社長のために、自分のために、男同士の約束のために頑張ろうと思った」。自分が大変だった時に手を握ってくれた人の恩に報いたい。

◇ 埋まらない溝 ◇

茨城では地域の人たちとの良い関係ができたが、東京ではそういった人間関係を期待することはできない。「正直言って、韓国人を嫌がる日本人って結構いるんですよ。それに今は仕事でいっぱい、いっぱいなので、仕事以外で人と付き合う余裕はない」。自分が今まで住んでいた日本人の中に入り込むんだから、邪魔をしちゃいけないと思っている。だから妻にも、ゴミを捨てたり、大声を出さないとか、役に立とうというよりも、なるべく「マイナスをしなきゃプラスになる」と言っている。

年配の人たちからは、直接的に差別されるというより、無視されたり、嫌われているんだなあっていう「雰囲気」を感じることもある。酔っ払いのおじいさんには「韓国人のくせに」と言われたことがある。「韓国だったら殴っちゃうとこだけど、ここは日本だから我慢します」。

他方で、専門学校で親しくなった友人からは、「韓国と日本の歴史的な問題について、自分は日本の代表ってわけじゃないけど申し訳ない」って言われたことがあり、日本人もいろいろな考え方をしているんだということが分かって少しホッとした。「やった側はすぐに忘れてしまうけど、やられた側は忘れない」。この溝はなかなか埋まらないと思う。

◇ 将来 ◇

OYさんが、今迷っているのは、子どもの教育のことだ。まだ、子どもはいないが、日本にいると日本の考え方になってしまうだろう。そうすると自分の子どもでこれまでの家族のつながりがなくなってしまうような気がする。両親には「お互い元気に頑張ればそれでいい」と言われているが、長男としての責任のようなものをどこかで感じている。

子どもができれば韓国へ帰った方がいいのではないかと思うのは、子どもに自分と親との関係を見せたいからだ。祖母もいるので、祖母に対する父の態度も見せたい。そうした関係性の中でしか

育てられないものがあると思う。核家族だとどうしても考え方が自己中心的になると思う。大家族で暮らすと、「勝って勝つじゃなくて、負けてあげて勝つ人間関係」を学ぶことができる。OYさんはそれがとても大事なことだと考えている。「道を選ぶのは子どもだけど、道を作るのは親の責任だ」という父の子育てについての考え方に、今は深く共感することができる。

当面の目標は、「頑張って、正直、上まで行きたい」という。「社内で出世して、母もいるし、女房もいるので、家を買いたい。でも、最後の最後は(韓国に)帰るんじゃないですかねえ」。まだ、将来については方向性が定まっていない。

<인터뷰 11 >

OY씨(20대·남성) 「남자끼리의 약속」

2010년3월30일, 울산출신
한국계기업근무, 일본체재6년
인터뷰어 : 타케다 사토코

◇ 약력, 가족 ◇

OY씨는 한국 남쪽의 공업도시인 울산 출신이다. 아버지께서는 지방 신문사의 간부이시고 어머니는 회사를 경영하시는, 비교적 부유한 집에서 장남으로 태어났다. 누나와 남동생으로 삼남매이다. 남동생은 3년정도 일본에서 생활한 적이 있다. 2009년 8월 지금 일하고 있는 회사에서 아르바이트를 하고 있는 한살 아래의 여자와 결혼했다.

교육열이 높은 아버지로부터 “미래의 선택을 가능한한 많이 만들기 위해서는 공부하는 것이 중요하다” 라는 말을 들으며 자랐다. 그 덕분에 지금 이렇게 일본에서 일할 수 있는 것인지도 모른다. 하지만 도를 넘은 한국의 수험전쟁은 슬슬 재검토할 필요를 느낀다고 한다.

OY씨는 초등학교 때부터 호텔의 지배인이 되는 꿈이 있었는데 그 이유는 멋있게 보였기 때문이라고 한다. 고등학교는 외국어학교에 진학하여 영어를 전공했다. 대학은 호텔과가 있는 곳으로 진학할 예정이었다. 하지만 OY씨가 갈려고 했던 1999년 그 대학의 호텔과가 인기가 높아서 합격하기엔 성적이 아슬아슬했기 때문에 포기했다고 한다. 전공을 바꿨지만 다행히 장학금을 받을 수 있는 대학에 진학할 수 있었고 재학중에 병역의 의무도 마쳤다.

1997년에 있었던 아시아의 통화위기 때에 한국은 정부가 IMF로부터 원조요청을 할 정도로 심각한 데미지를 받았다. OY씨의 가정의 생활도 한번에 변했다고 한다. 어머니께서 경영하고 계셨던 가게도 문을 닫게 되어 이삿직을 맡고 있었던 화장품회사의 빚이 남아 있었기 때문에 단신으로 일본에 일하러 가게 되었다. 그 뒤 어머니는 한국에서의 경험을 살려서 에스테관련 회사를 차려 지금도 동경을 거점으로 생활하고 있다.

◇ 영광과 좌절 ◇

2004년 4월 OY씨는 일본어학교에 입학하기 위해 일본에 넘어왔다. 일본에서 일하고 계신 어머니의 추천이 있었기에 일본에 넘어오게 되었다. 어느 날, 군대에 있던 OY씨에 어머니로부터 한통의 편지가 왔었다. 그 편지에는 “역사적인 응어리를 한 쪽에 제쳐두고 생각해 본다면 한국인은 일본인에게 배울 것이 많다. 그러니까 너도 기회가 있으면 일본에 와서 배운다면 좋다” 라고 적혀 있었다.

일본어는 일본에 와서 “あいいうえお(아이우에오)” 부터 배웠지만 신기할 정도로 일본어 능력이 늘어만 갔다. 일본어 선생님도 무리라고 말했지만 그 다음 해에 호텔의 전문학교에 입학하여 2년 뒤에는 어느 정도 유명한 호텔에 취직하였다. 호텔의 지배인이 되고자 하는 꿈에 조금은 다가선 듯한 느낌이 들었다. 호텔의 팸플렛에는 “첫 외국인 스텝” 이라고 사진소개가 실렸다. OY씨는 6년동안 딱 한번 아버지에게 취직한 것을 말씀드리려 한국에 돌아갔다. “아버지께서는 술을 좋아하시기 때문에 술을 마시면 친척이나 친구들에서 그 팸플렛을 보여주면서 자랑하시곤 합니다.” 라고 OY씨는 말한다. 그 때에 아버지의 웃음이 잊혀지질 않는다.

하지만 OY씨는 그 호텔을 3개월만에 그만두게 된다. 학교에서는 잘 되었던 일본어가 일할 때에 다른 스텝으로 부터 전달되는 메모를 읽을 수 없었다. 처음에는 친절하게 가르쳐 주었던 선배도 시간이 지나자 “읽을 수 없으면 공부해라” 라고 엄하게 말하게 되었다. 스텝중에는 한국인이 싫다라고 말하는 사람도 있었다. 처음으로 맛보는 좌절감. “조금만 더 참았더라면” 하는 생각도 있다. 함께 입사한 친구는 외국인으로서 처음으로 인차지(일정 시간대의 책임자)가 된다는 이야기도 들었다. 만약 좀 더 버텼었다

면 지금 그 자리에 자기가 있었을 지도 모른다. “물론 친구에게는 축하할 만한 일이지만 조금은 아깝다” 라고 생각할 때도 있다고 한다.

◇가게 오픈과 좌절 그리고 남자끼리의 약속 ◇

호텔을 그만두게 되었지만 일본의 생활에도 익숙해 지고 있을 때였기 때문에 한국에 돌아가고 싶지는 않았다. 뭔가 할 수 있지 않을까라고 생각한 끝에 2007년 가을에 이바라키에서 불고기집을 오픈하게 되었다. 개점 자금과 당장의 운용자금은 어머니로부터 빌렸다. 이바라키로 결정한 것은 자금면에 있어서 동경은 힘들었기 때문이다. 처음 3개월은 적자였고 운용자금도 점점 줄기만 했기 때문에 매일이 불안한 나날들이었다. 연말이 되니까 손님도 늘었다. “한류스타”를 좋아하는 아줌마들이 도와주거나 매일 먹으로 와주거나 차로 한시간이 걸리는 한국클럽에서 일하는 여자분들도 도움이 되어 주었다. 하지만 가게가 제자리를 찾아가기 시작한 2008년 8월에 리먼쇼크의 영향을 받아서 가게가 힘들어졌다.

“자본금을 전부 쓸 작정으로 조금 더 버텼다면 어떻게든 되었을지도 모른다” 라고 생각한다. 하지만 조금은 남겨두고 가게 문을 닫는 것을 결정하게 된다. 그 덕분에 다른 사람에게 페를 끼치지 않고 어머니에게 빌린 돈도 다 갚을 수 있게 되었다. 가게를 닫은 지 2개월 후 당시 가게의 단골손님이었던 분에게 신세를 지게 되었다. 그 사람은 부인이 한국인이었던지라 함께 술을 마시거나 사우나에 가거나 골프치러 가자고 말해주는 등 진짜 잘 해주었다. 손님이 집앞에 옥수수나 고구마를 보내어 줄 때도 있었다. OY씨도 가게에서 쓰기 위해 재배하였던 깻잎을 손님들에게 나누어 주기도 했다.

“리먼쇼크가 없었다면 아마도 이바라키에서 가게를 계속했을 거라고 생각한다. 하지만 그렇게 했더라면 아내와의 만남이 없었을 거니까 하나를 잃고 하나를 얻었다고나 할까” 라고 긍정적으로 생각하려고 한다.

2008년 연말에 신주쿠에 다시 돌아왔다. 졸업한 일본어학교에 인사를 하러 갔었는데 그 곳에서 지금 일하고 있는 회사의 사장님을 소개 받았다. 면접할 때에 사장님이 “이 곳에서 뼈를 묻을 각오를 하고 일해주시기를 바란다”고 말해서 마음이 움직였다. “내가 힘들 때에 손을 잡아주신 사장님이기에 사장님을 위해서 내 자신을 위

해서 남자끼리의 약속을 위해서 열심히 하리라 마음먹었다.” 자기가 힘들 때에 손을 잡아준 사람의 은혜에 보답하고 싶다고 OY씨는 말한다.

◇ 메꾸어지지 않는 골 ◇

이바라키에서는 지역주민들과 좋은 관계를 만들었지만, 동경에서는 그러한 인간관계를 기대하기는 힘들다. “솔직히 말해서 한국인을 싫어하는 일본인은 꽤 많아요. 거기다 일이 너무 많아서 일 외에 사람들과 만날 여유가 없어요.” 라고 말한다. 자기가 지금까지 살고 있었던 일본인 속으로 뛰어드는 것이기 때문에 방해해서는 안된다는 생각이다. 그러니까 부인에게도 쓰레기를 버린다던지 큰소리를 내지 않는다면, 도움을 주는 것보다 가능한한 “마이너스적인 일을 안한다면 플러스가 된다” 라고 늘 말하고 있다.

나이 드신 분들에게는 직접적인 차별을 받는다는 것보다 무시당하거나 싫어한다는 분위기를 느낄 경우가 많다고 한다. 술에 취한 할아버지에게 “한국인 주제에” 라고 들은 적도 있다. “한국이었다면 한방 날렸겠지만 여기는 일본이니까 참아야죠.” 라고 말한다.

전문학교에서 친해진 친구에게는 “한국과 일본의 역사적인 문제에 대해 자기는 일본의 대표가 아니니까 미안해” 라고 들은 적이 있어서 일본인 중에서도 다양한 생각을 가진 사람이 있구나라는 것을 알게 되어 조금은 안심했다. “가해자는 쉽게 잊어버리지만 피해자는 잊어버리지 않는다.” 이러한 골은 웬만해서는 메꾸어지지 않을 거라 생각한다.

◇ 장래 ◇

OY씨는 지금 아이의 교육문제로 고민중이다. 아직 아이는 없지만 일본에 있음 일본의 사고방식을 배우게 될것이다. 그렇게 되면 자신의 아이와 지금까지의 가족의 끈이 없어지게 될 것같은 기분이 든다. 부모님은 “서로 건강하게 열심히 한다면 그걸로 된다” 라고 말씀하시지만 장남으로서의 책임감도 어느정도 느끼고 있다.

아이가 생긴다면 한국에 돌아가는 편이 좋을 지도 모른다고 생각하는 것은 아이에게 자기와 부모님의 관계를 보여주고 싶기 때문이다. 할머니가 있기 때문에 할머니에 대한 아버지의 태도를 아이에게 보여주고 싶다. 그러한 관계 안에서만 배울 수 있는 무언가가 있다고 생각한다.

핵가족인 경우에는 어쩔 수 없이 자기중심적인 사고방식을 배우게 된다고 생각한다. 대가족인 경우 “이기고 이기는 것이 아니라 저주고 이기는 인간관계”를 배울 수 있다. OY씨는 그것이 매우 중요하다고 생각하고 있다. “자기의 길을 선택하는 것은 아이이지만 길을 만들어 주는 것은 부모의 책임이다” 라는 아버지의 양육 방침에 지금은 매우 깊게 공감하고 있다고 한다.

지금 당분간의 목표는 “열심히 해서 솔직히 위까지 올라가 보고 싶다” 라는 것이다. “회사안에서 출세해서 어머니도 있고 아내도 있으니까 집을 사고 싶다. 하지만 마지막의 마지막은 한국에 돌아가지 않을까요” 라고 말한다. 아직 장래의 방향성에 대해서는 정해져 있지 않다.

<인터뷰어 12>

KJさん(30代・男性)「一目惚れ」

2010年4月1日、ソウル出身
韓国系企業勤務、日本在住7年
インタビューア：武田里子

◇ 略歴と家族 ◇

KJさんは1977年生まれの33歳。妹が一人いる。父親は、建築関連の運送業を営んでいる。韓国人男性で、特に長男の場合はみな家のことを大事に思っている。KJさんも将来は、両親のために韓国に帰るつもりだが、まずは日本で頑張っただけで成功したいと考えている。KJさんは、日本留学のときに知り合った日本人女性と2009年3月に結婚したばかりだ。両親には、反対されるだろうと、日本人女性と付き合っていることをなかなか言い出せなかった。ところが、意外なことに両親から「好きな仕事をして、好きな人と元気で暮らせればそれでいい」という言葉をかけられ、驚かされた。同棲からなかなか結婚に進まない2人に、業を煮やしたのはKJさんの母親だった。占いで結婚式の候補日を2つに絞り、全ての段取りをつけて、「さあ、日にちは自分たちで決めなさい」と背中を押してくれた。3月14日にしたのは、結婚記念日がホワイトデーと一緒に、忘れないと考えたからだった。

◇ 来日、妻との出会い ◇

「僕の人生って結構まぐれというか、その都度の偶然が重なっているんです」というKJさん。

中学の成績は良かった。高校は、普通の一般学校とどちらかというとエリートが行く外国語高等学校の選択肢があった。外国語高等学校は特別な試験があるが、KJさんはそれに合格した。入学後に専攻する外国語を選ばなくてはならない。KJさんは、第一志望を英語、第二志望を中国語、第三志望を日本語にした。それが「運命」だったのか、第三志望の日本語で受かった。「それまでは、正直、日本に対して何の興味もなかった」ので、「日本語かよ」と思った。大学受験では、外国語高等学校の生徒は、高校で専攻した学科を選ぶと特典がある。浪人はしたくなかったので、大学も日本語学科を選んだ。「僕がこうして今、日本にいるのは、中学3年のときにさかのぼるんです」。在学中に兵役を済ませて、せっかく日本語を勉強したので、日本に行かないまま卒業するのはもったいないと思い、1年間休学して2002年に来日し、代々木にある日本語学校に通った。

当時、韓国人留学生と日本人学生が、毎週土曜日に大久保で日本語と韓国語を相互に学び合う会を開いていた。夜7時から2時間くらい会話練習をした後は、近くの居酒屋で懇親会、というのがいつものパターンだった。KJさんも最初の2カ月ほどその会に通ったが、アルバイトを始めたりするうちに足が遠のいた。その年の暮に友人から電話をもらい、久しぶりに参加した会で偶然出会った女性に一目惚れした。「とにかく可愛かったです。可愛くて仲良くなりたいな」って。何とか携帯電話の番号を聞き出し、翌日から猛アタックを開始するものの、最初のデートにこぎつけるのに1カ月もかかった。「後で聞いたら僕の第一印象はあまり良くなかったみたいです。ひげを生やして茶髪で、あんまりしゃべらないし、無口で酒ばかり飲んでたので。」さらに1カ月位かけてようやく手を握れるところまで来たが、KJさんの留学期間はまもなく終わろうとしていた。4年生に復学して、とにかく卒業しなければならぬ。

2月にKJさんが帰国すると、彼女が3月の連休に会いに来てくれた。5月の連休にも会いに来てくれた。夏休みに入った7月にはKJさんが日本に来た。会えない間はインターネットのチャットや国際電話で連絡を取り合った。当時、KJさんは学生だったので、デートの費用はほとんど彼女が払ってくれた。卒業したら、なんとか日本に行ける仕事を探さなければならぬ。彼女のことでもあったが、日本語を活かせる仕事があった。

韓国に住みながら日本に出張で行ったり来たりする形じゃなくて、韓国企業で日本に常駐できる仕事を探した。しかし、見つからなかった。「いい会社は英語も必要だったので僕のスキルでは足りなくて、途中でこのままでは駄目だな」と思い、それじゃあ韓国語を外国人に教える資格を取ろうと、4カ月コースの講習も受けた。しかし、この作戦も上手くいかなかった。韓国語講師の仕事も見つからず、時間の無駄だったかもしれないと、途方に暮れていたところに舞い込んできたのが、韓国政府が募集して海外の企業に人材を派遣するプログラム情報だった。それに応募して採用され、派遣されたのが今の会社である。再来日したのは、2004年11月。6カ月の研修後は、韓国に戻ることも、正社員として採用される可能性もある。幸い、KJさんは採用された。これで彼女との遠距離恋愛に終止符を打つことができた。それが一番嬉しかった。「親も大感激で、日本で働ける、良かったね」、と喜んでくれた。

◇ 親族で初めての国際結婚 ◇

日本人女性との結婚については、自分の両親の説得はほとんど必要がなかった。むしろ父親は、日本の女性に対して献身的というイメージをもっていたので喜んでくれた。でも親戚の間ではKJさんが初めての国際結婚だったので、「うちの家族にもこんなことが起きるんだ」、と驚いた人の方が多かった。

問題は彼女の両親の説得だった。地方の出身だったせいか、「韓国人と結婚したら韓国に帰らないといけない、お前が苦勞する」、となかなか了解が得られなかった。最後は、説得は無理だろうとあきらめて、押し切ったと言うか、半分無視して同棲の既成事実を作り、「結婚式をこの日に決めたので参加して下さい」と通知を送った。結婚式は韓国であげた。彼女の父親は体調が悪くて参加できなかったが、母親は出席してくれて、「娘をよろしくお願いします」と言ってくれた。「今もまだ、腹を割って話せる関係ではないのですが、嫌な顔はしませんね。たまに遊びに行くときすごいご馳走を作ってくれます」。

◇ 子育て ◇

KJさんは、国籍は韓国のままにするつもりだ。子どもは子どもの自由に任せたい。妻との会話は100%日本語。妻は簡単な韓国語の単語は分かる

が文章にはならない。だから両親との会話は、もっぱらKJさんが同時通訳のように橋渡し役をすることになる。KJさんは韓国語を教える資格もあるわけだから、本当は、韓国語を教えた方がいいと思う。でも、「家に帰ってくると二人とも疲れていて、勉強するエネルギーは残っていない」。それどころか、団地内の付き合いもままならない。「休日は出かける元気もなくて、グターっとしてることが多い。地域活動って暇人じゃないとできないのではないか」、というのが正直な思いだ。

日本と韓国では、性別役割規範に共通性がある。しかし、KJさんは、「世界の半分は女性で半分は男性なんだから、協力し合うのは当たり前だ」という考えだ。女性も「女だから」という考え方をする人や、女性であることに甘えている感じの人は好きではない。両親には、「早く孫の顔が見たい」と言われているが、妻が子育てと仕事を両立できるかどうか不安がある。生活費が高い日本で暮らすには、自分の稼ぎだけでは生活は難しい。子どもができて共働きをすることになるだろう。だから、子どもを保育所に上手く入れられるかどうか、今から心配だ。

子どもは日本語が主体になると思うが、韓国語も幼いころから「注入したい」。日本語と韓国語が両方喋れたらすごく得だと思うし、それに英語もできたらすごく可能性が広がる。子どもは頭が悪くてもいいから健康であればいい。今の韓国の受験戦争は行き過ぎだと思っているので、子どもはのびのび育てたい。

◇ 将来 ◇

KJさんは、将来的には、自分の店をやるか、事業を起こしたいと考えている。そして、今より、頻繁に韓国と日本を往来できるようになりたい。まだ、漠然としているが、起業するとしたら飲食店、会社を作るなら貿易関係になるだろう。独立したいと思うのは、縛られたくないからだ。縛られないためには独立するしかない。両親は、結婚には賛成してくれたが、さびしい気持ちもあると思う。20何年も一緒に暮らしてきた息子がいきなり突然姿を消したようなものだから。でも、例えば、日本でも東京に両親がいて、大阪とかで仕事をしている人は、なかなか頻繁に東京に来られない。それがたまたま韓国だったと考えればいいんじゃないだろうか。日本と韓国は飛行機で2時間ほどの距離なので、少し遠い所で仕事

をしている感覚でとらえればいいのだ。ただ、今は、時間とお金の問題で、度々帰国するというわけにはいかない。起業したいというのは、時間的にも金銭的にも余裕ができれば、韓国との往来もしやすくなると思うからだ。

<인터뷰 12>

KJ씨 (30대·남성) 「첫눈에 반해버린 나의 아내」

2010년4월1일, 서울출신
한국계기업근무, 일본체제7년
인터뷰어 : 타케다사토코

◇ 약력, 가족 ◇

KJ씨는 1977년에 태어나 현재 33살로서 여동생이 한명있다. 아버지는 건축에 관련된 운송업을 경영하고 계신다. 한국의 남성, 특히 장남의 경우에는 자신의 집을 소중히 생각하고 있는데 KJ씨도 장래에는 부모님을 위하여 한국에 돌아갈 예정이라고 한다. 하지만 지금은 일본에서 열심히 해서 성공하고 싶다고 한다.

KJ씨는 일본유학 중에 알게 된 일본인 여성과 2009년 3월에 결혼하였다. 부모님에게는 반대할거라고 생각해서 일본인 여성과 사귀는 것을 좀처럼 말하지 못했다. 하지만 의외로 부모님에게서 “좋아하는 일을 하고, 좋아하는 사람과 건강하게 살면 그걸로 된다”라는 말을 듣고 놀랐다고 한다. 동거를 시작하고서 결혼하기까지 2년이 걸린 두 사람에게 결혼을 부추긴 것은 KJ씨의 어머니였다. KJ씨의 어머니는 점을 보고 난 뒤, 2개의 결혼식 후보날을 정하였고 모든 일정을 결정하고 “자 결혼 날짜는 둘이서 알아서 정해라”고 등을 떠밀었다고 한다. 결혼식을 3월 14일로 정한 이유는 결혼기념일이 화이트데이와 같은 날이라면 잊어버리지 않을 거라고 생각한 이유에서라고 한다.

◇ 일본에 건너 옴, 아내와의 만남 ◇

“나의 인생은 꽤 변덕스럽다고 할까, 그때 그때 우연이 겹쳐졌었습니다”라고 말하는 KJ씨. 중학교 시절의 성적은 꽤 좋은 편이었고 고등학교도 보통의 일반학교나 또는 엘리트들이 다니는 외국어 고등학교에 진학하는 갈림길에서 KJ씨는 외국어 고등학교에 입학하기 위한 특별 시험에 합격하였다. 입학 후에는 전공 외국어를 선택하

지 않으면 안되었었는데 KJ씨는 제1지망으로 영어, 제2지망으로 중국어, 제3지망으로 일본어를 선택했다고 한다. 하지만 운명이었는지 모르지만 전공으로 제3지망인 일본어가 되었다고 한다. “그 때까지는 솔직히 일본에 대하여 아무런 흥미도 없었기에 뭐야 일본어인가”라고 생각했다고 한다. 외국어고등학교 학생의 경우 대학수험에서 자신이 고교에서 전공한 학과를 지원할 경우 특전이 있었다. 재수를 하기 싫었기 때문에 대학도 일본어를 선택했다. KJ씨는 “내가 지금 이렇게 일본에 있을 수 있는 것은 중학교 3학년 때로 거슬러 올라갑니다”라고 말했다. 재학중에 병역의 의무를 마친 KJ씨는 모처럼 일본어를 공부했는데 일본에 한번도 가지 못하고 졸업하기에는 너무 아깝다는 생각을 하고 1년 휴학을 한 뒤 2002년에 요요기의 어느 일본어학교에 다녔다고 한다.

당시 한국인 유학생과 일본인 학생이 매주 토요일 오오쿠보에서 일본어와 한국어를 서로 배우는 모임이 있었다. 밤 7시부터 2시간 정도 회화연습을 한 후에 가까운 이자카야에서 뒷풀이를 하고는 했었다고 한다. KJ씨도 처음 2개월 정도 그 모임에 다녔었지만 아르바이트를 시작하면서 점점 안 나가게 되었다고. 그 해 말에 친구가 전화를 해서 오랜만에 모임에 참가했었는데 우연히 만난 여성에게 첫눈에 반해버렸다고 한다. “어딘가 귀여웠어요. 귀여워서 친해지고 싶었죠”라고. 이리저리해서 휴대폰 전화번호를 알아낸 뒤 그 다음날부터 강하게 대쉬를 했지만 첫 데이트까지 한 달정도가 걸렸다고 한다. “나중에 들은 얘기지만 나의 첫인상이 별로 안 좋았다고 해요. 수염을 기르고 염색한 머리에 말도 별로 안하고 묵묵히 술만 마시고 있었기 때문에”. 첫 데이트로부터 한 달뒤 겨우 손을 잡을 정도가 되었는데 그 때는 벌써 KJ씨의 유학생살이 끝나려고 하고 있었다. KJ씨는 한국으로 돌아가서 4학년으로 복학하여 졸업하지 않으면 안되었다.

2월에 KJ씨가 귀국하고 3월에 여자친구가 자기를 만나러 연휴동안 한국에 와주었다. 그리고 5월에도 연휴동안 만나러 와주었고 7월달에 여름방학이 되자 이번에는 KJ씨가 여자친구를 만나러 일본에 왔었다고 한다. 떨어져 있을 때는 채팅이나 국제전화로 서로 연락을 주고 받았다. 당시에는 KJ씨가 학생이었기 때문에 데이트 비용은 거의 여자친구가 내주었다고 한다. 졸업하

고 나서는 어떻게든 일본에서 일하는 직장을 구하지 않으면 안되었다. 여자친구도 그렇지만 일본어를 활용할 수 있는 일을 하고 싶었다고 한다. 한국에 살면서 일본으로 출장가는 형식의 일이 아니라 일본에 살면서 할 수 있는 일을 찾았지만 거의 없었다고 한다. “좋은 회사는 영어도 필요했었기 때문에 나 스스로 기술도 부족했고 이정도로는 안되는구나” 라고 생각해서 외국인에게 한국어를 가르치는 일을 하고자 4개월 코스의 강습을 받았다. 그러나 이 작전도 실패로 끝났다. 한국어강사 자리도 찾지 못하고 헛되이 시간만 흘러가고 있을 때 한국정부가 모집하던 해외기업에 인재를 파견하는 프로그램의 이야기가 귀에 들어왔다. 그 모집에 응모해서 채용되어 파견된 곳이 지금의 회사이라고 한다. 다시 일본을 찾은 것은 2004년 11월이었다. 6개월의 연수 뒤에는 한국에 돌아갈 수도, 일본에 남아서 정사원으로 채용될 가능성도 있었다. 다행히 KJ씨는 채용되었다고 한다. 이걸로 여자친구와의 원거리연애에 종지부를 찍을 수 있었다. 이 일이 가장 기뻐했다고 한다. 부모님도 너무 좋아하셨고 “일본에서 일할 수 있어서 다행이네”라고 기뻐해 주셨다.

◇ 친척중에서 처음있는 국제결혼 ◇

일본여성과의 결혼하는 것에 부모님의 설득은 거의 필요없었다. 오히려 부모님께서도 일본여성에 대하여 헌신적이라는 이미지를 가지고 있었기 때문에 기뻐해주셨다. 하지만 친척중에서 국제결혼은 KJ씨가 처음이었기에 “우리 가족에게도 이런 일이 일어나는구나” 라고 놀라는 사람이 많았었다.

문제는 여자친구의 부모님을 설득하는 것이었다. 지방출신인 것도 있었지만 “한국인과 결혼하면 한국에 돌아가지 않으면 안되잖아, 너가고생활 거야” 라고 웬만해서는 이해해주시지 않았었다고 한다. 나중에는 설득하는게 무리라고 생각해서 억지로 밀어부쳤다고나 할까 동거라는 기정사실을 만들어서 “이 날에 결혼식을 합시다 참가해주세요” 라고 연락을 했다고 한다. 결혼식은 한국에서 올렸는데 장인어른은 몸이 안 좋아서 참가하지 못하고 장모님은 와 주셔서 “말을 잘 부탁드립니다” 라고 말씀해주셨다. “아직까지도 편하게 얘기하지는 못하지만 싫은 얼굴은 하지 않으십니다. 가끔 놀러 가면 맛있는 음식 많이 주시죠” 라고 KJ씨는 말한다.

◇ 양육 ◇

KJ씨는 자기의 국적을 한국인 채로 놔둘 생각이지만 아이는 아이의 자유에 맡길 생각이다. 부인과의 대화는 100퍼센트 일본어. 부인은 간단한 한국어 단어정도 알 뿐 문장은 모른다. 그래서 부모님과 대화는 KJ씨가 중간에서 동시통역처럼 가교역할을 하게 된다고 한다. KJ씨는 한국어를 가르치는 자격이 있으니 한국어를 가르치는 편이 낫다고 생각하지만 “집에 돌아오면 둘다 피곤에 지쳐서 공부할 힘이 전혀 남아있지 않아요” 라고 한다. 그 뿐만이 아니라 이웃간의 교류도 좀처럼 되지 않는다고 한다. “휴일에는 놀러갈 힘도 없어서 축 늘어져 있을 때가 많아요. 지역활동이라는 것은 한가한 사람만 할 수 있는게 아닌가요” 라고 솔직히 생각한다고 한다.

한국과 일본에서는 남녀역할규범에 대해 공통점이 있다. 하지만 KJ씨는 “세계의 반은 여자고 반은 남자이니 서로 협력하는 것은 당연한 것이다” 라는 생각이다. “여자니까” 라는 생각을 가지고 있는 여자나 자기가 여자라고 응석부리는 사람은 별로 좋아하지 않는다고 한다. 부모님은 “빨리 손자 얼굴이 보고 싶다” 라고 말씀하시지만 아내가 양육과 일을 병행할 수 있을까 걱정이다. 생활비가 많이 드는 일본에서 살기 위해서는 자기가 버는 것만으로는 힘들다. 아이가 생겨도 맞벌이를 계속하게 될 것이다. 그래서 아이를 보육원에 잘 보낼 수 있을까 어떨까 지금부터도 걱정이다.

아이는 일본어를 주로 하게 되겠지만 한국어도 어릴 때부터 주입하고 싶다. 한국어와 일본어 양쪽 다 하게 되면 매우 도움이 되리라 생각되고 거기다 영어까지 된다면 더욱 가능성이 많아지리라 생각된다. 그리고 아이는 머리가 나빠도 되니까 건강했으면 좋겠다고 한다. 지금의 한국의 수험전쟁은 과도한 면이 있기에 아이가 건강하게만 자라줬으면 좋겠다고 한다.

◇ 장래 ◇

KJ씨는 장래에 자신의 가게를 열던가 회사를 만들고 싶다고 생각하고 있다. 그리고 지금보다 더욱 한국과 일본으로 왔다 갔다 할 수 있기를 원하고 있다. 그리고 막연하기는 하지만 가게를 연다면 음식점, 회사를 만든다면 무역관계쪽 일이 될거라고 한다. 독립하고 싶어하는 KJ씨는

自らが무언가에 얽매이기 싫어서라고 한다. 얽매이지 않기 위해서는 독립하는 수 밖에 없다.

부모님께서 결혼에는 찬성해주셨지만 섭섭한 마음도 있으시리라 생각한다. 20여년동안 같이 살던 아들이 갑자기 모습을 감춘 것과는 같은 상황이니까. 하지만 동경에 부모님이 있고 오사카에 일을 하고 있는 사람도 역시 웬만해서는 부모님을 만날 기회가 없는 것은 마찬가지가 아닌가요? 그것이 KJ씨의 경우에는 한국이라고 생각하면 되지 않느냐라고 한다. 한국과 일본은 비행기로 2시간 거리이기 때문에 조금 먼 곳에서 일하고 있다고 생각하면 되는 것이다. 단지 지금은 시간과 돈문제로 자주 귀국할 수 있는 입장이 되지 못한다. 자기 회사를 만들고 싶은 이유는 시간적으로도 금전적으로도 여유가 생기면 한국을 자주 왔다 갔다 할 수 있어서이다.

<인터뷰어 13>

Mさん(30代・男性)「どの国でもいいところ・悪いところはある」

2010年4月1日、京畿道出身
博士後期課程4年生、日本歴6年半
インタビューア：若園雄志郎

◇ 日本に来てみて ◇

韓国の大学を卒業して6ヶ月程語学学校に通ってから日本に来た。現在は大学院教育学系研究科の博士後期課程に在籍している。なぜ博士課程に進学したのかについては、「特に理由はない」ようである。生計は基本的に韓国語を教えるなどのアルバイトで立てているが、殆ど家賃と食費で消えてしまうので生活は苦しいという。

◇ 現在について ◇

だいたい3年前、修士の頃は時間的に余裕があったためにいろいろな人と会うことができたが、現在はアルバイトに時間を割かねばならず、なかなか機会が無いようである。そのため留学生センターなどに情報と人を求めて行くこともあったということであった。

◇ 日本について ◇

韓国の大学・大学院と日本との差はどこにあるのか、という問いに対してはしばらく考えた上で「言葉の使い方や自分の振る舞い」と答えた。た

だしこれは韓国の友人であっても変わらない、ということであるので、文化の違いというよりは通常の間人間関係として考えていだろう。

日本に対するイメージは特にないが、強いて挙げれば韓国にいたときに親切にしてくれたのが日本人だったということがあった。留学先に日本を選んだのは「自分でもわからない」という。むしろどの国でもいいところ・悪いところはあるのだから、先入観を持って日本に来たということではないらしい。もちろんこれは人に対しても同様であり、いい人もいれば悪い人もいる、というようにある種達観した部分があるように感じられた。

新宿について、大久保周辺はあまり行かない。Mさんとしては身近に思えないようである。歌舞伎町についてはアルバイトをしていた経験から細かい地理まで知っているというが、愛着があるということではなさそうである。

日本の良くない点について重ねて尋ねてみたところ、行政の手続きの煩雑さを挙げていた。これは引っ越しをよくやると話していたため、その保証人などの手続きが煩わしいことがよくあるのであろう。しかし物価については日本の方が比較的安いように思われること、そしてなんとか経済的に自立していることから住みやすいところだとは感じているようである。

◇ 将来について ◇

「正直、将来のことは一切考えてない」と話していた。語学でも現在の専門でも講師になればなってもいいらしいが、採用されるかどうか不安だという。ただし講師という将来を目標としているわけではなく、語学学校でも大学でも自分に合ったものがあれば問わないということである。Mさんにはまだ具体的な将来像を持っているわけではないことが全体を通じて感じられたことである。わざわざ日本に留学している以上、インタビューの中ではMさんに何らかの具体的な将来像があるのではないかと期待していた部分があったことは否定できない。しかし、Mさんのようにまだはっきりとはわからないと考えている場合もあるということがわかったことは発見であった。

<インタビュー 14>

Tさん(40代・男性)「新宿から二度目の出発」

2010年4月3日、ソウル出身、会社員
日本歴通算約15年
インタビュアー：渡辺幸倫

◇ 来日のきっかけ ◇

1965年生まれの男性。8人兄弟の8番目としてソウルで生まれる。実家は大手の布団屋さん。兄がアメリカに留学していたこともあり、自分もアメリカに行きたいと考えていた。しかし、韓国で教育大学在学中にその兄が帰国してきたので日本留学へと進路を変更。「日本はバブルの時代だったから、ちょっと良いんじゃないかなって思った」と振り返る。

◇ 来日当初の思い出：楽しい日々 ◇

新大久保にあった日本語学校に2年通い、その頃に出会った日本人と大学卒業後の96年に結婚することになる。Tさんが通っていた歯科の衛生士だった。彼女が初めて話をした外国人はTさんだったという。「最初はデートの時に辞書を何冊か持って。もう漢字わかんなかったら探したりですね」。思い出話に笑いはつきない。日本語学校卒業後には浦和にある短期大学へ進学した。美術を学びたかったが家族の意見を取り入れ経営学を専攻する。卒業後には東京や大阪などに住み、貿易や飲食店などいろいろな仕事を経験した。在日韓国人の親戚とも頻りに会っていた。当時はあまり日本に外国人は多くなく、いろいろな人によくしてもらったのがよい思い出。「僕は運がいいのかもしれない」と笑ってその頃のエピソードを話してくれた。知り合ったある外食チェーンオーナーに社員旅行に招待されたこともある。そのオーナーとの家族ぐるみの交流はその後韓国に帰国してからもしばらく続いた。

◇ 韓国への帰国：成功と挫折 ◇

99年、妻の実家のある大阪に住んでいる時に家族の薦めもあって韓国へ。家業をしばらく手伝うが、自立して商売をすることになる。化粧品業の輸出業。韓国で製造し、日本や東南アジアなどに輸出、大手ドラッグストアチェーンの店頭で商品が並んだ。特にシンガポールはテレビ広告なども出した思い出の地。仕事が多忙を極めたその時期に離婚。子どもはいなかった。しばらくすると韓国の大企業が競合品を出すようになり徐々に業績が下がってくる。4年ほどはやった化粧品業に見切

りをつけ、友人の誘いもあって2007年に再来日。二回目の日本での長期滞在が始まる。

◇ 再来日とこれからの目標：再出発 ◇

今回の来日後にも友人の会社をしばらく手伝った後、別の会社に勤めたが、その会社が倒産。しばらく求職活動をしていたが、最近貿易会社に仕事が決まり、現在はビザの申請中。

今後はその会社に勤めながらもお金を貯め、飲食店を開くという希望を持っている。一時期のような大きな会社を経営するということまでは望まないが、自分で独立した事業をしたい。飲食店は韓国料理をベースにしたフュージョンをテーマに、競争の激しすぎない少し郊外に開くのがよいだろうと思っている。そこでさらに資本金を貯めて貿易の仕事でも自立する事を目指している。

「結構お金もあったんですけど、それも全部なくなってしまって…。今は大変ですけど、まだ若いから、がんばるしかないなって思って日本にまた戻ってきたんです。これからは、昔みたいな大きな夢じゃないんですけど、がんばってちょっとずつ貯めて食堂をトライして。もともと貿易の仕事ばかり何年もやってたので、それもやってみたいになって思ってるんです。やっぱり資本金の問題で、食堂をやっとうまくいったらそれからやるでしょう。」

<インタビュー 15>

PYさん(30代・女性)「チャンスの女神の前髪」

2010年4月5日、ソウル出身
韓国系企業勤務、日本在住7年
インタビュアー：武田里子

◇ 略歴と家族 ◇

PYさんは1978年、2人姉妹の長女として生まれた。PYさんが最初に来日したのは、日本に留学していた母親の元を訪ねた小学3年生の頃にさかのぼる。また、曾祖父は日本生まれという家庭環境で育ったためか、日本には外国というイメージがない。東京はソウルとそれほど変わらないので、親戚の家がある「まち」みたいな感覚だという。

大学では幼児教育を専攻した。その後、1998年に国費留学生として来日した時には、もともと興味があった子ども服の研究をするため、都内の

大学で服装造形を学ぶことにした。当初は大学院に進むつもりだったが、卒業制作のファッションショーで担当した演出の面白さにはまってしまった。このPYさんの進路変更は先生方を慌てさせ、大学院でPYさんを指導する予定だった先生には怒られた。芸能関係の仕事は一見華やかだが、苦勞することは分かっていた。でも、若い時でなければできない。ソウルコレクションを担当する韓国の会社から内定をもらったのは、卒業の1週間前だった。「今、来なければ次の人にポジションを回す」と言われ、考える余裕などなかった。「チャンスの女神の前髪」を掴まなければ後で後悔する。帰国したのは2003年。そこで3年ほど働いて、2006年に再来日した。韓国の芸能関係にネットワークがあることをかわれて、今勤めている会社の社長に日本で働かないかと誘われたのだ。

PYさんの妹も大学2年の時に日本に短期留学したことがあり、現在は日本の大手銀行で働いている。近く、海外に赴任する。娘二人は日本で働き、母も仕事の関係で東京とソウルを行き来している。家族の中では父だけがソウルを拠点に暮らしている。

◇ ソウルと東京 ◇

新宿や大久保は看板や標識にハンゲルがあり、逆にソウルの明洞に行くとき日本語ばかり聞こえてくるので、「ここは何処かしら」と思うことがある。勤務先の会社には韓国人が多く、打合せも韓国語ですることがある。言葉や生活、文化面でのストレスがないためか、ホームシックの経験はない。それどころか、20代の前半を日本で過ごし、社会経験が日本で始まったせいか、自分が日本人化していると感じることがある。例えば、最近、韓国もマナーが良くなったが、乗客は並ばないでバスが来ると一斉に乗りこもうとする。ソウルに帰った時に、友だちに「どうして並ばないの」と言うと、「日本人みたいなこと言わないでよ」、と笑われてしまった。

東京は女性にとって住みやすい。一人の時間を持てるのがいい。韓国でランチタイムを一人で過ごしていると、友だちがいないのかとか、いじめられているのかとか、いろいろ詮索される。また、ランチの時はいつも先輩がおごってくれる。日本では割り勘。PYさんにもソウルで3年働いているうちに後輩ができた。「ランチに行こう」、と後輩に声をかけると、財布を持たずに「はい」と立

ち上がる。「なんで？」って思う。しばらくして、PYさんは「割り勘文化」を会社に持ち込んだ。上司が女性だったせいか、意外にすんなりと受け入れられた。

日本の良い点は、女性向けの商品がとても充実していることだ。ヘアースプレーやマスカラなどの種類がとても多い。人気のあるお土産は「さらさらシート」だ。韓国は湿度があまり高くないためか「さらさらシート」を売っていなかったのが喜ばれた。FIFAワールドカップ以降、日本のいろいろな商品が韓国に入って来るようになった。例えば、制汗スプレーも以前はニベアのものしかなかったが、最近はとても種類が豊富になった。

日本の生活にはほとんどストレスを感じないというPYさんだが、未だに違和感を覚えるのが友人との付き合い方だ。韓国では友だちとの約束は気軽に、「今日は天気がいいから一杯飲まない？」と思いついたら電話をするだけでいい。ところが日本では、大学の同級生で集まるといっても、1か月位前からメールで待ち合わせ時間を決めて予約をし、誰誰が来れないとか来るとか、予算はいくらとか、細かいことまで事前に決めないといけない。「もっと、気軽に声をかけて、都合が悪ければまた次に」という感じでいいのと思う。この面倒臭さには、未だになじめない。

◇ 韓国のイメージアップ ◇

今の会社に誘われた時、「迷いがなかった」といったら嘘になる。ソウルの仕事にも未練があったし、実はアイドルにはあまり興味がなかった。それでも、この誘いを受けることにしたのは、いくつか理由がある。一つには、日本で韓国人のイメージがあまり良くないことが気になっていたからだ。仕事で日本に韓国文化の紹介ができる。そして、韓国をアピールしながら、自分が頑張っている姿を日本の人に見せることで少しは韓国のイメージアップに役立つかもしれない。それに、この仕事も年をとったらできない。「チャンスの女神の前髪」を掴まなければ、後で後悔する。もし、これがアメリカやイギリスで働かないかという誘いだったら断っていただろう。東京はPYさんにとっては知り合いのいない釜山よりも身近な場所で、友だちもいて、妹もいて、母もしょっちゅう来るところだ。心理的な壁は低い。

最初に担当した仕事は、韓国スターのグッズやCDの輸入だった。ファッションショーの仕事な

どを通じて広げた芸能関係のつながりを活用している。仕事で一番必要なことは、韓国の芸能情報をいち早く入手すること。特にCDは、レコーディングの段階で押さえないと、製造枚数が限られているため必要な枚数を確保できない。雑誌も、例えば、表紙が「ヨンさま」だったら、出版前に何百冊、何千冊とおさえないと手に入らない。そこがPYさんの腕のみせどころになる。情報とネットワークが勝負だ。この仕事をするようになるなら、韓国にいる間にもっと幅広く知り合いを作っておけば良かったと思う。「好き嫌いがはっきりしているので、性格が悪そうな人とはあまり親しくしないとか、選別して付き合っていた」ことを、少し悔やんでいる。

◇ 将来 ◇

最初は5年位働いたら韓国へ帰り、結婚することになるだろうと思っていた。それが今は、日本に居るなら35年ローンでマンションを買おうと思っている。これは全く想像していなかった展開で、自分でも驚いている。生活の拠点はこれからも日本になるだろう。

将来構想を変えることになった理由を考えると、2つくらいあるように思う。一つは、今の仕事が面白くて充実感があるからだ。もし、朝9時に出勤して夕方帰るという単調な仕事だったら、韓国に帰っていただろう。新人歌手は次々にデビューするし、新しい音楽も次々にリリースされる。面白い芸能関係のニュースには事欠かない。そうした情報をいち早くキャッチして、誰にも注目されていない商品を仕入れて、それが売れたときには仕事の手ごたえを感じる。

もう一つは、職場環境が大きいと思う。勤務先の社長が女性を活用する明確な方針を打ち出しているからだ。特に、文化分野は男性より女性の方が適していると、全ての部門の責任者に女性を起用している。PYさんの世代が主力だが、最近、そのうちの一人が出産した。すると、これから次々に産休に入るだろうからと、子育てと仕事が両立できるように保育施設の検討も始めた。

ただ、マンションを買う話は父親がさびしい思いをするような気がして、まだ言い出せずにいる。妹も日本で暮らすことになるだろう。父親からは、「女性でも何でもできなきゃだめだし、もし旦那がフリーターだったらしっかり働かなければだめだ」と言われてきた。「パパは老人ホームに入るか

ら、早く嫁に行け」と言うが、本心は一緒に住みたいと思っているに違いない。20代前半の頃は、「30歳までに絶対結婚する」と思っていたが、仕事が面白くなったら結婚願望が小さくなった。でも、来年には結婚したいと思う。子どものことを考えると、小学校の入学式で母親が40歳過ぎていたらかわいそうだと思うからだ。付き合っている韓国人の彼とは、マンションを買うかどうかについて、まだ、意見がまとまっていない。

<インタビュー 16 >

Tさん(30代・女性)「異国での出産と教育について」

2010年4月7日、ソウル出身

主婦、日本歴13年

インタビュアー：川村千鶴子・李 坪鉉

◇ 経歴と概要 ◇

1970年大田市(デジョン)生まれ、ソウル周辺の小学校を出る。姉家族を助けるためにシドニーに1年滞在し、その後結婚(1997年)、3度の訪日体験のある夫の希望でももに来日(1997年)、夫は留学生となり大学に入学し、家族滞在となる。

2003年就職、出産後2児の母となる(国立医療センターと社会保険中央病院で出産、入院助産の費用が出たうえに30万円の出産手当もあった)。

いくつかの仕事を体験した。不慣れな日本語で敬語の使い方を間違えたことを理由に解雇されたこともある。2009年12月に、職安通りに化粧品を中心とする韓国物産の小売店を起業することになった。保証金、家賃を払いながら、インタビュー時で4ヶ月になる。顧客は40代~50代の韓流ブームに乗った日本人女性が大半を占める。夜は観光バスでやってくる。ビジネスの展開、勝負どころはまさにこれからといったところ。Tさんは、接客業に向いていたコミュニケーション力のある性格で、ファンミーティングを企画するなど希望に満ちていた。

◇ 異国での出産 ◇

Tさんは日本で二度の出産を経験する。一番目の子のときは、まだ、日本語がうまく話せず、病院での検査の度に夫と一緒に رفتりした。しかし、実際の分娩の時は、立ち会いができないと言われ、不安な気持ちのまま、一人で分娩室で頑張

ったという。

分娩がうまく進まず、24時間以上たった頃には、主人がお医者さんに何回も帝王切開をお願いしたそうだが、自然分娩を勧められ、出産の違いも感じたという。後から考えると手術せず良かったという。

産後の手伝いのため、義理の母が来日してくれたが、家から病院に来る間、電車を間違っ、迷子になり、夫が迎えに行ったというエピソードも話してくれた。

異国での出産は不安であったが、区から出産助成金をもらい、少なくとも経済的不安から開放されていたこと、同胞同士の助け合いもあったことなどが家族の結びつきを強めてきた。ちなみに当時の母子手帳はまだ日本語だけであった。

◇ 子どもの保育と教育について 一励みと悩み一 ◇

Tさんには小学校5年生と1年生の娘さんがいる。この子どもたちの誕生から子育て、現在までの悲喜こもごもの体験が、Tさん夫婦の絆を強めているとあっていいだろう。他にも保育や子育ての話など、移住する家族の実態を語ってくれた。経済的に苦しいときに、子どもたちのお稽古事をすべて止めたこともあった。日本語習得の進む子どもたちの成長は、夫婦の前向きな姿勢を勇気づけている。特に商売に挑戦するエネルギーは、子育てで自信をつけてきた過程と無関係ではない。

日本の公立保育園での経験が良く、日本の小学校に入れる際の迷いは無かったという。学校から持ってくる溢れるほどのチラシは理解できず、ほぼ捨てているが、準備するものに関して、保育園での遠足の際のお弁当が用意できなかった経験があり、それ以後は、子どもがしっかりと教えてくれるようになって助かるという。

Tさんは、韓国の知識中心の小学校教育とは違って、体育を始め、多方面でも体験をさせてくれる日本の教育方針に満足しているという。

しかし、Tさんの悩みのひとつは、子どもたちに韓国語を学ばせたいと思っていることだ。現在、こどもたちは日本語を日常的に使用しているが、将来を考えると母語であるハングルを修得させておきたい。そこで、家では、ハングルの絵本を読ませたり、書き写したり、韓国語で返事をしてくれたら、小遣いをあげるなど、色々と工夫している。

◇ 将来の展望 ◇

Tさんの話を聞くと、日本での子育てを通した様々な経験が、人とのつながりを生み、人との付き合いの中での円満さを高め、さらにはご主人が始めた商売をしっかりとサポートできる源になっているように思える。そして、苦勞してきた経験を通して学んだ、韓国の魅力（コスメティック、インテリア商品など）を営業に活かすというマーケティングを展開しようとしている。顧客としては国籍を問わず、「女性」をターゲットとしているようだ。

今後、子どもたちの成長に伴って、ますます日本社会に根付いたビジネスで成功できる可能性は大きい。地域には、韓流ブームに乗って、遠隔地からも顧客が訪れてくる。新しい日韓の関係性や家族の生活の向上は、Tさんに市民としての意識をも培っているように感じられた。

<インタビュー 17>

ヒロさん(30代・男性)「韓国でできないことをしましょう」

2010年4月11日、京畿道出身
大学院生、日本滞在歴4年
インタビュアー：若園雄志郎

◇ 日本に来るまで ◇

ヒロさんは韓国の大学で英語関連の学部を卒業した後、専門学校で語学講師・マネージャーをやっていた。マネージャーというのはヒロさんによれば韓国語も出来て英語も出来る人で、外国人生徒に何か問題が起きた時に相談や調整を行うものだという。ここでは「西洋人と一緒に生活して、留学のかたちで国際的な気持ちでやったから、あんまり大変なことはなかった。新鮮で、自分是他の人が出来ないことをやったからちょっと期待があった」という感じだったとのことであった。

◇ 来日してから現在 ◇

その後「新しい挑戦」として来日し、日本語学校でひらがなから学んだ。来日にあたっての手続きや住居探しなどは業者に任せず全て自分一人で行ったという。それは「自分はおしゃべりで、人と人のつながりとか人と会うことが好きだから、自分がひとつひとつ調べてるその過程も自分にと

って大事な部分じゃないか」「何でも自分一人でやろうと思えばできないことはない」と述べていた。自分の手で全て行きたいという意志が感じられるといえるだろう。同時に「どこに居たって人間が住む場所は一緒」とも述べていたが、これは日本以外にも多くの国々を旅した経験が生きるとのことであった。

来日した際は食堂で厨房手伝いをしていた。しかし、このような体力の要る仕事では勉強に影響してしまうと考え、現在では社会科学系の大学院に進学したこともあり体より頭を使う仕事として英語や韓国語の個人レッスンをやっている。そうすることで自分の語学スキルも維持できているという。

◇ 将来について ◇

英語のスキルを生かし、教師など教育関係の仕事に就きたいと考えている。教えることができるのであれば小学校でも大学でもかまわないという。自分の力が生かせれば、日本も韓国もこだわりはなく、アメリカなどでもいいそうである。そのため、日本に定住する、あるいは韓国に帰国するというのも、どこで自分の力が生かせるかによって選択は変わってくると答えていた。

◇ 新宿について ◇

ヒロさんは「三角形をつくってみる」と述べていた。これは、住む場所、仕事をする場所、学校の3ヶ所を結んだときにできる三角形が小さい程いい、ということだという。それぞれが遠ければ遠い程無駄が多いのである。大久保は韓国の食堂が多いからアルバイト先が多い、近隣に学校も多くある。それを考えたときに家賃が少々高くてもその三角形を小さくできるようなところ、つまり大久保ないしは新宿が最も合理的ではあると考えているという。

しかし、「最初は新宿・大久保にコミュニティを求めて行くが、1年程度でやっぱりここは日本だから、韓国人だけのつながりだけのためにここに居る必要ないじゃないって思う」「最初は、弱い時は、大久保に入って、ちょっと自分が強くなったら、もっと他の場所にちょっと増やす」とも答えており、常に人との関係を求めて発展させていこうとしているのである。

◇ 日本について ◇

気になることとしては相手が西洋人か、韓国人

や中国人かによって日本人の態度が全く違うことだという。つまり西洋人に対しては自分たちが英語ができないことを申し訳なく思っているのに対して、韓国人や中国人に対しては彼らが日本語ができないことや不十分な日本語であることを見下している部分があるように思うとのことであった。また、日本では書類が多いこと、仕事などの手順について間違いを許さないことなど、「情がない感じ」であることについても、もっと人とのつながりを大切にしたい方がいいと感じているようである。

さらに、日本語の「ちょっと…」という表現についても、はっきりと意見を表明しないことについて違和感があるという。例えば日本人を食事に誘おうとしたときに相手が「ちょっと…」と答えたとき、それは「今は行けない」なのか、それとも「あなたとは行かない」なのかがわからないのである。「あなたとは行かない」のであればはっきりそう言ってくれた方が、次回また同じ事をしなくて済むのに、と感じているとのことである。

日本社会に対して一言を求めたところ、「自分はまだまだ頑張っている途中なので、社会の一人として自分がやる役割をがんばって生きていこうと思う」と答えた。ヒロさんはまだまだ日本社会について知らないことがあるため、現時点では明言できないということだと感じられた。

<インタビュー 17>

hiroshi (30代・男性) 「한국에서는 하지 못하는 것들을 해봅시다」

2010년 4월 11일, 경기도출신
대학원생, 일본체재 4년
인터뷰어 : 와카조노 유우시로

◇ 일본に 오기까지 ◇

hiroshi는 한국의 대학에서 영어 관련 학부를 졸업한 뒤, 전문학교에서 어학강사와 매니저를 했었다. hiroshi에 의하면 매니저는 한국어와 영어가 둘 다 가능한 사람으로써 외국인 학생이 뭔가 문제가 생겼을 때 상담이나 여러 가지 조 절을 하는 역할을 담당한다고 한다. 거기에서는 “서양인들과 같이 생활하면서 유학 생활처럼 국제적인 느낌을 가지고 했었기 때문에 그다지 힘들지 않았다. 신선했었고 내가 다른 사람들이 못 하는 것들을 했기 때문에 조금은 기대감이 들었었다” 라는 느낌을 항상 받았다고 한다.

◇ 일본에 오고 나서부터 현재까지 ◇

그러한 뒤에 “새로운 도전”을 위해 일본에 오고 일본어학교에서 히라가나부터 배우기 시작했다. 일본에 오기 위해 밟아야 하는 수속이나 집 구하기 같은 것들은 업자에게 맡기지 않고 자기 스스로 했다고 한다. 그는 “나는 수다쟁이고 사람과 사람 사이의 끈, 사람들과 만나는 것이 좋으니까 내가 하나씩, 하나씩 알아보는 그 과정도 중요한 부분이 아닐까요?”, “뭐든지 자기 혼자서 하려고만 한다면 안 되는 것이 없어요.”라고 말했다. 자신의 손으로 뭐든지 해보고 싶다는 의지가 느껴졌다. 또한 “어디에 있더라도 사람 사는 곳은 똑 같은 것 같아요.”라고 했는데 이것은 일본 이외에도 많은 나라들을 여행한 경험이 있기 때문에 가질 수 있는 생각이었다.

처음 일본에 왔을 때는 식당에서 주방 보조를 했었다. 하지만 체력이 필요한 주방 보조와 같은 일은 공부에 영향을 끼친다고 생각한 것도 있고 지금은 사회과학 쪽의 대학원에 진학한 것도 있고 해서 몸보다 머리를 쓰는 영어, 한국어의 개인 레슨을 하고 있다. 이러한 일을 하면서 자신의 어학 능력도 유지하고 있다고 한다.

◇ 장래에 대하여 ◇

영어 능력을 살려서 교사와 같은 교육에 관련된 일을 하고 싶다고 한다. 가르칠 수만 있다면 초등학교라도, 대학교라도 상관없다고 한다. 자신의 능력을 발휘할 수만 있다면 일본이나 한국이나 어느 쪽이라도 고집하지 않으며 미국이라도 좋다고 말했다. 그렇기 때문에 일본에 영주하느냐 아니면 한국에 돌아가느냐 라는 선택도 어디서 자기의 능력을 살릴 수 있느냐에 따라 달라진다고 대답했다.

◇ 신주쿠에 대하여 ◇

히로씨는 “삼각형을 만들어 봐요”라고 말했다. 이것은 사는 장소, 일을 하는 장소, 학교 라는 세 군데를 연결했을 때 생기는 삼각형이 작을수록 좋다고 한다. 각각의 장소가 멀리 떨어져 있으면 있을수록 쓸데없이 시간이나 체력을 소비한다고 한다. 오오쿠보에는 한국 식당이 많아서 아르바이트를 구하기 쉽고 근처에 학교도 많이 있다. 이러한 것을 고려해 보았을 때 월세가 조금은 비싸도 삼각형을 좁힐 수 있다는 점, 즉 오오쿠보라던지 신주쿠가 제일 합리적이

라고 생각한다고 언급했다.

하지만 “처음에는 신주쿠와 오오쿠보에 커뮤니티를 위해서 가지만 1년 정도 지나면 여기는 일본이니까 한국인들과의 모임을 위해서만 여기에 있을 필요는 없지 않을까 라고 생각해요.”, “처음 약할 때에는 오오쿠보에 갔다가 조금 강해지면 조금 더 다른 장소를 옮겨가는 거죠.”라고 말하는 히로씨는 항상 사람과의 관계를 위해 발전해 가고 있는 것이다.

◇ 일본에 대하여 ◇

일본인은 상대가 서양인이냐 아니면 한국인, 중국인이냐에 따라 그 태도가 전혀 다르다는 점이 특이하다고 한다. 서양인에게는 영어를 못하는 자기가 미안하다는 듯이 대하면서 한국인이나 중국인에게는 그들이 일본어를 못 하는 것이나 일본어능력이 부족한 것에 대하여 깔보는 경향이 있는 것 같다고 한다. 그리고 일본에서는 무슨 일을 하던지 서류가 많은 것과 일할 때 그 순서를 틀리는 것에 대해 용납하지 않는 것과 같은 “정이 없는 느낌”에 대해서도 사람과의 연결고리를 더욱 소중히 하는 것이 좋지 않을까라고 느끼고 있는 것 같다.

더욱이 일본어의 “ちょっと...” 라는 표현에 대해서도 확실히 자신의 의견을 나타내지 않는 것 같아서 위화감을 가지고 있다고 한다. 예를 들면 일본 사람을 식사에 초대하려고 했을 때 상대방이 “ちょっと...” 라고 말하면 그것이 “지금은 갈 수 없어” 라는 것인지 아니면 “너랑은 가지 않겠어” 라는 것인지 잘 모르겠다는 것이다. 만약에 “너랑은 가지 않겠어” 라는 것이라면 다음에도 똑 같은 일을 되풀이 하지 않아도 되는데 라고 늘 생각한다는 것이다.

일본 사회에 대하여 한마디 부탁하자 “자기는 아직 열심히 하는 도중이기 때문에 사회의 일원으로서 자기가 할 수 있는 역할에 최선을 다해 살아가겠다”라고 대답했다. 히로씨는 아직 일본 사회에 대하여 모르는 것이 많기 때문에 지금은 확실히 이야기 할 수 없다는 뜻이 아닐까라고 느꼈다.

<インタビュー 18>

ヨンさん(40代・男性)「世界と日本のゲートウェイを作る」

2010年4月13日、ソウル出身

自営業、日本歴通算 12 年目
インタビュアー：渡辺幸倫

来日以来 11 年勤めた会社を辞め 1 年ほど前に独立したヨンさん。現在は自分が「本当にやりたい、小さいけどもやりたいことを」との思いから日本と世界をつなぐ情報ゲートウェイサイトの開発をしている。一時間半をこえる長目のインタビューだったが、これまでの人生で影響を受けたことややり遂げてきたことなどについて、いろいろと語ってくれた。

◇ 大学時代の話 ◇

弟が一人の 2 人兄弟。子どもの頃は「もう皆同じで、全部貧乏だったんですね、大体」と振り返る。大人からは特別な資源のない国だから豊かになるためには頭しかないと教えられ、「勉強、勉強、勉強だけだったんです。国全体が」と感じていた。

しかし、1980 年はじめ頃に「大学はいると、今まで経験してなった文化とかも、見えたんですね」という。具体的には「1980 年代には、韓国が凄く問題があったんです」「光州の事件もあったし。それがちょっと隠蔽ですか？ なんとかマスコミ？ とか全部報道とかもができなかった」ことが見えてきた。「私が高校生の時には全然知らなかったものが、壁とかに書いてあるんですよ。何々がありました、何人何人が死亡しましたとかって。で、この後ろには米軍があって、全部指示通りに今の政府がやりました」などとあったそうだ。知ったからには、「政府にちょっと反対するしかない」となるのが当時の大学生であった。当然のように「デモとかも凄かったですよ」と言う。

民主化運動の時代であった 80 年代に大学生活を過ごしたこの世代は後に 386 世代と呼ばれるようになる。激動の 80 年代に大学生活を過ごした 60 年代生まれの世代で、現在も韓国社会で独特の存在感を持っている。

ヨンさんは大学生の時に初めて来日する。日本に留学していた友達を訪ねて一週間ほど旅行にきた。今からほぼ 25 年前のことだが、印象に残っているのはテレビ。「すごいなーと。深夜のテレビ番組見て」「友達と、集まって、お酒のみながら、本当にこれ放送しても大丈夫なのかなって思ったんですよ」と言う。韓国での生活との大きな違いを感じた瞬間だったことだろう。

◇ 韓国での会社員時代 ◇

激動の大学時代を終え、90 年代の初頭に IT 関係の企業に就職する。建設プロジェクトの情報管理を多く扱った。そこで働いた 7 年間は、インターネットによる急速な社会変化が起こり、競争も日々激しくなる一方だった。そんな時にいわゆる IMF 通貨金融危機が起こり、国外に活躍の場を求めようとすることになる。「この時代の日本は、韓国より何年くらいかちょっと遅かったんですよ。インターネットのホームページとかまだ作ってない状態なんで。こっちで競争して難しいよりも、まだ何もないところでやればいいと思って」。韓国との IT 格差は IMF 危機後に韓国政府が行った積極的な IT 化推進政策によって広がったとされるが、ヨンさんによれば、実際には IMF 危機頃には既に差が広がりつつあったそうである。

しかし渡航先として日本に対して特別な思いがあったわけではない。ただ、今思えば、大学時代に日本語を「アイウエオくらいだったんですけども勉強」した時に思ったことは関係していたかもという。その頃ことだが、「サッカーの日韓戦の試合をあるときに見たんですよ。この試合で、日本のアナウンサーとか、解説する人が、逆に、どのように日韓戦について話してるのかちょっと聞きたい気持ちは少しあったんですよ」。大学時代に影響を受けた報道されていることが全てではないという考えがこの好奇心に繋がったのだろう。

◇ 日本に来てから ◇

90 年代末頃に、奥さんと生後間もない娘さんを残して来日。IT 技術者として文京区に住みながら港区の会社に通った。ほどなく二人を呼び寄せ、その後、蕨市や国分寺市などを経て新宿区に移り住んだ。

最後の引っ越しは娘さんの教育のため。新宿区内の韓国学校のすぐ近くに引っ越した。「韓国ではちょっと両親とかはもう全力じゃないですか。子供の教育に。子供のために引っ越したり。今も私たちも同じなんです」と言う。日本での韓国学校の他にも、学習塾に通わせたり、長期休暇中に韓国の実家に戻った際に地元の学校に通わせたりと教育には余念がない。日本に住む韓国人として、「日本の方くらいの日本語はできないし、韓国の人のような韓国語はできないですよ」と悩みを隠さないが、今後の教育については、「大学を何処でいくか。日本で行くか、アメリカで行くか、韓国で行くか

によっては、中学生からなんか準備しないと」と幅広い視野から可能性を考えている。

◇ 本当にやりたいことを求めての独立 -3つのゲートウェイ ◇

11年働いた会社では鉄道会社の料金徴収システムや、工場の生産管理などのプロジェクトに取り組んだ。いろいろな経験を積むことができたが、会社のためでなく自分のために仕事をしたいという思いが強くなり、一年ほど前に独立した。

今は、日本と世界をつなげるゲートウェイとなるサイトを作っている。「ゲートウェイ・トゥ・ジャパンと名刺にも書いているんです」。ヨンさんのサイトは大きく三つに別れる。

まずは、12年になる日本での生活で知った情報を日本以外の国につたえるサイトだ。「今普通にインターネットに載っているものじゃなくて」、新しい見せ方を模索している。ヨンさんは例を挙げてくれた。「例えば今、普通に日本とインターネットで検索すると、色んな情報が出るんですよ。これが今現在までの『情報』です」話にも力が入る。これを印刷したり紹介されている本を購入したりするのがこれまでの形だった。「それを今後は一つにしてスマートフォンが、一つだけあれば世界何処でも行ける。情報をこれで全部もらえるから。それで今、スマートフォン用のアイテムをちょっと作ってるんですよ」。

二つ目は新大久保に注目したものだ。「日本の方はこの新大久保のことをコリアタウンとか言うじゃないですか」。ただ、「普通、美味しいお店の紹介があって、三段バラ（豚肉の焼き肉：インタビューア注）とか具体的に食べたいものの紹介がある。これをちょっと選択して逆に見せよう。この逆のシステムを作ればいいんじゃないかと思っています」。店を起点にした街の紹介ではなく、食べたい料理やほしいサービスを起点にした街の紹介。発想の転換だ。世界と日本といった単純ではない、複雑な経路のゲートウェイが見える。

三つ目は、「今こっちに住んでる韓国人の人たちのコミュニティの場所」。日本に住んでいる韓国人が自由に情報交換ができる場所が少なすぎると感じている。つまり、韓国からの日本へのゲートウェイだ。もちろん一般生活上のことも視野にあるが、そこには仕事上の問題を解決したいという思いもある。

韓国からの IT 技術者は派遣会社を通して働い

ている人が多い。ヨンさんが来日した頃には、学歴や就業経験などの条件が現在よりもかなり厳しかったのだが、この10年で随分と緩和された。その結果、残念ながら必ずしもレベルの高い技術者ばかりとはいえなくなってしまった。しばらくはそれでも技術者が必要という時期が続いたが、やはり昨今の不況の影響か、技術者のレベルを問題にしたトラブルが起り、契約が更新されないことが起り始めているという。

会社側にたとえ正当な理由があったとしても「クビになったりすると、韓国はインターネットの文化だから、そのクビになる人が理由は、理由は書かなくて結果だけ書く」と問題を指摘する。契約が打ち切りになって悔しい気持ちも分かるが、ヨンさんは状況を厳しく分析する。「理由はあるんですよ」。「ほんとに経歴のない人派遣する会社も問題だし、それに『行きなさい』と言われたら行って自分が経歴があるように頑張るのもおかしいし。インチキミたいものになっていって...」まっているというのだ。いずれにしても、「結果だけを話すとこのようになるじゃないですか。クビだけいって。悪い会社ですよ。理由があるんですけど」。しかも、それを根拠に技術者達のコミュニティではブラックリスト、「この会社は行っちゃダメって言うリスト」まで作成されてしまうというのである。

このような状況を憂いながらも、一方では、IT技術者の排出国としての中国、ベトナムなどの台頭に危機感を募らせている。韓国人技術者が現場から離れてしまっている間に、「他の国の人が全部スペースを埋めてるから、行く場所がなくなってくる...」という状況の変化があり、「韓国のこっちで働いていた IT 関係の人たちはどうすればいいか...」と戸惑ってしまう。

だからこそ、技術者の技能や経験を管理し、問題が起きたときに責任をとる団体が必要だと考えている。ヨンさんのサイトのコミュニティがそのきっかけになればと願っている。「できれば架け橋っていうほどの大きな話じゃないんですけど、本当に道を作りたいです。ゲートのように。そこで、良いもの悪いものがあっても、そこで話せば、誰かが助けたりとか、そこで協力したりとかできる。そういうゲートを作りたい」。その先には IT 技術者だけではなく、日本の中小企業を世界に紹介するというゲートウェイも視野にある。「韓国に日本の小さい企業を紹介しても、まだ道とか場所とか

分からないじゃないですか。こういうのをちょっと何とか一つに集めて、興味のある人に来てもらって、『これ中小企業の良い製品だ』とか、わかるような場所とかあるといいじゃないですか。誰もやらないから私がやりたい。大企業にはルートがあるだろうが、中小企業では必ずしも同じことができない。そんな会社と世界をつなげたいというのである。

独立してからの会社は数人の友人が手伝ってくれている。その友達と一緒にゆっくりと、しかし、しっかりとこのコミュニティを育てていきたい。

「一生懸命やれば自分が期待してなったものまでも、できるんじゃないか。それが希望です。まあ一緒にやってる人たちの希望も一緒です。本当にお金を儲けなくても、誰かがこれをやらないと。必ず必要なものだったんですけど、誰もやらないから私たちがやりましょうと」。

世界と日本のゲートウェイ。誰もやらないから自分がやる。

実に頼もしい限りだ。

<인터뷰 18 >

영씨 (40대・남성) 「세계와 일본의 게이트웨이를 만들다」

2010년 4월13일, 서울출신
자영업, 일본체제 12년째
인터뷰어 : 와타나베

일본에 와서 11년간 일했던 회사를 그만두고 1년전에 독립한 영씨. 현재 자신이 “진짜로 하고 싶은 것, 작지만 자기가 하고 싶은 것” 이라는 생각으로 일본과 세계를 연결하는 정보 게이트웨이를 개발하고 있다. 한시간 반을 넘어서는 장시간의 인터뷰였지만 지금까지의 인생에 영향을 끼친 것이나 이루어 낸 일등에 관해서 여러 가지 이야기를 들려주었다.

◇ 대학시절의 이야기 ◇

형제는 남동생이 있다. 어릴 때는 “뭐 대부분 똑같이 전부 가난했었죠.. 대체로.” 라고 회상했다. 어른이 되고 나서부터 특별한 자원이 없는 이 나라에서 부자가 되기 위해서는 지식밖에 없다고 생각해 “공부, 공부, 공부가 전부였어요. 나라 전체가.” 라고 느꼈었다.

그러나 1980년 초에 “대학에 들어가면 지금

까지 경험해보지 못했던 문화라던가 그런 것이 보였었어요.” 라고 한다. 구체적으로는 “1980년대에는 한국이 문제가 많았어요.” “광주사건도 있었고, 그것이 은폐라고 할까요? 무슨 마스크이라던가 전부 보도할 수가 없다.” 라는 것이 보여졌다. “내가 고등학생일 때는 전혀 몰랐던 것이 벽같은 곳에 써져 있었어요. 무슨, 무슨 일이 있었다하던가 몇명이 죽었다라던지. 그리고 그 배후에는 미군이 있어서 전부 지시한 대로 정부가 했습니다.” 라는 것이 쓰여져 있었다고 한다. 알기로는 “정부에 대해 반대하는 수밖에 없었다” 라는 것이 당시의 대학생이었다고 한다. 당연히 “데모는 대단히 많았어요” 라고 한다.

민주화운동 시대였던 80년대에 대학생활을 보낸 세대는 386세대라고 불리워 지게 된다. 격동의 80년대에 대학생활을 보낸 60년대 출생의 세대로서 지금도 한국회사에서는 독특한 존재감을 가지고 있다.

영씨는 대학시절에 처음으로 일본에 오게 된다. 일본에 유학하고 있는 친구에게 들러 1주일 정도 여행을 했다. 지금으로부터 약25년전의 일이지만 인상에 남아 있는 것은 텔레비전. “대단하구나~. 심야방송을 보고”. “친구들이 모여서 술마시면서 봤는데 진짜로 이런 것을 방송해도 괜찮은가 라고 생각했었지요.” 라고 말했다. 한국에서의 생활과 많이 다르다고 느꼈던 순간이었을 것이다.

◇ 한국에서의 회사원 시절 ◇

격동의 대학시절을 끝내고 90년대 초에 IT관련 기업에 취직한다. 건설 프로젝트의 정보관리를 주로 맡았다. 그곳에서 일한 7년동안 급속한 인터넷에 의한 사회변화가 일어나, 날로 경쟁이 치열해졌었다. 그러던 때에 IMF통화금융위기가 일어나서 국외에서의 활약의 장소를 원하게 된다. “그 때의 일본은 한국보다 몇년 뒤쳐져있었어요. 인터넷의 홈페이지라던지 아직 만들어지지 않았었고. 한국에서 경쟁해서 힘들어 지는 것보다 아직 아무 것도 만들어지지 않은 곳이 좋겠다는 생각에.” 한국과의 IT격차는 IMF위기 뒤에 한국정부가 실시한 적극적인 IT화추진정책에 의해 벌려진 것이라고 하지만 영씨에 의하면 실제로는 IMF때에 벌써 격차가 벌려지고 있었다고 한다.

하지만 해외로 나가는 나라로서 일본에 대한

특별한 감정은 없었다고 한다. 단지 지금 생각해 보면 대학시절에 일본어를 “아이우에오 정도이지만 공부”했을 때 생각한 것과 관계있다고 생각한다. 그 때 당시의 일이지만 “어느날 한일 축구 시합을 보게 되었어요. 이 시합에서 일본의 아나운서나 해설자가 반대로 어떻게 한일전에 대해서 말하고 있는지 조금 들어보고 싶다는 마음이 있었어요.” 재학시절에 영향을 받은 보도가 전부가 아닐 거라는 생각이 이러한 호기심으로부터 생겨났었다고 생각한다.

◇ 일본에 오고 나서 ◇

90년대 말에 부인과 태어난지 얼마 안된 딸을 한국에 남겨두고 일본에 넘어왔다. IT기술자로서 분쿄구에서 미나토구에 있는 회사에 다녔었다. 얼마 안 있어 부인과 딸을 불러들여 그 뒤 쿠라시나 고쿠분지시 등을 거쳐 신주쿠에 이사 와서 살게 된다.

마지막의 이사는 딸의 교육을 위해서이다. 신주쿠 안에 있는 한국학교에서 가까운 곳으로 이사하게 되었다. “한국의 부모는 아이의 교육에 열심이지 않지 않습니까? 아이를 위해서 이사를 한다던가, 지금도 똑같아요.” 라고 말한다. 일본에서의 한국학교 이외에도 학원에 보낸다던지 장기휴가중에 한국에 돌아갈 때는 그 쪽의 학교에 보낸다던지 교육에 여념이 없다. 일본에 사는 한국인으로서 “일본인처럼 일본어가 되지도 않고 한국인처럼 한국어도 잘 되지 않아요.” 라고 고민을 좀처럼 감추지 못하지만 앞으로의 교육에 관해서는 “대학은 어디로 갈 것인지, 일본에서 갈 것인지 미국, 아니면 한국으로 갈 것인지에 따라 중학교서부터 뭔가 준비하지 않으면” 이라고 하면서 넓은 시야를 가지고 여러 가능성을 생각하고 있다.

◇ 진짜로 하고 싶은 것을 위해서 독립 -세가지의 게이트웨이- ◇

11년간 일했던 회사에서는 철도회사의 요금징수 시스템이나 공장의 생산관리 등의 프로젝트를 담당했었다. 다양한 경험을 쌓을 수 있었지만 회사를 위해서가 아니라 자기를 위해서 일하고 싶다는 생각이 강해져서 1년정도 전에 독립하였다.

지금은 일본과 세계를 연결하는 게이트웨이가 되는 사이트를 만들고 있다. “게이트웨이 투 재팬이라고 명함에도 쓰여져 있어요”. 영씨의 사

이트는 크게 세부분으로 나뉘어 진다.

먼저 12년째 되는 일본의 생활 가운데 알게 된 정보를 일본 이외의 나라에 전달하는 사이트이다. “지금 일반적으로 인터넷에 실려있는 내용이 아니라”, 새로운 방법으로 유저에게 보여주는 것을 모색중이라고 한다. 영씨는 한가지 예를 들었다. “예를 들면 지금 일반적으로 인터넷에서 일본이라고 검색을 하면 여러가지 정보가 나옵니다. 이것이 지금까지 말하는 ‘정보’입니다.” 라고 목소리에 힘이 들어간다. 이것을 프린트아웃하거나 책을 구입하는 것이 지금까지의 형식이었다. “그것을 앞으로는 스마트폰 하나만 있으면 세계의 어느 곳이나 갈수 있게 된다. 정보를 이걸로 다 받을 수 있으니까. 그래서 지금 스마트폰용 아이템을 만들고 있어요”.

두번째는 신오오쿠보에 주목한 내용이다. “일본인은 이 신오오쿠보를 코리안타운이라고 부르지 않습니까?” 단지 “보통 맛있는 가게의 소개를 하고 삼겹살이나 먹고 싶은 것을 상세히 소개하고 있어요. 이것을 조금 선택하여서 역으로 보여줘봅시다. 이 반대의 시스템을 만들면 되지 않을까 라고 생각하고 있어요.” 거리를 기점으로 한 마을의 소개가 아니라 먹고 싶은 요리나 원하는 서비스를 기점으로 한 거리 소개, 발상의 전환이다. 세계와 일본이라는 단순한 경로가 아닌 복잡한 경로의 게이트웨이가 보인다.

세번째로는 “지금 이곳에서 살고 있는 한국인들의 커뮤니티를 위한 장소” 일본에 살고 있는 한국인이 자유롭게 정보교환할 수 있는 장소가 너무 적다고 느끼고 있다. 즉, 한국에서부터 일본으로의 게이트웨이이다. 물론 일반생활상의 내용들도 생각하고 있지만 주로 일관계의 문제를 해결하기 위한 게이트웨이를 만들겠다는 생각도 있다.

한국에서 온 IT기술자들은 파견회사를 통해서 일하는 사람들이 많다. 영씨가 일본에 왔을 때에는 학력이나 취직경험등 조건이 지금보다 꽤 엄격했었지만 최근 10년동안 꽤 완화되었다. 그 결과 아쉽게도 반드시 레벨이 높은 기술자가 일본에 온다고는 말할 수 없게 되었다. 그래도 잠시동안 기술자들을 필요로 하는 시기가 계속되었지만 역시 최근의 불황의 영향으로 기술자들의 레벨을 문제로 트러블이 발생한다던가 고용계약이 갱신되지 않는 등의 문제가 발생하기 시작했다고 한다.

회사측에 설령 정당한 이유가 있다 하더라도

“한국은 인터넷 문화이기 때문에 해고라도 되면 해고된 사람은 이유는 적지 않고 결과만을 적는다.” 라는 문제를 지적한다. 고용계약이 도중에 끊겨 분한 마음은 알지만 영씨는 지금의 상황을 엄격하게 분석한다. “이유는 있습니다.” “진짜로 경력도 없는 사람을 파견하는 회사도 문제이고, 거기다 가라고 한다고 해서 일본에 넘어와 자기가 경력이 있는 것처럼 속이면서 열심히 하는 것도 이상하고. 사기치는 것처럼 되어버려서...” 라고 말한다. 어찌됐든 “결과 만을 이야기하면 이렇게 되지 않습니까? 해고만을 이야기하면, 안 좋은 회사이요라고 이유가 있지만은” 거기다 그것을 근거로 기술자들의 커뮤니티에서 블랙리스트, “이 회사에 가면 안된다 리스트”까지 만들어지게 되는 것이다.

이러한 상황을 걱정하면서도 한편으로는 IT 기술자의 배출국으로서 중국, 베트남등의 등장 에 위기감을 느끼고 있다. 한국인 기술자들이 현장에서 멀어져가는 동안 “다른 나라의 사람이 전부 자리를 메꾸고 있으니 갈 장소가 없어지고 있다” 라고 하면서, 상황이 변하고 있고 “이 곳에서 일하고 있는 한국의 기술자들은 어떻게 해야하는지” 라고 어쩔줄 몰라한다.

그렇기 때문에 기술자들의 기술이나 경험을 관리하고 문제가 발생하였을 때는 책임을 지는 단체가 필요하다고 생각하고 있다. 영씨의 사이트의 커뮤니티가 그 계기가 되기를 바라고 있다. “가능하다면 교가 역할이라는 큰 이야기는 아니어도 정말로 길을 만들어 주고 싶어요. 게이트 처럼. 거기에 좋은 것 나쁜 것이 있어도 거기에서 말하면 누군가가 도와준다던가 협력해 줄 수 있는 그런 게이트웨이를 만들고 싶다.” 더 나아가서는 IT기술자뿐만 아니라 일본의 중소기업 을 세계에 소개하는 게이트웨이도 계획하고 있다. “한국에 일본의 작은 기업을 소개해도 아직 길이라던가 장소 같은 것을 모르지 않습니까? 이런 것을 조금씩 모아서 흥미있는 사람들이 와서 ‘이거 중소기업의 좋은 제품이다’ 라던지 이런 것을 알 수 있는 장소가 있으면 좋지 않습니까? 아무도 하지 않으니 내가 하고 싶다.” 대기업에는 루트가 있지만 중소기업에는 반드시 대기업과 같은 루트를 가지리라는 법은 없다. 그러한 회사와 세계를 연결하고 싶은 것이다.

독립하고 나서 몇 명의 친구들이 회사를 도와 주고 있다. 그 친구들과 함께 천천히 그렇지만 확실히 커뮤니티를 만들어 나가고 싶다.

“열심히 한다면 자기가 기대하지 않았던 것까지 가능하게 되지 않겠습니까. 그것이 희망입니다. 뭐 함께 일하고 있는 사람들의 희망도 같습니다. 진짜로 돈을 벌지 못해도 누군가가 이것을 하지 않으면 안됩니다. 반드시 필요한 것이었지만 아무도 하지 않으니 우리들이 하자고요.”

세계와 일본의 게이트웨이. 아무도 하지 않으니 자신이 하겠다.

실로 믿음직스러울 뿐이다.

<インタビュー 19>

Nさん(30代・女性)「留学、結婚を経て、日本に暮らす」

2010年4月16日、テグ出身
パート勤務、日本在住10年目
インタビュー：藤田ラウンド幸世

◇ 略歴と家族 ◇

Nさんは1972年生まれで、4人きょうだいの3番目に育った。小学校のときに中南部の都市に移り、小学校から高等教育、そして就職までそこで過ごす。上二人のきょうだいは大学に進学したが、Nさんは大学ではなく、専門学校で勉強をする。卒業後、アルバイトをしたりもしたが、その後、異なる分野の仕事を紹介され、その仕事に必要な専門知識の勉強をし、一ヵ月後に合格をして、採用される。

日本には、二度留学経験がある。一度目は、会社を休職して1ヵ月半の短期留学を経験。二度目は、28歳のときで、日本語学校に入学。アルバイトをしながら、2年間日本語の勉強をする。日本の大学に入って勉強をしたいという気持ちがあったが、経済的な理由から、2年間ずっと迷い、結局、進学はしなかった。アルバイト先で一緒に働いていた男性と交際し、結婚をする。現在は、日本人の夫と子どもと新宿区に暮らす。

◇ 高校時代に出会った日本のサブカルチャー◇

60年代後半から70年代に生まれた「ベビーブーム世代」の人たちは、当時、すでに大学進学熱のため、猛勉強をして大学入学を果たすことが普通になっていた。お弁当を二つ持って学校に通う毎日だった。

「朝7時に出たら、50分バス乗って行って、そ

こから勉強が始まって、夜 10 時まで勉強するんですよ、それ、自由学習って言うんですけど、自由学習じゃないんですよ・・・強制的にさせられて。6 時くらいに授業が終わって、それからご飯を食べて、6 時半ごろから、自分で学習を始めるんですけど、私は勉強ではなくて本を読んでいたんですよ。」

N さんは哲学に興味をもっていた。高校に入ってから、毎月、お小遣いをもらうと、本屋に行き、本を一冊買うことが楽しみだった。本屋に行き、新しい本と出会うことが幸せだった。女性として、「インテリで、知的で、ちょっと違う生き方をしている」人にあこがれた。『星の王子様』も愛読していた。今、振り返ると、真面目に勉強をする時期にしていなかったことを後悔することもあるが、この時期の「本」への憧れは現在の自分の仕事にもつながっているという。

日本の音楽や小説、漫画も好きだったので日本には興味を持っていた。1991 年のある日、いつものように本を買いにいったとき、偶然見つけ、手にとったのが村上春樹だった。手にとって読んでみたら新しい内容だったので即座に買った。家に帰って読み始め、そのまま一気に朝まで読み続けた。それから『ノルウェイの森』も読み、衝撃を受けたことを覚えている。

音楽はそのときはミスター・チルドレンが好きだった。住んでいた街には、日本の音楽を流すカフェがあり、そこで日本の本や CD を貸してくれることもあった。そのころは、日本語は全くわからなかったが、いつか日本に行ってみたくて強く思った。

◇ 日本への留学と結婚 ◇

初来日は、会社で働いていたところに友達に誘われて、休職をして、1 ヶ月半の短期留学を体験する。今から考えると日本語もわからないのに勇気があったと振り返る。日本語は読めないのに村上春樹の本は読めなかったが、ミスチルや松任谷由美の CD を買ったりして、楽しかった。帰国後、「村上春樹が日本語で読めたらいいな、ミスチルの歌を日本語で歌えたらいいなと思って、勉強を続けようと思ったりしたんですけど、韓国で 23 歳くらいだと親がちょっと、お母さんが心配してもう結婚すればみたいにいわれるようになりました」。以後、日本語は自分で勉強し、いつか日本で勉強をしたいとその機会を窺う。

28 歳のときに再来日、日本語学校に入学。アルバイトをしながら、日本語の勉強をする。日本語学校の同期の学生たちは中国人が多く、懸命に勉強をして大学受験を目指していた。こうした人たちが次々に早稲田や慶応などに受かるのを見て、自分も日本の大学で勉強したいという気持ちを捨てがたかった。しかし、経済的なことを考えると、年齢的に親に頼ることもできず、最後まで迷う。二度目の留学では、まだ日本語が上手ではないころから、アルバイトの店員として雇ってくれた職場があった。初めの募集では土日という条件だったのが、自分が一生懸命働いたのを認めてくれて、一ヵ月後には仕事を増やしてくれた。2 年後、留学期間の終わるころに職場の男性と付き合い始め、プロポーズを受ける。夫は両親に挨拶に来てくれた。

結婚後、夫の職場の近くに初めは住んだが、その後、夫の故郷に家族で戻ることになる。夫の故郷は田舎で、そこでは家賃が 3LDK で 1 万 5 千円だった。同じ韓国出身のお嫁さんの立場の人が同じ地域に二人いたものの、車で 1、2 時間のところに住んでいたので頻繁には会えなかった。仕事がなかったので、働けなかった。その代わり、当時、韓流ブームだったので、公民館で韓国語を教えたり、キムチを作って近所の人にあげたりして喜ばれていた。その後、夫と相談をして東京に戻ることを決心した。

◇ 新宿区で子育てをしながら、働く ◇

東京では生活費が高いことを覚悟し、初めから共働きを考えていた。住居は、以前通っていた新宿区にあるキリスト教会の友達に家探しを頼み、教会に通える距離にある場所を見つけてもらい、2006 年に東京に戻った。

新宿区を選んだ理由は、以前からの教会を通じた韓国人の知り合いが多く、情報も簡単に手に入ることだが、一方で友達は韓国人が多いので日本人とあまり付き合うことがないことも自覚している。田舎から東京に戻ってきたときのカルチャーショックをはっきりと覚えている。夫の故郷では、夫の家族の地元だったのでみな、自分に挨拶をしてくれて、子どもの学校にいったときも親切にしてくれたが、新宿に引っ越してきてから子どもの学校行事に参加したときに、お母さんたちは全然話かけてくれず、グループができていて入り込みづらかった。「集まって、話はしてるだけ

ど、なんかこう私を見ても話しかけない・・・、なんか、一言くらいは話かけるんですけど、そんなにべらべらしゃべれないし、なんか、こう、関係が親しくならない。」

また、子どもの付き合いを通して自分たちの家族と友達の家族の違いを感じることも多い。子どもが友だちの家に遊びにいくと、「お母さんうちが一番貧乏だよ」と帰ってきてから言ったり、「社長さん」で、「一戸建て」で、ある友達の家に行ったら「お母さんエレベーターがあったよ」と聞いたり、「その反面、他の友達の家に行ったら、うちより狭かったよとか」、子どもの体験を通して、新宿区の貧富の格差を感じることもある。

韓国人との付き合いの方が気楽だということもあり、日本人のお母さんたちとの付き合いに積極的になれないという心理もある。「日本人のお母さんだったら気遣わなければならぬし」「保育園とかに行って話しているときは、なんかすごく笑いながら親しく話をするんですけど、うちに遊びに来てくださいとか言われたこともないし、みんな保育園のお母さんたちは仕事をしていて忙しいから」と距離感をうまくつかめない。

自分も東京に来てからは、主婦だけではなく、本屋でパート勤務を始め、週に4日忙しく働いているので充実している。高校時代からの本と音楽が好きだったことが今の仕事につながっていて、自分がしてみたかった仕事だったので、大変なこともあるが、やめられない。

◇ 子どもの韓国語 ◇

夫が日本人なので特別に韓国語を習わせたいとか、そういうこだわりは特にない。新宿区内に韓国学校はあるのは聞いたことはあるが、学費が高く、通うのも大変。家で自分から子どもに韓国語で話しかけることはあるが、全体的に日本語の方が多い。子どもは、韓国語は聞いてわかるものの、答えるときは日本語で返す。去年、韓国に子どもを連れて帰ったら、思ったよりできなかったのはショックだった。自分は加減をしてゆっくり話しているが、現地に行ったらそうはいかないので、うまく聞き取れなかった様子。周りの韓国人のお母さんからは、「あなたは韓国人なんだからもうちょっと韓国語教えなさい、両方できるチャンスなのになんで逃がしてるの、韓国語を教えないとだめだよみたいなことを言われ」、「自分でも意識して韓国語でしゃべろうとしているんですけど、分

からないとやっぱり日本語で言っちゃう」。それでも、通っている教会の、土曜日に子どもに韓国語を教えてくれるクラスに連れて行っている。永住ビザを持っているのでこれからも日本に家族と住むつもりでいる。

<インタビュー 20>

Annさん(40代・女性)「日本語さえできればたくさんのお国がある国、日本」

2010年4月18日、全羅北道出身

自営業、日本歴6年

インタビューア：李 坪鉉

◇ 略歴と来日のきっかけ ◇

2005年来日の42歳の女性。夫と新宿でお店を経営。小1と3才の娘と百人町に住む。韓国ではソウルで大学卒業後、看護師として1年働き、教会の知り合いである夫と結婚。

日本に来るきっかけは、百人町でお店を経営する親戚から、店の従業員として来ないかという誘いを受け、それを頼りに何の準備(日本語の勉強、待遇の内容、住まいなど)もなく、ご主人と1才の娘を連れて来日した。しかし、実際に到着した百人町にあるお店は、経営破たん間近で、借金取りも来るし、給料もなく、住む部屋を探す余裕さえない状況で、初めての日本は、「ものすごく悲しかった」と当時の思いを語る。

来日前のAnnさんは大学卒業以来、看護師として働いていた。自ら経済力を持って社会生活をしていたので、心の余裕もあった。クリスチャンであるため宣教地としてカナダ、パキスタン、中国、シンガポールなどにも訪問し、将来も宣教のために活動する計画をたてていた。

◇ 日本で自分のお店を持つまで ◇

3年計画での来日の決心から、新宿についたが、予想と違い、全ての生活は一変してしまった。はじめの2年間は給料なし。お店の奥にある部屋で子育てをしながら、夫婦で死に物狂いで働き、4年後にそのお店を買い取ることができた。

日本で一番の苦労は、住居環境も問題だ。給料をろくにももらえず、部屋を借りるお金も無かった。子どもを保育園にも預けられず、私立保育園は環境が劣悪で、お店で面倒を見ながら商売を続けたことが一番大変だったという。来日4年後に

二番目の子どもを産んだ時も、ろくに産後休みも取れず電話注文などを受けざるを得ないほど、生活は休む暇もない毎日だった。

今は、自分名義のお店を持つことにも成功した。当時を思い出しながら、ここまでできた力の原点は、信仰心と独立心旺盛な性格だという。この性格は、幼い頃から親からあまり干渉されず自由に育ててもらったおかげだと付け加えてくれた。

◇ 言葉の問題（日本語） ◇

日本語に関しては、夫婦ともに急に来日を決心したので日本語は全く話せなかった。来日してから、ご主人はお店を手伝いながら日本語学校に通ったが、Annさんは全く日本語を習う機会も無く、ほぼ6年が過ぎてしまった。日本語が話せないことで、当初の取引先は「日本人の店」と「韓国人の店」が50:50だったが、今では30:70となり、多くの日本人経営のお店との取引ができなくなってしまった。最初に覚えた日本語が、

「いま、たんとうしゃがないので」「いま、がいしゅつちゅうです」

これだけを言い続けてお店を引っ張ってきたという。ひらがな、カタカナは、時間がある度に書いていると自然に覚えたが、テレビの音などは人より遅く、来日5年目になって、やっと聞き取れるようになったという。6年目を迎える今、お店での電話対応は、

「ツタツタだけど、言いたいことはほとんどいえるようになりました」

「今の我が店の取引先は全部私のお客さんですから」

という。自ら自分のお店の経営を仕切っている自負心も伺うことができた。

3才から日本の保育園に通い小学校に上がった娘が何よりの日本語の先生で、

「オンマ、それはこういうんだよ」

と、優しく、ママの日本語を直してくれたり、学校でもらってくるフリガナのついたチラシを読むのが楽しみだという。今は、テレビも大事な先生。

◇ 子どもの教育 ◇

子どもの教育に関しては、正直、忙しさのあまり、今まではあまり考えたことが無かったという。しかし、上の子が小学校に入ることをきっかけに、入学前に韓国にいる教育相談員をしている親戚に

相談した。そこで、「せっかく日本にいたので、それを活かした方が良い」とアドバイスをもらい、日本の公立小学校に入れた。日本語と日本の価値観を学び、日本人と情緒的な交流ができることを期待している。

もう一つ、日本で子どもを教育する理由として、「日本という国は、閉鎖的な面もあるが、意外と日本語ができるという前提の下、たくさんの機会を与えてくれる国である」ことをあげた。「日本はたくさんの機会を得ることができる国である」というイメージはやはり成功した本人の経験の影響だろうか。

◇ 将来の計画 ◇

「夫婦で同じ店の中で苦しみを乗り越え、喧嘩も絶えなかったが、絆も深まった。一人で日本にきていたら、とっくに帰ったはずだ」と振り返る。

これからの目標は、今のお店を大きくして、娘に譲ってあげることだ。不景気の現在は今の店を良く守りながらも、第二第三の我が店をもちたいという計画もある。儲けたお金の投資や、引退後の計画なども夫婦でよく話し合っているという。

Annさんは児童福祉に関心が高く、看護師の資格を無駄にせず、いつかは、そういう面で使えるようになることも期待している。「きっと、今まで守ってくれた神様がその願いもいつかはかなえてくれることを信じている」と話を終えた。

<インタビュー 21>

Jさん(40代・女性)「日本で人生のチャレンジをする」

2010年6月2日、ボンファ出身、パート勤務・韓国語教師、日本在住15年目
インタビューア：藤田ラウンド幸世

◇ 略歴と家族 ◇

Jさんは1969年生まれで、4人きょうだいの1番目。釜山に近いボンファで生まれ、後にソウルに移る。大学はソウル近郊の大学で経営学科専攻、副専攻は教育学で、選択科目で日本語を勉強する。

卒業後、貿易会社に就職し、3年間働いた後に、日本に留学。初めは1年間勉強してから帰国をするつもりでいたが、日本語学校の後に、大学の研究生として2年間大学院進学に向けて、児童心理

学を勉強する。しかし、結果として、大学院は選ばず、就職をする。

来日後は、現在にいたる 15 年間、新宿区に住み続ける。学生に始まり、韓国企業へ就職、日本の企業への転職、結婚、出産、子育てと自分の生活を築く。現在は、二人の子どもの子育てと同時に、パートで仕事をしながら、さらに、韓国語教師の国家資格をとるための勉強もしている。

◇ ぎりぎりの生活をした日本での留学生活 ◇

韓国の大学では語学はそれほど好きではなく、数学に自信をもっていたので、理系の経営学を専攻し、副専攻に教育学をとっていた。大学の選択科目として、日本語をとったので、在学中、集中的に勉強をし、日本語能力試験 1 級に合格をした。それもあって、貿易会社で 3 年ほど働いた後、27 歳のときに日本留学を決心する。「やっぱり、人生には波があるじゃないですか。会社に勤めたくない、結婚もしたくない、なんか新しい人生のチャレンジをしてみようっていう、そういう時期だったんです。」

親戚もいるわけではなく、お金は学費と当面の生活費しかなかったが、「まあ、やってみよう」と来日し、以後、日本語学校、大学院研究生として苦勞をすることになる。水道の水にご飯を入れて食べながら学校に通っていた時期もあった。しかし、今ではその時期を振り返って、「そういう経験があったから、本当に日本に耐えることがちょっと、こういうと変なんです、根強く耐えることができたわけです。悔しいんですね、せっかくこうやって来たのに、そのまま何もなしで帰るということが。」

経済的にぎりぎりの生活の中で J さんを親身になって助けてくれたのが同じ韓国出身の日本語学校での先輩たちだった。先輩たちに助けられ、一緒に教会に通うようになり、「神様の愛ってこういうものだ」と実感して、クリスチャンとなる。日本に通っている教会は、韓国人も多く、韓国語で話すこともできる。

日本で初めにアルバイトをしたのは焼肉屋だった。働き始めて一カ月後に、この焼肉屋の家族が夜逃げをしたので、アルバイト代をもらえず、残っていた鍋とか電気炊飯器をもらってきた。6 ヶ月後によく別のアルバイト先を見つけることができた。その職場では日本人の同僚と仲良くなり、一人の日本人の同僚とは現在でも付き合う長

年の友人となっている。

◇ 大学院進学か、就職かの選択 ◇

来日直後に入った日本語学校では、日本語能力試験の 1 級に合格していたこともあり、上級クラスに入れられる。しかし、上級クラスに入った当初は、先生の言っていることもよく理解できず、初めの 6 カ月は授業についていくのに苦勞した。先生から「韓国に帰った方がいい」と言われたこともあるが、これだけ苦勞をしてきたのだからと、一生懸命踏ん張り続けた。日本語学校に 1 年間在学した後は、児童心理学を専門として勉強のできる、国立大学の研究生となった。その大学は家から近く、自転車でも行けた。

大学院で児童心理学を専攻するためには、児童心理学の基本を学ぶ必要だった。J さんの学部の専門分野は経営学だったため、研究生として在学できる 2 年間を使って、基礎を学び、大学院に備えるつもりだった。ところが、いよいよ大学院に進学できるかというときに、別の選択肢が出てきた。韓国の大手企業の日本支社から仕事ははいい、結果としては大学院を受けることはしないで就職をすることに。就職後、まもなく、韓国の経済危機が起こり、勤めていた会社は日本から撤退することになり、会社の紹介で今度は日本の会社に転職をすることになった。このときは 31 歳になっていた。

◇ フルタイムの会社員として日本企業で働く ◇

日本の企業での新たな仕事について、J さんは、「私にとってはすごい勉強になったところですね。ただお金を稼ぐだけではなく、ほんとにもう日本語もそうだし、日本語の文化に接することができる、幅広く経験できる、お金を稼ぎながら勉強にもなったという、貴重な経験でした」という。

入社直後は、会社の 97% ぐらいは日本人が占める職場だった。上司である日本人の部長は自分よりも 3 歳年下で、職場では J さんは年齢的には若い方ではなかった。営業マンが多い部署に事務の女性として J さんが配置されたが、職場全体でいじめられたこともあった。何日も涙を流しながら会社に通い、後から聞くと周りの人もそのときに辞めるかと思ったくらい、当時はつらい時期でもあった。しかし、そこで辞めると「私が負ける」と、J さんは結局、頑張り続けた。

職場は日本全国各地から電話で顧客へサービス

を提供していたので、日本語の標準語だけではなく、大阪弁や東北弁などの方言の人とも対応しなければならなかった。ある時、「すいません、もう一度お願いします」と言った時に、「もう帰れよ！」と怒鳴られたこともあった。また、韓国語を使うお客から電話がかかってくると、いつもは冷たい職場の人が、「Jさん、お願いします」と頼んでくる。Jさんは職場では、20-30%くらいは韓国語を使っていた。

◇ 結婚、出産、そして子育て ◇

Jさんは日本で通っていた教会で知り合ったご主人と34歳のときに結婚。ご主人は韓国人なので、二人の結婚式はソウルで行った。ご主人の故郷では三日間に亘る独特の文化があるということだったが、それを二人の場合は「一日ちょっと」で披露宴をしてきた。

35歳のときに一番目の子どもを出産。結婚をしたときはまだフルタイムで働いていたが、出産の一月前に退職をした。出産後、一年間は体調を崩し、子育てをしながら休養をした。赤ちゃんが生まれたときは、名前は二人で考え、洗礼は現在通っている日本の教会で行った。

家族を持ち、後に二番目の子どもが生まれたころには、「たまに韓国に行きたいと思うときもあるんです。もし、結婚前に韓国に帰っていたら、韓国で住んだと思うんですけど、もう日本で子どもを産んだので、それからはたまに行くのはいいんですが、まあ、ここが私の住む場っていうか、韓国に帰って住むのは、まだまだ後になるってなんとなく思っています。」

Jさんにとって、母国を離れ、新しい人生にチャレンジするという事は、苦労の連続だったが、それを乗り越え、安定した基盤を築いたのは留学先の日本だった。今は日本の方が「楽」で慣れている。逆に、たまに韓国に行くと、家族に会えることはうれしいものの、韓国社会の変化の激しさに戸惑うことも多い。例えば、携帯電話やインターネットなども韓国の普及したのはJさんの来日後なので、Jさんにとっては携帯やインターネットは日本の方が馴染んでいるためか、韓国ではついていけない。

Jさんは、出産後、フルタイムからパートタイムに仕事を切り替え、一人目の子ども一歳になる頃から働き始めた。二人目の子どもを出産後、現在では、パートの仕事と派遣という形で韓国語を

教えて仕事と二つの仕事をしている。子どもがまだ幼いので自分の時間が増えたときには自分のやりたいことを積極的にやりたい。

◇ 子どもたちと将来 ◇

韓国語を教える仕事は自分に向いていると思うので、韓国語教師の国家資格がでるサイバー大学の三年生に編入し、子どもたちが寝静まった夜中に勉強もしている。来年は一番目の子どもが小学校に上がるので、現在、子どもの教育についても真剣に考えている。子どもたちは地元の保育園に通い、土曜日に教会で行っている韓国語の民族学校みたいな教室に通っている。日本語の方が上手だが、家庭では最近、意識的に母親の自分が韓国語を使っている。子どもを、教育中心の韓国学校か、ゆっくりと自分のペースで勉強して自由に勉強できる日本の学校か、どちらに行かせるか。ただ、韓国人なので、日本に住んでいても韓国の歴史を知ってほしい。子どもたちには、韓国人として誇りをもって日本に住んでほしいという希望が親としてあるという。

<インタビュー 21 >

J씨 (40대・여성) 「일본에서 인생의 도전을 하다」

2010년 6월 2일, 봉화출신, 파트근무 한국어강사, 일본체재 15년
인터뷰: 후지타 라운드 사치요

◇ 약력과 가족 ◇

J씨는 1969년에 4형제 중에 첫째로 태어났다. 부산에서 가까운 봉화에서 태어나서 그 뒤에 서울로 옮겼다. 서울 근교의 대학교에서 경영학과를 전공하여 선택과목으로 일본어를 배웠다.

졸업 후에 무역회사에 취직하여 3년 동안 일하고 일본으로 유학을 왔다고 한다. 처음에는 1년 동안 공부하고 귀국할 예정이었지만 일본어 학교를 마치고 대학원 진학을 위해서 2년 동안 대학교의 연구생으로서 아동심리학을 공부했다. 그러나 결과적으로 대학원을 선택하지 않고 취직을 하게 된다.

일본에 오고 나서부터 15년간 신주쿠에 살고 있다. 학생시절부터 시작하여 한국기업에 취직, 일본기업으로 직장을 옮기게 되고, 결혼을 하게 되며, 그리고 육아와 자신의 생활을 만들어갔다.

현재는 두 아들의 육아와 파트 아르바이트를 하면서 한국어강사를 위한 국가자격시험을 앞두고 공부를 하고 있다.

◇ 경제적으로 늘 아슬아슬했던 일본의 유학생 활 ◇

한국의 대학교에서는 어학에 그다지 관심이 없었고 수학에 자신이 있었기 때문에 이공계 쪽의 경영학을 전공하고 부전공으로 교육학을 하고 있었다. 그리고 선택과목으로 일본어를 배웠기 때문에 열심히 공부하여 재학중에 일본어능력시험 1급에 합격하였다. 일본어능력시험에 합격한 것도 있고 해서 3년 동안 무역회사에 일한 뒤, 27살 때에 일본유학을 결심하게 된다. “역시 인생에는 파도가 있지 않습니까? 회사 다니고 싶지도 않고 결혼도 하고 싶지도 않고, 뭔가 새로운 도전을 해보고 싶다는... 그런 시기였던 것 같아요.”

친척이 있었던 것도 아니고 학비와 당분간의 생활비 정도 밖에 돈이 없었지만 “뭐 한번 해볼까” 라는 마음으로 일본에 와서 일본어학교의 학생, 그리고 대학원의 연구생으로서 고생이 시작되었다. 수돗물에 밥을 말아먹으며 학교를 다닌 적도 있었다. 하지만 그런 생활을 뒤돌아 보면서 “그런 경험이 있었기 때문에 정말로 일본에서 견딜 수 있었던 것 같아요. 어떻게 보면 이상한 말이지만 이렇게 까지 고생했는데 그냥 돌아가기엔 억울하고 분해서 더욱더 끈질기게 견딜 수 있었던 것 같아요.” 라고 말했다.

경제적으로 아슬아슬한 생활을 하는 중에 같은 한국출신의 일본어학교 선배들이 친절하게 도와주었다고 한다. 선배들이 도와주고 함께 교회도 나가게 되어 “하나님의 사랑은 바로 이런 것이다” 라고 실감하여서 기독교인이 되었다. 일본에서 다니는 교회는 한국인도 많아서 한국어로 이야기를 할 수도 있었다.

일본에서 처음으로 시작한 아르바이트는 불고기 가게였었는데 그 주인집 가족이 밤에 도망을 가버려서 아르바이트 월급도 받지 못하고 남은 냄비라던가 전기밥솥 같은 것을 가지고 왔다고 한다. 6개월 뒤에 겨우 다른 아르바이트를 구했는데 거기에서는 일본인 동료와 친해져서 그 중에 한 명은 지금도 자주 만나는 오랜 친구가 되었다고 한다.

◇ 대학원에 진학하느냐, 취직하느냐의 선택 ◇

일본에 와서 처음 다닌 일본어학교에서는 일본어능력시험 1급에 합격한 것도 있고 해서 상급클래스에 들어가게 되었다. 하지만 처음 상급클래스에 들어갔을 때는 선생님이 말하는 것이 하나도 이해가 안되어서 6개월 동안은 수업 따라가는 데 고생했다고 한다. 선생님은 한국에 돌아가는 편이 낫겠다고 하셨지만 이렇게 고생해왔는데 돌아갈 수 없다고 이를 악물고 열심히 했었다. 일본어학교에서 1년 다닌 후에 아동심리학을 전문적으로 공부할 수 있는 국립대학의 연구생이 되었다. 그 대학은 집에서 가까워서 자전거로도 다닐 수 있었다고 한다.

대학원에서 아동심리학을 전공하기 위해서는 아동심리학의 기초를 배울 필요가 있었다. J씨의 학부 전공은 경영학이었기 때문에 2년 동안은 연구생으로서 기초를 닦고 대학원을 준비할 셈이었다. 하지만 겨우 대학원에 진학할 수 있게 되었을 때에 다른 선택의 길이 열렸다고 한다. 한국 대기업의 일본지사에 일이 들어와서 결과적으로 대학원 시험을 치르지 않고 취직을 하게 되었다. 취직 후, 얼마 안되어서 한국의 경제가 안 좋아졌는데 그로 인해 일하고 있던 회사도 일본에서 철수하게 되었다. 하지만 이번에는 그 회사에서 소개받은 일본회사로 직장을 옮기게 되었다. 그 때 나이가 31살이었다.

◇ 풀타임 회사원으로 일본기업에서 일하다 ◇

일본기업의 새로운 일에 대하여 J씨는 “저에게 있어서는 정말로 좋은 경험이 되었어요. 단지 돈을 벌기 위해서가 아니라 정말로 일본어도 그렇고 일본문화를 접할 수 있는 그리고 폭넓은 경험을 할 수 있는, 그런 돈을 벌면서 공부도 되었던 귀중한 경험이었어요” 라고 말했다.

입사했을 당시에는 회사의 97%가 일본사람인 직장이었다. 일본인 상사였던 부장은 자기보다 3살 어렸으며 직장에서 J씨는 비교적 젊은 쪽이었다고 한다. 영업직이 많은 부서에 사무여직원으로 배치되었는데 직장의 모든 사람들에게 이지메를 당한 적도 있었다고 한다. 많은 날들을 울면서 회사에 나갔는데 나중에 들어보니 주변의 사람들도 그 때는 그만두지 않을까 라고 생각할 정도로 힘든 시절이었다. 하지만 거기서 그만둔다면 “내가 지는 거야” 라며 J씨는 결국 끝까지 열심히 했다.

그 회사는 일본 전국에서 전화로 고객센터를 제공하고 있었기 때문에 일본어의 표준어뿐

만 아니라 오사카 사투리나 토호쿠 사투리등 여러 가지 사투리를 쓰는 사람들도 상대하지 않으면 안 되었다. 어떤 때는 “죄송합니다. 다시 한번 부탁 드립니다.” 라고 말하자 “그냥 돌아가 버려!” 라고 화낸 고객도 있었다고 한다. 그리고 한국어를 쓰는 손님이 전화를 하면 언제나 차갑게만 대하던 직장동료가 “J씨 부탁해요.” 라면서 부탁한다고 한다. J씨는 회사에서 20~30%는 한국어를 쓰고 있었다.

◇ 결혼, 출산, 그리고 육아 ◇

J씨는 일본에서 다니던 교회에서 알게 된 신랑과 34살에 결혼하였다. 결혼식은 신랑이 한국인이었기 때문에 서울에서 치렀다고 한다. 신랑의 고향에서는 결혼식을 3일에 걸쳐서 하는 독특한 문화였는데 둘의 경우는 하루하고 조금 더 피로연을 하고 왔다고 한다.

35살 때 첫째 아이를 출산하였다. 결혼을 할 당시에는 풀타임으로 일하고 있었지만 출산하기 1개월 전에 퇴직을 하였다. 출산 후, 1년 동안은 몸이 안 좋아서 애를 키우면서 휴양했다고 한다. 태어난 아기의 이름은 둘이서 생각해서 짓고 세례는 지금 다니는 교회에서 받았다고 한다.

가족이 생기게 되고 나중에 둘째를 낳았을 때는 “가끔은 한국에 가고 싶다는 생각을 하곤 해요. 만약에 결혼 전에 한국에 돌아갔다면 한국에서 살고 있었지만 이제 일본에서 아이를 낳았기 때문에 이곳이 내가 살아갈 장소라고나 할까.. 뭐 가끔은 한국에 가는 것도 괜찮지만 한국에 돌아가서 사는 것은 아주 먼 얘기라고 웬지 느껴져요.” 라고 말했다.

J씨에게 있어서 자기 나라를 떠나서 새로운 삶에 도전하는 데에 많은 고난이 뒤따랐지만 그 고난을 이겨내고 안정된 생활을 이룩해낸 곳은 바로 유학을 왔던 일본이었다. 반대로 가끔 한국에 돌아가면 가족들과 만나게 되어서 기쁘지만 한국 사회가 너무 급변해서 놀랄 때도 많다고 한다. 예를 들면 휴대폰이나 인터넷이 보급되기 시작한 것은 J씨가 일본에 온 뒤였기 때문에 J씨는 일본의 휴대폰이나 인터넷에 익숙해져 있어서 인지 한국에서는 그 변화에 따라갈 수가 없었다.

J씨는 출산 후에 풀타임 직원에서 파트타임으로 일을 바꾸어서 첫째 아이가 1살이 되었을 때부터 일을 시작하였다. 둘째 아이를 출산한

뒤로 지금까지 파트타임 아르바이트와 과건사원으로 한국어강사 일을 하고 있다. 아이들이 아직 어리기 때문에 자기 자신만의 시간이 있을 때 자기가 하고 싶은 일들을 하고 싶다고 한다.

◇ 아이들과 장래 ◇

한국어를 가르치는 일이 자기의 적성에 맞다고 생각하기 때문에 한국어교사 국가자격증이 나오는 사이버대학에 3학년으로 편입하여 아이들이 잠든 후에 열심히 공부하고 있다고 한다. 내년에는 첫째 아이가 초등학교에 입학하기 때문에 지금은 아이들의 교육에 대해서도 진지하게 생각 중이라고 한다. 아이들은 근처의 보육원에 다니면서 토요일은 교회에서 하는 한국어 민족학교 같은 곳에 보내고 있다. 일본어를 더 잘하지만 집에서는 엄마인 자신부터 의식적으로 한국어를 사용하고 있다고 한다. 아이들을 교육 중심인 한국인학교에 보낼 것인가 아니면 천천히 자신의 페이스에 맞게 공부하고 자유로운 일본의 학교에 보낼 것인가 고민하고 있다. 단지 한국인이니까 일본에 살고 있어도 한국의 역사를 알았으면 좋겠다고 한다. 아이들에게는 한국인으로서의 자긍심을 가지고 일본에서 살아주었으면 하는 바람을 부모로서 가지고 있다고 한다.

<インタビュー 22>

Sさん(20代・女性)「残りの大学生活でやってみたいのは英語の勉強」

2010年7月5日、釜山出身
大学生、日本滞在歴5年目
インタビュー担当：河合優子

◇ 日本に来日するまで ◇

Sさんは韓国で高校を卒業後、2006年春に来日した。韓国では、とくに外国語高校を希望していたわけではなかったが、数学が得意だったため、成績優秀者が集まる外国語高校の入試に合格してしまったという。高校では、英語をメインに勉強しながら、日本語も勉強した。高校では、副専攻として中国語か日本語が選択できたが、中学時代にクラスの友だちに見せてもらった、日本のドラマ『ごくせん』を見たことがきっかけで、日本語を選択した。日本に留学を決めた理由の一つに、英語があまり好きではなかったことがあるという。

め、Sさんが新大久保を勧めたようだ。

◇ 日本語学校時代 ◇

来日して最初に住んだのは高田馬場。ここで日本語学校に通うことにしたのは、韓国人学生が約2割と少なめであったことが理由だった。高田馬場での生活については、「ひとり暮らしがすごく楽しかったし、あと、高田馬場って少し歩いたら新大久保で、新宿もあって、あと、早稲田大学も近くて、どこでも行けるし、楽しかった」。日本語学校で学ぶなかで、友人間で使うような日本語ではなく、敬語などを含めたきちんとした日本語の話しことばを学ぼうと、居酒屋で働き始める。そこで、店長から、名札の名前を本名にすると、違和感を感じる客がいるかもしれないから、日本名にしてほしいといわれる。本名でなにがいけないのだろうと最初は思ったが、働くのには日本名があったほうが逆に楽だったという。この店には、韓国人の他にも中国人留学生のアルバイトもいたが、みんな週に何度も名札の名前を変えて、「今日は何にしようかな」と楽しんでいた。そのうち、日本人のアルバイトの人たちも、おもしろがって名前を変え始めた。

◇ 大学に入学してから ◇

神奈川県のある大学に入学し、メディア関係の勉強をしている。最初はすぐに日本人の友だちができず、大学近くのアパートに住んでいたが、新大久保に週5回通って、韓国人の友だちに会い、授業のない日はそのまま友人の家に泊まっていた。新大久保には複雑な感情がある。「韓国人って、新大久保嫌いなんです。でも、行く感じ」という。その理由については、「韓国人ばかりいるから。私は日本語を勉強しに日本に来たのに、結局、韓国語しかしゃべれないという感じが多かったので」と話す。

同じ大学の日本人大学生については、「みんな恥ずかしがり屋ですよ。メールはちゃんとしてるんですけど、会うとすぐ行っちゃって、挨拶もしないし、そののちよっと繰り返しがあって……」という。しかし、大学2年生のとき、海外での課外授業に参加し、日本人の友だちもできるようになると、新大久保へ行く回数も、週に1回ぐらいに減ったという。

最近、いところが大学卒業して来日し、新大久保で日本語学校に通っているため、新大久保にはよく出かける。いここは、日本語が全然話せないた

◇ アルバイトなど ◇

新宿でアルバイトを探すのは難しくないが、現在住んでいる外国人人口も少ない関東圏の中都市では、とても大変だ。「電話を30回ぐらいしたんですけど、『じゃ、そしたら面接を、火曜日にしましょう、何時がいいですか？お名前教えてください』と言うので、そのときに名前がばれちゃうじゃないですか、外国人ということ。それで、『私、外国人なんですけど、それでも大丈夫ですか？』と聞いたら、『ああ、外国人か、ごめんなさい』とか言うんですよ。アルバイト求人を見て、電話をし、アルバイトについていろいろと話をした後、「外国人です」と告げると、相手から「日本語を話せるのか」と聞かれて、今まで日本語で話していたのに、と絶句したことあるという。現在は、「最後の挑戦」と思って電話したレストランに雇ってもらい、アルバイトをしている。

ただし、中都市には新宿にはない良い面もある。「みんな忙しいじゃないですか、新宿の人。だから、『すみません』って言っても、すぐ行っちゃうし」という。今住んでいるところでは、特に中高年の女性がとても親切だという。バスで「今日は何買い物したの」とか、「私も韓国語勉強しているの」などと話しかけられたりするという。

◇ 日本社会に望むこと ◇

新大久保で、日本人の年配の男性から、「やっぱりおまえは韓国人だろ」と言われ、嫌な思いをしたことが何度かある。「嫌なことを言われても、あんまり日本語を話せないから言えないんです。だから、家に帰って、アニメとかドラマ見て、すごく悪口を覚えて、今度会ったら絶対言ってやろう」と思ったそうだ。

日本の人にはもっと普通に接してほしいという。「韓国人だからということにこだわらないでほしいというか。同じ外国人じゃないですか、アメリカ人とかイギリス人とか。韓国人も外国人だし。でも、韓国人に会うと、すぐ歴史の話とか、そういうことを言わないほうが……」。しかし、韓国に関してはもっと知ってほしいという気持ちもある。バイト先では「韓国って中国語話すんだっけ」といわれたり、お客さんにモンゴル人の人がいたときには、バイト先の人から「Sさんは韓国人だから、モンゴル語もできるのかな」と聞かれて驚い

たという。

◇ 将来について ◇

卒業後については迷っている。円高であることもあり、日ごろから金銭的に気をつけて生活しているため、「本当は日本にいれたらすごくいいんですけど、ちょっと疲れたので、韓国に帰って1年間ぐらい休みたいんです、何もしないで」。ただし、韓国で就職するとなると英語力が問われるため、「本当に TOEIC 点数があんまり出ないと就職できないので、そういうことを考えたら、韓国に帰りたいくない」のだそうだ。これから、残りの留学生活でやってみたいことは、英語の勉強だ。

将来は、バラエティー番組のプロデューサーになりたいという。そして、単におもしろい番組をつくるというだけでなく、社会貢献につながるような番組をつくりたい。例えば、韓国の『無限挑戦』というバラエティー番組では、番組のカレンダーを限定販売し、その収益金を寄付しているが、このように単に娯楽だけのものではなく、社会に何らかの形で還元できるような番組をつくってみたいそうだ。

<インタビュー 23>

H さん (30 代・女性)「商売、山あり谷あり」

2010 年 7 月 7 日、テジョン出身
店舗経営、日本在住 13 年
インタビュアー：渡辺幸倫

新宿には多くの韓国料理店がある。職安通り周辺から大久保通りにかけては特に集中している。3 月の震災の影響で一時は人通りが少なくなったが、現在はすでに以前の賑わいを取り戻しつつあり、客層は 20 代の女性が非常に目立つようになっている。今回のインタビューでお話を聞いた H さんは、韓国での大学時代から商売を始めた。大きく儲けたときもあれば、思い通りに行かなかったこともある。そんな紆余曲折を経て現在は西武新宿駅近くで韓国料理店の店主として厨房も切り盛りしている。そんな H さんの「紆余曲折」の部分の話を聞いてみた。

◇ 初めての商売 ◇

H さんはテジョンで兄 4 人、姉 2 人の末っ子として育った。高校を卒業した後一年間兄が働く香港で経理の仕事を手伝ったのが初めての外国生

活だった。帰国後大学へ進学し経営学を学んだ。初めての商機は大学時代アルバイトで働いていたデザイナーショップで訪れた。

良く気がつき、おしゃべりも上手な H さんはアルバイトながら売上が非常に良かった。ある日、オーナーがアメリカに移ることになり、ビジネスを売りに出そうとしたが買い手がつかない。そこで H さんに話が回ってくる。「皆が安く買おうとするから腹が立って、それならこの子に任せて、営業利益からお金を回してもらえれば」と考えたのだろうという。このオーナーの考えは的中する。

「私のアイデアを入れたら、3 か月で売り上げが 3 倍に上がったんです。私はそのとき訪問販売をしたんです。セレブたちに服を持って行って、ちゃんと服をコーディネートしてあげて。若かったから、何も怖くなくて...」H さんは振り返る。仕事は順調に伸びた。ほどなくアメリカのオーナーから店を買い取り、自ら事業を大きくしていった。その間 IMF 金融危機を経験するが「金持ちは金持ちだから。私は金持ち相手の仕事をやってたので、それで大丈夫だったんです」という。しかし、1998 年に倒産させてしまう。「私があまり大きくやりすぎたのと先だけ見て、今現在の状況を見なかったからお金の動きとかをちゃんと考えなきゃいけなかったんですけど、それをしなかった。まだ若かったし...」。自分がオーナーになってから 4 年後のことだった。

◇ 来日と新宿での新生活 ◇

初めての来日は 1998 年。お店が倒産してしまい、パニックになっていた時だった。「うちのお父さんがそれを見て凄く可哀想に思ったんですね。『お父さんが解決するから、親戚のお姉さんがいる日本に行ってください。行ってる間に全部解決するから』』ということで日本にきました」。

しばらくは、ビザの関係もあって日本や香港と韓国を往復することになった。「その間に倒産の件はお父さんが全部解決しました。けど、それから恥ずかしくて韓国に帰らなくなりましたよ。それまでは私は、自分の年に見合わない生活をしていましたよ。お金を沢山稼いでいたので、同じ年の友達とは全然違う生活をしていました。それで友達に会うのも恥ずかしくて帰れない」。こんな事情での来日だったが「日本が私とあった。人の性格とか考え方とか、自然も韓国と凄くよく似てるし。でも、似てる中でも違うところがある

んですね。そういうところが私とあった」のだという。そこで、前橋の親戚の家に住み込んでアルバイトをはじめた。言葉で苦労した覚えはあまりないという。「私はおしゃべりだから、3ヵ月で言葉がペラペラになりました。しゃべれないと、自分が苦しいじゃないですか。何かしゃべりたいのに、早くしゃべらなきゃいけないし。あと勇気があったの。私が外国人なのを皆知ってるから、間違っても大丈夫だ。間違っても大丈夫だし、相手が教えてくれるから」と笑う。

「そこから、田舎が嫌なんで東京行きたいなって思って、東京に出ました。最初新宿のプリンスホテルに泊まったんです。高層階に泊まったんですけど、そこから見た夜景が凄く綺麗で、『私ここに絶対住みたい』と心に決めたという。程なく歌舞伎町にある韓国風刺身屋で働き始めることになる。新しい生活が始まるとともに、韓国での失敗からも立ち上がりはじめていた。

◇ 再挑戦のチャンス ◇

刺身屋で働きながらお金を貯めていると次の商機がやってきた。友達が住む千葉に行ったときに気がついた。その街には焼肉などの韓国料理屋は多いのだが刺身屋が無い。「友達に『ここで刺身屋やったら儲かるよね?』と聞いたら、『そうだね』って。それから何日かして友達から電話がきて『オーナーが韓国人の店なんだけど、借金が多くて店を売るんだって。でも、みんなこの店を買ってもお客さんが入らないの知ってるから買いたがらない。だから分割でもいいから売りたいと言っているの、あなたここに来て刺身屋やる?』と言ったんです」。

数百万円のお金が必要だった。自分の貯めたお金だけでは足りなかったので、韓国の家族にも援助してもらい、内装も刺身屋らしくかえたかったが、お金がかかると言うことで色々と自作したり、韓国から食器を買って持ってきたりもした。それでもオープンする資金しか用意できなかったため、足りない分はオープン後分割で支払うことで解決した。2001年、911のテロがあった頃だった。

いけると思っていた予感は的中。近所のクラブからのお客もありオープン初日から40万円以上の売り上げ。3ヶ月で借金を全て返し、それからは面白いように売り上げが上がっていった。ほどなく2件目の店を出すことになる。浅草に安くて良い物件を見つけた。今度は焼肉屋。こちらも気

分が良い程に繁盛した。

しかし、家は新宿のまま。夕方5時から8時までのお店を2軒も切り盛りするのは体力的につらいものだった。そんな時に日本に来たばかりの頃に知り合った方と結婚することになる。2004年のことだった。

◇ 結婚としばしの主婦生活と再々挑戦 ◇

ご主人は日本国籍を取得した元韓国人。家では日本語と韓国語をちゃんぽんで話すという。「韓国語でしゃべっても、その中に日本語が入ったり」。二人で過ごせる時間を増やす目的と「私の方でも商売をするのをうんざりになってきちゃって...」という事情もあって、千葉と浅草のお店を処分して、ご主人の経営する会社を手伝いながら主婦生活を送るようになる。

しかし、2年程たった2006年。またお店を始めたくなる。今度は歌舞伎町に韓国料理の高級店を出す。「歌舞伎町にはクラブが多いからクラブのお客さんが来るだろうと。値段も高くすることができるとし、夜中までやって。営業時間が長いほど売り上げが上がるから。どうせ家賃は同じでしょう。それでやってたんだけど、それから入管が凄く厳しくなって。目の前にクラブが20件くらいあったけど1件しか残らなかった。家賃が凄く高かったし、家賃と電気代入れると固定費で120万越えるし...。それでダメになって」。残念ながら、この挑戦は1年半程で失敗に終わってしまう。「それからまた主人の会社の仕事をして。それからしばらくはまだ落ち込んで。一年経ったときかな?それが2008年の1月か2月で辞めたから、それから落ち込んでたけど、またやろうと思ってここを」、つまり現在のお店を開店することになる。

◇ 再々々挑戦（現在進行中） ◇

開店の際には色々と考えた。今度は高級料理ではなく、安くて質の高いものを出す方針にした。新宿は第一候補ではなかった。「あまり韓国料理屋が多いと競争になっちゃうから。もっと安く、もっと安く。それが嫌だったんです。それで、新宿ではやりたくない。新橋とかそういうところでやりたいなって思って。新橋でも韓国料理屋は何軒かあるんだけど、本格的な三段バラ専門店とかはなかったんで。新橋に探しに行って何軒かいい場所を申し込んだんですよ。でも韓国人だからか断られて。新橋は韓国人にビルを貸してあげるよ

うなオーナーが少ない。ちょっと堅い。それで新宿も探すようになって。ただ、今のお店のある辺りは一回も歩いたことがなかったんです。プリンスホテルの前とかは繁盛してるじゃないですか。それが、考えごととしてたらフラッと歩いてたんですね。で、こういう通りあったっけって。よく見たら隣にも店があったり2階3階にも店があるし、人通りもそこそこあるし。いいなと思ったんですね。で、知り合いの韓国の不動産の人と話して、家賃も安くしてくれるって言うんで、さらに何日か調べて。ここに来るお客さんは、新大久保に行くお客さんとは全然違うんだと。大久保とか職安通りに行くお客さんは大体韓流ブームで、おばちゃんとかお姉ちゃんとか、そういう韓流ブームに乗っていく人が多かったんですけど、この辺は普通のサラリーマン。西武線の利用者とかが多かったんで。これなら韓国人同士の競争にはならないかなと」。ブームの恩恵も受けにくいだけに時間がかかるが、最近は特に手応えを感じるようになった。そのきっかけの一つは東日本大震災だった。

◇ 震災を経て ◇

現在の店を開店してから既に1年半。いろいろなことがあった。しかしもっとも大きな事件は震災関連だろう。これまで経営に専念し、調理などを担当することの無かったHさんだが、震災を機にオーナーシェフになった。自ら「ターニングポイントでした」と語るように、震災の対応ということだけでなく、店の運営という点からも良い意味で重要な転換点だった。ただ、そのきっかけは調理場の人間が全て韓国に帰るといざしたことからだった。「本人たちは韓国に帰りたくなくても韓国のメディアが凄く大騒ぎしたんで。うちの従業員はまだ日本が短いので怖がって。それで言ったんです。『行きたい人は行きなさい。でも店を閉めることはできない。いきなり店を休業しますとかするとお客さんに失礼だし。今慣れてないけど私が厨房入るから。引き継ぐために、ちょっと準備して帰りなさい』と。そしたらちゃんと準備して帰ったんですよ」。店には前年から日本に留学してきていた姪と二人だけになった。

震災直後には多くの店が休業していたためかHさんの店は客足が絶えなかった。しかし予約が入っても働き手がない。すぐに見つけることも難しい。そんな状況を変えたのがツイッターだった。「震災のあと、『私は日本捨てないですよ、韓国に

帰らないで日本で日本守るから』って呟いたんですよ。そしたら常連客が『感動しました』って言って店に来たんです。その若いOLさんたちが『手伝ってあげる』と言って、仕事終わってから手伝いに来てくれて。3週間くらい手伝ってくれて」。常連客との思わぬつながりが確認された出来事だった。

店の営業はなんとかあったが、震災ではHさん自身も考えるところがあった。「うちの親も何回も電話かかってきて、早く帰って来なさいと。今放射能とかもすごく危いし。あなたが死んだら何の意味もないから。日本のものを全部整理してきなさいと。でも整理もそんな簡単にできないので…。私は日本に来て大人になったから。22歳のとき日本に来たんで。その前は店やってたけど学生だったし。日本に来てから大人になったんです。それに韓国に行ったらやることもないし、息苦しいから韓国には帰りたくない。『日本が震災で大変な目にあっても私は日本がいいから日本にいるよ』って、それでうちの親は納得したんですけど、主人もいるから主人を捨てていけないでしょ!」。Hさんにとっては「日本にいる自分」という方があたり前のことになってきているようだ。

◇ 今後のこと ◇

まずは今の店を軌道に乗せることが重要だ。もちろん、その後のことも考えている。「この店がうまくいったら2号店3号店。新橋に行きたかったんで新橋に。こういう韓国の店があんまりないところに」店を出したいという。

既に日本が長くなってきているHさんは、友人の相談に乗ることもあるという。その時にいつも言うのが「自分の競争相手よりはもうちょっと頑張らないと。50パーセント以上頑張る」ということだそう。特に日本人と競争する際には、「同じくらいのレベルの人がいて、一人は日本人、一人は韓国人だったらいい部署には大体日本人をいかせると思うので。同じレベルになっちゃいけないと思うのです。日本人と同じレベルになると負けるから、日本人より少しでももっと頑張っただけでももらわないといけないっていうのがありますね」。人へのアドバイスとしてだけでなく、自分に言い聞かせているようでもあった。

最後にHさんの原動力となっている思いが良く表れていると思われる一説を紹介したい。「私は今まで何回も日本で成功もしたり、悪いこともあ

ったんだけど考えたら肯定的な考え方をするのが一番。たとえば、今私の店が潰れたとして。でも私は日本に来るとき手ぶらで来たわけだから。今は家があるわけでしょ？お腹空いてないでしょ？洋服もあるでしょ？私日本にくるとき洋服も持ってなかったの、これでも悪くないよ。また何とかしたら、頑張ったら良くなるんだと。信念というか自分自身を信じてあげないといけない。それで、私はできるんだと思えばできる、できないんだと思えばできない。世の中が自分がしゃべる通りになる。私はそう思います。」

商売は山あり谷あり。しかしこんなHさんならきっと切り抜けていくことが出来ることだろう。

<インタビュー 24>

Kさん(30代・男性)「日本で研究者に」

2010年7月8日、ソウル出身
大学助手、日本滞在歴12年
インタビュー担当：河合優子

◇ 日本に来日するまで ◇

Kさんは、高校卒業後、韓国の大学に入学し、社会学を専攻した。社会学にしたのは、「偏差値と成績、もっぱらそれだけ」だったという。大学2年まで終えたところで、兵役のために休学し、1998年6月に除隊した。新学年度は翌年の3月からのため、その間の期間を利用し、その年の10月、初めて日本にやってきた。先にKさんの兄が日本に留学しており、来日には不安はなかったが、日本語はそれ以前にまったく学んだことはなかった。

◇ 日本語学校時代 ◇

「東西南北」という漢字も書けないくらいだったが、日本語の上達がとても早く、来日後5ヶ月目に受験した日本語能力試験1級の模擬試験で、400点中380点をとった。日本の大学に入学することを考えはじめ、入試ではとりあえず日本語を読めて書けるようにならなくてはならないと、漢字や単語をひたすら書いて覚えるという方法で日本語を勉強したという。

◇ 大学入学してから ◇

来日した翌年には大学受験に合格し、経済学を専攻した。やはり読み書きを中心に日本語を学ん

できたため、「大学に入って、実際に1年生のときはほとんどしゃべれなかったんですね。特に敬語だけの日本語なんで、結構距離感があるんです、やっぱり友達と。タメロがきけないので」とKさんは話す。最初の1年はほとんど日本の友人ができなかったそうだ。

それで考えついたのは、韓国語を教えることだった。大学内にビラを貼り、ボランティアで韓国語を教え始めた。それがきっかけで、だんだん日本人の友人もできるようになっただけでなく、韓国語講師としての仕事も紹介してもらえるようになった。民間企業や大学の短期講座などで、韓国語講師を8年間務めた。韓国語を教えることについては、「大変だったんですよ。やっぱり準備するのも大変でしたし、私も改めて母国語を勉強しなきゃいけないので。でも、意外と向いていたってというか、楽しかったんですね、人を教えるのが。韓国語を教えるのが楽しいんじゃないかと、何か自分が持っているものを伝えて、それがきっかけになっていろいろと交流が広まっていくっていうのがすごく楽しくて」という。大学では知り合えない、サラリーマン、OL、医者など幅広い層の日本人たちとの交流ができたという。今でも教えた人たちとつきあいがある。

◇ 住む場所 ◇

最初は新宿区内に住んでいたが、神奈川県の外の一軒家に3年ほど住んで新宿区まで通学していたこともある。大学からはかなり遠かったが、犬と一緒に住めるところを探していた。そこでは、地域のコミュニティが残っており、近隣の人との交流もあり、まるで韓国の田舎のようだったという。しかし、やはり通学には不便だということで、現在は都内に戻って生活している。郊外での生活について、「一軒家だったので、やっぱり外国に1人で住むっていうのは、とても不安なんですよ、男であっても。なので、やっぱり自分から、求めるようになるんですよ、人のつながりっていうのを。例えば地震が起きて食水とか配給されるときに、自分だけ取り残されたらどうしようみたいな・・・やっぱり自分から前向きに求めていくっていう、そういう姿勢があったんですけれども、ここ(都内)だとほとんどそういうのを感じない」。

コリアン・タウンと呼ばれる新大久保について、Kさんは次のように語った。「そこに韓国人がいっぱいいるから行きたくなっている意味じゃなく

て、もしそこが韓国の、いわゆる 코리아タウンじゃなくても、多分行かないと思う。なかなか行きたくないっていうのがあるんですね。ちょっと暗い感じがするんです、どうしても。多分歌舞伎町ともリンクしてくるとも思うんですけども」。しかし、韓国の食材を買う目的や、留学生会の集まりなどで、新大久保に月 1、2 回は出かける。

◇ 日本社会について ◇

日本での経験は、「多分、運のいいほうかもしれないんですけども、それほど嫌なことは今までは経験してないんですね」という。ドラマ『冬のソナタ』の人気が出る前と後では、韓国人であることの意味が、大きく変化したことを実感した。日本社会については、「今の日本って、結構いろいろ言われてるんですけども、私から見たときには、ものすごくいい国だと思うんですよ。いろいろないいものを持って国なんですね。例えば、本当に一般的な話をすると、ものをつくるときの、何ていうんですか、丁寧さとか、そういうものもありますし、やっぱり周りに迷惑をかけないような、そういう意識がきちりと、みんなそういう意識を持ってるだとか、やっぱり社会的なインフラだとか文化的なインフラを、すべてを見ても、やっぱりいいものっていっぱい持ってるんですよ」という。

◇ 歴史問題 ◇

日本の植民地支配に関わる歴史問題についても、熱心に語ってくれた。「よく考えてみると、その当時の歴史的な問題になってる当時の被害者、いわゆる被害者の人たちがまだ生きてるんですよ。あと 10 年も残ってないと思うんですけども、まだ生きてるっていうことは、過去の問題じゃなくて現実問題だと思うんですよ。だから、本当に日本としては、日本が歴史的な問題にかかわったときに、周りの国々が持ってるイメージを変えるチャンスって、あと 10 年も残ってないと思うんですよ。この間に何をどうするのかっていうことなんですよ。なんで、それぞれ果たすべき役割があると思うんですよ。ただ、若者のような、全くそのような、直接的な責任も持っていない人たちっていうのは、やっぱりそれをちゃんと知ることによって、この問題について韓国人、あるいは中国人と話すときに、やっぱり真剣な姿勢が自然と持てるようになるんじゃないのかなと思うんです

ね。」

◇ 将来について ◇

大学卒業後、大学院に進み、現在は大学で助手を務め、講師として大学で教えながら、博士論文の完成を目指している。将来は、日本で研究者として仕事をしたいと考えている。「周りの日本のいろんな方々に助けていただいてここまで来てるので、ちょっとこんな言い方よくないかもしれないんですけども、何らかの形で私も何かをこの社会にしたいんですね・・・自分でできることっていうのは、何か書いて研究をしたり、あるいは学生たちを教えたりすることぐらいなので、自分の実力がどこまでいけるのかっていうのは別として・・・しばらくは日本に残ってやっていきたいなという気持ちは、正直あります」と抱負を語ってくれた。

<インタビュー 24 >

K씨 (30대·남성) 「일본에서 연구자로」

2010년 7월 8일, 서울 출신
대학교 조수, 일본거주 12년
인터뷰 담당 : 카와이 유코

◇ 일본 방문할 때까지 ◇

K씨는, 고교 졸업 후, 한국의 대학에 입학해, 사회학을 전공했다. 사회학에서 한 것은, 「오로지 편차치와 성적, 그것 뿐」이었다고 한다. 대학 2년을 마친 후, 병역을 위해서 휴학을 했고, 1998년 6월에 제대했다. 신학기의 시작은 다음해 3월부터였기 때문에, 그 동안의 기간을 이용해, 그 해 10월 처음으로 일본을 방문 했다. 먼저 K씨의 형이 일본에 유학하고 있어 일본 방문에 대한 불안은 없었지만, 일본어는 그 이전에 전혀 배웠던 적은 없었다.

◇ 일본어 학교 시절 ◇

「동서남북」이라고 하는 한자도 못쓰는 정도였지만, 일본어의 습득이 매우 빨라, 일본 방문 후 5개월째에 일본어 능력 시험 1급 모의 시험에서 400점 만점에 380점을 받았다. 일본의 대학에 입학 할 것을 생각해, 입시에서는 우선 일본어를 읽을 수 있고 쓸 수 있도록 하지 않으면 안 된다는 생각에 한자나 단어를 오로지 쓰며 외우는 방법으로 일본어를 공부했다고 한다.

◇ 대학 입학 후 ◇

일본 방문한 다음 해에는 대학 입시에 합격해 경제학을 전공했다. 역시 읽고 쓰기를 중심으로 일본어를 배워 왔기 때문에, 「대학에 들어가고 실제로 1학년 때는 거의 말을 할 수 없었지요. 특히 일본어는 존경어를 많이 사용하기 때문에, 상당히 거리감이 있습니다. 역시 친구들과 편하게 말을 할 수 없기 때문에」라고 K씨는 이야기한다. 처음 1년은 거의 일본인 친구가 없었다고 한다.

그래서 생각한 것이 한국어를 가르치는 것이었다. 대학 내에 진단지를 붙여, 자원봉사로 한국어를 가르치기 시작했다. 그것을 계기로, 점점 일본인 친구도 생기게 되었을 뿐 아니라, 한국어 강사로서의 일도 소개 받을 수 있게 되었다. 민간기업이나 대학의 단기 강좌 등에서, 한국어 강사로서 8년간을 일했다. 한국어를 가르치는 것에 대해서는, 「힘들었죠. 역시 준비하는 것도 힘 들었어요. 저 역시 모국어를 다시 공부하지 않으면 안되기 때문이에요. 그렇지만 의외로 적성에 맞는지 재미 있었어요. 사람들을 가르친다는 것이. 한국어를 가르치는 것이 재미있는 것이 아니라, 무엇인가 자신이 가지고 있는 것을 전하고, 그것이 계기가 되어 여러 가지 교류가 이루어져 나가는 것이 너무 재미있었어요」라고 한다. 대학교에서는 만날 수 없는, 샐러리맨, 의사 등 폭넓은 층의 일본 사람들과의 교류를 할 수 있었다고 한다. 지금도 가르친 사람들과 교제가 이어지고 있다.

◇ 거주지 ◇

처음은 신주쿠구내에 살고 있었지만, 카나가와현 교외의 단독주택에 3년 정도 살아 신주쿠구까지 통학했던 적도 있다. 학교에서는 꽤 멀었지만, 애완견을 키울 수 있는 곳을 찾고 있었다. 그곳에서는 지역의 커뮤니티가 남아 있어 주변 사람들과의 교류도 있었고, 마치 한국의 시골 같았다고 한다. 그러나, 역시 통학에는 불편함을 느껴, 현재는 도내로 돌아와 생활하고 있다. 교외에서의 생활에 대해서, 「단독 주택이라, 역시 외국에 혼자서 산다고 하는 것은 매우 불안하네요, 남자여도. 그래서, 역시 스스로 사람들과의 연결을 요구하게 됩니다. 예를 들면 지진이 일어나 식수등이 배급될 때, 자기만 남겨지면 어떻게 하지? 같은... 역시 스스로 적극

적으로 요구해 나가야 하는 느낌 이었지만, 여기(도내)라면 거의 그러한 것을 느끼지 않는다」.

코리아 타운으로 불리는 신오오쿠보에 대해서, K씨는 다음과 같이 말했다. 「거기에 한국인이 많이 있기 때문에 가고 싶지 않다는 의미가 아니고, 만약 거기가 이른바 코리아 타운이 아니어도, 아마도 가지 않을거라 생각한다. 좀처럼 가고 싶지 않네요. 아무래도 조금 어두운 느낌이 듭니다. 아마 가부키초와 비슷한 느낌이 든다고 생각합니다만」. 그러나, 한국의 식 재료를 사기 위해서나, 유학생회의 모임 등으로 신오오쿠보에 월1,2회 정도는 나간다.

◇ 일본 사회에 대해 ◇

일본에서의 경험은, 「아마, 운이 좋은 편일지도 모릅니다만, 그렇게 싫은 것은 지금까지는 경험한적이 없네요.」라고 한다. 드라마 「겨울 소나타」의 인기가 있기 전과 후에는, 한국인인 것의 의미가 크게 변화한 것을 실감했다. 일본 사회에 대해서는, 「지금의 일본은 상당히 여러 가지 말들이 많았지만, 제가 보기엔 아주 좋은 나라라고 생각합니다. 여러 가지 좋은 면을 많이 가지고 있는 나라인 것 같아요. 예를 들면, 정말로 일반적인 이야기를 하면, 물건을 만들 때의 그 뭐라고 할까, 정중함이라든지, 역시 주위에 폐를 끼치지 않는 듯한, 그러한 의식이 제대로, 모두 그러한 의식을 가지고 있는 것 같고, 역시 사회적인 인프라나 문화적인 인프라 등 모든 면을 봐도, 역시 좋은 것을 많이 가지고 있네요.」라고 한다.

◇ 역사 문제 ◇

일본의 식민지 지배에 관련되는 역사 문제에 대해서도, 열심히 말해 주었다. 「잘 생각해 보면, 그 당시의 역사적인 문제로 되어있는 당시의 피해자, 이른바 피해자들이 아직 살아 있다는 거예요. 앞으로 10년도 남지 않다고 생각하지만, 아직 살아 있다는 것은, 과거의 문제가 아니고 현실 문제라고 생각합니다. 그렇기 때문에, 정말로 일본으로서는 일본이 역사적인 문제와 관계되었을 때에, 주위의 나라들이 가지고 있는 이미지를 바꿀 찬스는, 앞으로 10년도 남지 않았다고 생각합니다. 그사이 무엇을 어떻게 할 것인지에 달려 있습니다. 각각 완수해야 할 역할이 있다고 생각합니다. 단지, 직접적인 책

임은 가지고 있지 않은 젊은이들과 함께 그것을 제대로 이해 하는 것에 의해서, 이 문제에 대해 한국인, 혹은 중국인과 이야기할 때, 역시 진지한 자세를 자연스럽게 가질 수 있게 되지 않을까 생각합니다。」

◇ 장래에 대해 ◇

대학졸업 후, 대학원에 진학해, 현재는 대학에서 조수를 맡아 강사로서 대학에서 가르치면서, 박사 논문의 완성을 목표로 하고 있다. 장래에는, 일본에서 연구자로서 일을 하고 싶다. 「일본에 계신 주위의 여러 분들의 도움으로 여기까지 왔기 때문에, 조금 이런 말투는 좋지 않을지도 모르지만, 어떠한 식으로라도 나도 무엇인가를 사회에 공헌을 하고 싶네요…자신이 할 수 있는 것이라고는, 무엇인가를 쓰고 연구를 하거나 혹은 학생들을 가르치거나 하는 것 정도여서, 자신의 실력을 어디까지 발휘할 수 있거나 하는 문제는 접어두더라도…당분간은 일본에 남아서 해 나가고 싶다는 마음이 솔직한 심정입니다。」라고 포부를 말해 주었다.

<인터뷰어 25>

Rさん(20代・女性)「スペインにも留学したい」

2010年7月13日、釜山出身、大学生
日本滞在歴4年
インタビュー担当：河合優子

◇ 日本に来日するきっかけ ◇

Rさんは、釜山出身で、2006年9月に来日した。韓国で高校卒業後、大学に入学し、新聞放送学科で1年半ほど勉強した。日本語は高校、そして大学でも学んだ。Rさんの通っていた高校では、英語のほかにもう一つ第二外国語の授業をとらなくてはならなかったが、日本語の授業しかなく、高校2年生までは日本語の授業は必修だった。大学に進学してからも、第二外国語に日本語を選択した。2年生の夏休みに、休学して海外でボランティアをしようと思っていたところ、日本人男性と結婚して神奈川県に住んでいた従姉に、日本で日本語を勉強してみないか、と誘われた。最初は3ヶ月の観光ビザで日本にやってきた。

◇ 日本語学校時代 ◇

日本語学校で学習を始めて1ヶ月ぐらいたつと、とてもおもしろくなり、ビザを延長・変更して本格的に日本語の勉強に打ち込んだ。Rさんの通っていた神奈川県日本語学校はカザフスタン、セネガル、ロシアなど世界のさまざまな地域から学生が集まっており、その人たちとの交流がとても楽しかったという。1年6ヶ月後に、関東圏にある大学のメディア系学科に進学した。

◇ 大学に入ってから ◇

大学に入学したあと、最初は日本人の友人があまりできなかったという。大学でも留学生は日本語の授業を受けなくてはならなかったため、そこで知り合った中国人の留学生などと仲良くなった。そのうち、同じ授業やゼミで知り合った、日本人の友だちもできていった。

日本と韓国での友人関係の違いに関して、日本の友だちは恋愛の話が多く、政治や経済など、もっと幅広い話がしにくいと感じている。それから、友人間での親しさの表現のしかたに関しても、日本と韓国の違いがあるという。「例えば韓国人は、一応親しくなったら、すごいそれを表現をするっていうか……。日本人の友達だと、そういうのがなくて、あと、挨拶はするけど、何となく遠い感じがする」。日韓の歴史問題については、あまり話題にしないようにしているが、話してみたいという気持ちはある。しかし、外国語である日本語でそれについて話すことは簡単ではなく、「言葉を慎重に選ばなきゃいけないと思ってます」という。韓国語もわかるような人であればいい、とRさんは話す。

◇ 新宿・新大久保 ◇

新宿には2006年に来日して、2009年の夏までに、合計しても5回くらいしか行ったことはなかった。Rさんが始めて新大久保に行ったのは、2009年の8月だ。「新宿と新大久保は別なもの」という。「新宿は、新大久保とすごい近いんですけど、新宿のほうは日本人が多くて。。新大久保は、本当に韓国みたい。初めて行ったときはびっくりしました」。それまで従姉の家と一緒に暮らしていたが、その家を出ることになり、2009年の8月から3ヶ月間、専門学校に通っている韓国人の友人と、新大久保でルームシェアをして暮らした。

新大久保は、住みやすいが、逆に少し寂しく感じることもあったという。新大久保以外の場所で

は、一人で行動することには抵抗はないが、新大久保は、韓国人が多いため、常に誰かと一緒に行動するという韓国文化に従っていないと、孤独感を感じてしまう。「この辺（大学の近く）だと、1人でやっても1人じゃないですから、本当に。1人でやってる人が私1人じゃないから、別にいいかなって感じなんですけど、そこでは1人でできないんで。この辺ではコーヒーショップとか結構1人で行くんですけど、新大久保に住んだときは、ちょっと遠めの新宿まで……」。ルームシェアをした友人と、とても仲良くなったこともあって、それ以降は、月に1、2回は新大久保に行くようになった。新大久保では、ラーメンやコチュジャンなどの韓国の食材を購入するのだそうだ。

◇ アルバイト ◇

アルバイトは中華料理屋や居酒屋でも経験した。現在、住んでいる関東圏の中都市で、アルバイトを探すのは難しい。「ネットとか情報誌とか見て電話して、最初に言って、『私は外国人なんですけど大丈夫ですか?』って聞いたら、速攻で断るところもあるし……」。「あまり外国人がそんなに多くないから、このあたりは。あまり雇ってくれるところがそんなに多くはない」という。

中華料理屋では、あまり普段の生活では話す機会がないパートで働きに来る女性や年配の常連客との会話が楽しかった。同年代の大学の友人が使わない日本語が出てきたり、そのような年代の人の日本語の聞き取りは難しく、もう一度言ってもらったりすることも多かったが、逆にそれがおもしろかった。居酒屋では、言葉だけでなく、従業員のコミュニケーションのしかたの違いも学んだという。例えば、韓国の飲食店では、客に呼ばれたとき、手がはなせないときには、呼ばれていることを認識しておくだけで、その客に対して「少々お待ちください」などと返事をするのは、あまりないそうだ。しかし、同じような場面で、Rさんは客の一人から「なぜ返事をしないのか」と怒鳴られてしまった。

今は韓国語の個人レッスンをしている。大学1年生だった2008年、日本語学校の先生の紹介で、もう一人の韓国人留学生と一緒に、高校で1学期間、韓国語を教えた。対象は、修学旅行で韓国に行く高校生である。それがきっかけで韓国語を教えることの楽しさを知ったという。大学で日本語教育の授業を履修しながら、それを韓国語のレッ

スンにも役立てている。

◇ 将来について ◇

大学を卒業後は、企業で広報関係の仕事をしてみたいという希望を持っている。できれば日本で就職したいと思っているが、どうなるかはわからない。そして、3年ぐらい働いたら、大学1年から学んでいるスペイン語の勉強をするためにスペインに留学してみたいそうだ。Rさんのお母さんが好きだという韓国の女性旅行作家の本に触発されたという。

<インタビュー 26 >

LS씨 (20대・여성) 「정겨운 나라 일본, 많이 보고, 많은 것을 경험하고 싶은 나라」

2010년7월17일, 서울 출신
일본어 어학교 재학, 체재 4개월째
인터뷰어 : 이호현

◇ 약력 및 일본에 오게 되는 계기 ◇

서울에서 태어나 중학교 시절 읽은 「인어공주를 위하여」라는 만화를 계기로, 만화를 그리기 시작한 소녀. 그때 당시만 해도 만화관련 학원 등이 활성화되지 않았기에 같은 취미의 친구들이랑 정보교류를 하고, 모임에 참가해서 만화를 배우기 시작한다. 그러다 점점 인터넷이 활성화되기 시작하고, 만화행사인 「코믹」 「마카」 등이 서울에서 열릴 때 참가해서 더 많은 사람들과 활발한 정보교류를 하게 된다. 그러나 만화가에의 꿈을 키우며 교류모임이나 대회에 참여하는 것에 부모님의 반대도 심해서, 많이 싸웠다고 한다. 그런 부모님의 허락을 받을 수 있는 뭔가가 필요했고, 물론 입상하면 대학특전의 영광도 있었기에, 권위 있는 만화대회인 「카툰대회」에 참가할 결심을 하게 된다. 그때 대상을 받게 되고, 쉽게 대학도 가고 부모님의 반대도 극복할 수 있게 된다.

대학에서 2년간의 전문 공부가 끝나고, 졸업과 동시에 이현세 만화가의 문하생으로 입문하지만, 지금껏 해온 이론과 만화세계의 실전과의 갭으로 인해 자신의 길이 아님을 깨닫고, 6개월간의 문하생 생활을 끝 내고 방황하던 중, 친구를 통해 캐리커처 라는 세계를 알게 된다. 그림 실력을 녹슬지 않게 하기 위함과, 돈을 벌어야 했기에 프리랜서로 일하던 중, 일러스트를 하는